ニューズムック GO OUT Livin' Vol.16 2022年3月11日発行

「外も好き、家も好き」な、趣味人たちのおしゃれな暮らしサンプル。

GO OUT Livin'

Vol.16

OUTDOOR
CAMP
SURF
BICYCLE
SKATEBOARD
D.I.Y.
PLANTES
COUNTRY LIFE

楽しい、インドア時間。

好きなモノに囲まれて暮らす、家と部屋。

「住む」より「楽しむ」BESSの家

株式会社アールシーコア BESS 本部 〒153-0042 東京都目黒区青葉台1-4-5 www.bess.jp

理屈では、何かを好きにはなれない。じぶんに素直に、好きなように暮らせる家がいい。

TALO

株式会社 TALOインターナショナル 本社 〒157-0066 東京都世田谷区成城2-36-17 TEL：03-5494-5922

＼新しいログハウス実例集＆オリジナルカレンダープレゼント中！ www.talo.co.jp／

GO OUT Livin' Vol.16

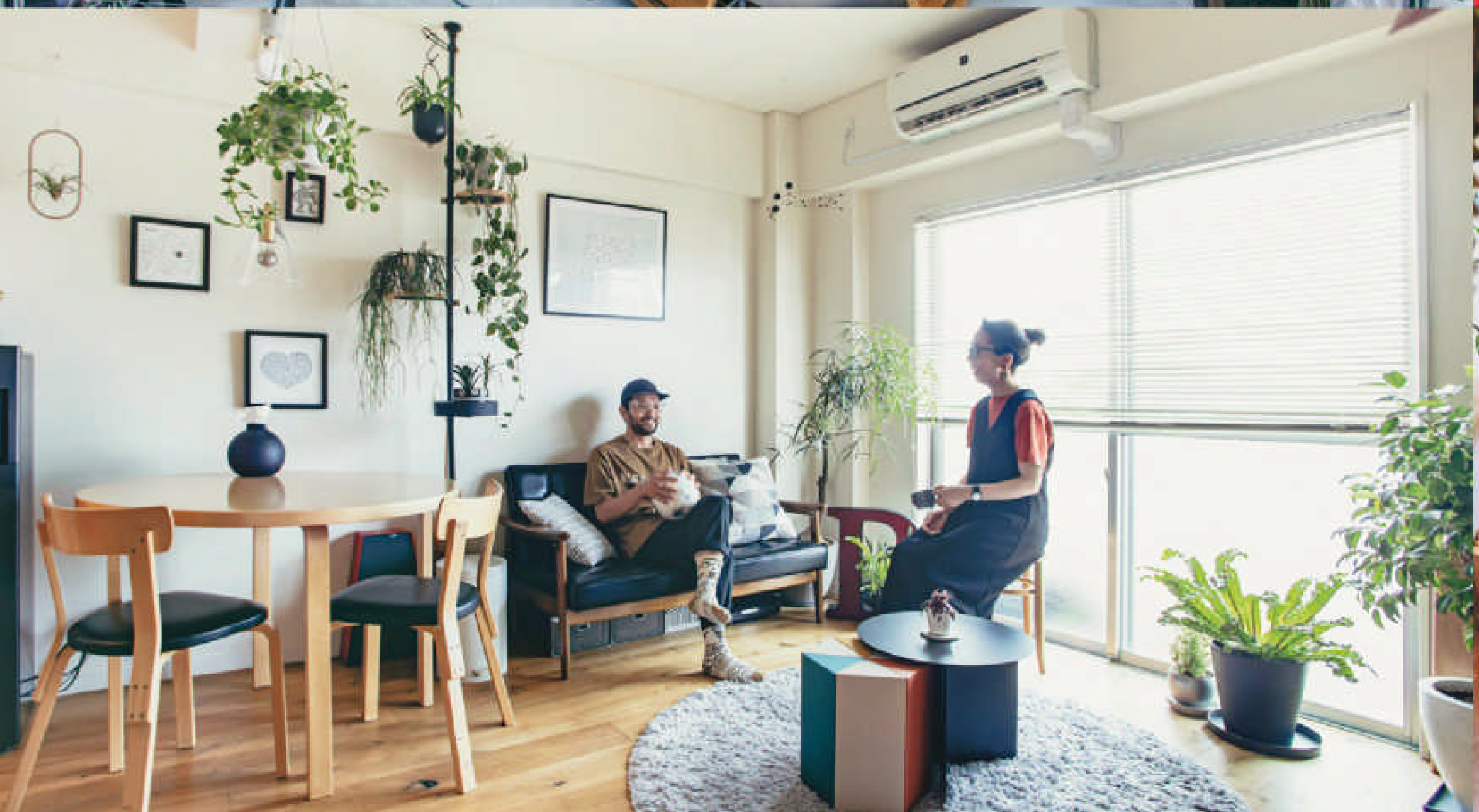
Contents

006　好きなモノに囲まれて暮らす、家と部屋。
楽しい、インドア時間。

01　リノベーションとD.I.Y.で作り上げた、ヴィンテージが馴染む空間。／岐阜県岐阜市
02　ガレージっぽい趣味を匂わせる空間を、ほどよく演出。／神奈川県川崎市
03　初のひとり暮らしは、好きな服だけに囲まれていたい夢のライフスタイル。／埼玉県川口市
04　五感が研ぎ澄まされる、オールセルフビルドの自由な山暮らし。／群馬県吾妻郡
05　シンプルさがキーになる、機能的かつデザイン性に優れたD.I.Y.のある生活。／東京都板橋区
06　部屋にもほのかに漂うキャンプ好きの表情、その理由は“偏愛”にあり。／東京都あきる野市
07　外遊びを存分に楽しむための、ほっとくつろげる家。／北海道札幌市
08　自然豊かな山に囲まれた、築50年の趣あるマンションをセカンドハウスに。／神奈川県鎌倉市
09　セルフリノベーションと“見せる収納”で、ギアに囲まれた生活。／徳島県美馬郡
10　赤茶に色づくウッドと手仕事の品々ににじむ、ネイティブアメリカン。／神奈川県横浜市
11　倉庫のような空間が広がる、新しくも「ヴィンテージ」な家。／神奈川県三浦郡
12　アメリカンヴィンテージのアイテムで彩られた、開放的なリビング。／北海道上川郡
13　モノクロームとグリーンが醸し出す、絶妙なアーバンテイスト。／東京都世田谷区
14　お気に入りのカルチャーに囲まれる自分だけの空間を、イチからD.I.Y.。／東京都目黒区
15　無機質なインテリアとアウトドアの趣が互いに引き立て合う、大きな窓のある家。／長野県諏訪郡
16　友人たちが気軽に集まれる場所としてデザインした自宅。／東京都世田谷区
17　植物を育てるカルチャーに触れたのは、映画『レオン』を観てから。／東京都世田谷区
18　無いなら作る、無駄なく飾る。木の温もりを最大限に活かした空間。／愛知県
19　一期一会の出会が詰まった、コレクションに囲まれるデザイナーズハウス。／東京都練馬区
20　どこを切り取っても、好きなものが目に入るインテリア。／香川県
21　部屋はキャンバス。ウッドという画材で描く、心地よくも都会的な空間。／東京都江東区
22　家具のデザインを手がけていた経験を活かし、家のありとあらゆる家具をD.I.Y.。／千葉県佐倉市
23　木材のよさを生かして、四季の移り変わりを感じられる家へと。／北海道上川郡
24　キャンプ好きこその土間も家族のリビングダイニングも、野外の趣を満点に。／大阪府大阪市
25　直線的な家具の空間に独特なムードをプラスする、植物と照明の“違和感”。／東京都目黒区
26　フルリノベーションで実現した、アメリカンテイストの広いリビングと充実のストレージ。／埼玉県さいたま市
27　種々雑多な“好き”をひとつの絵として昇華させる、余白とグリーン。／東京都世田谷区
28　日常の中に山を感じたいと、山小屋をイメージ。／東京都中央区
29　ポップにして無骨なバイクも溶け込む、リノベーションという最適解。／東京都世田谷区
30　家具や雑貨もバルコニーの植物たちも、“育てる”を謳歌する暮らし。／神奈川県横浜市

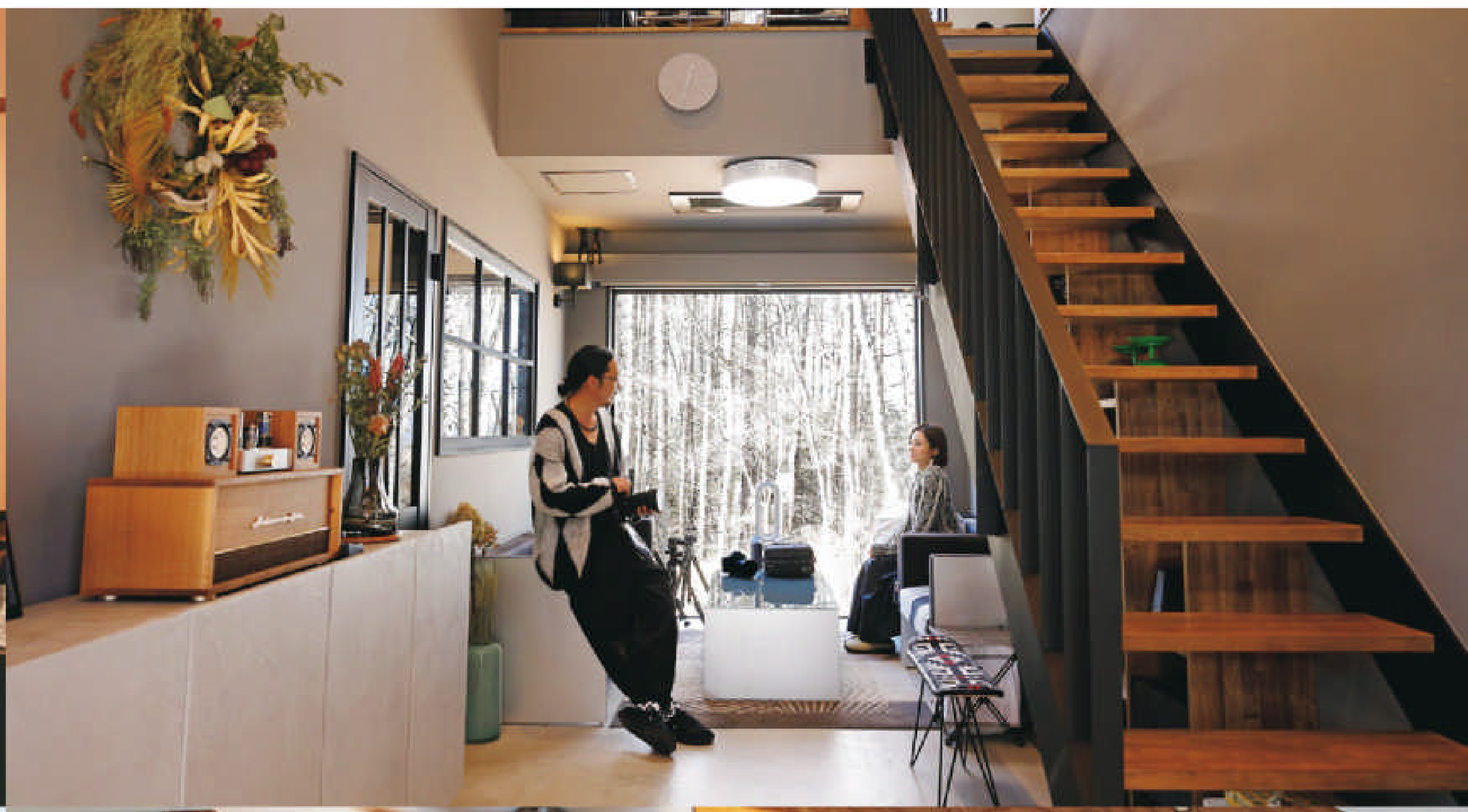
楽しい、
インドア時間。

OUTDOOR
CAMP
SURF
BICYCLE
SKATEBOARD
D.I.Y.
PLANTES
COUNTRY LIFE



好きなモノに囲まれて暮らす、家と部屋。

たくさんの趣味が溢れている世の中。趣味にまつわる道具は多様化して、例えばキャンプ好きなら家でも外でも使える、“シームレス”なアイテムが人気だったりします。こうして暮らしの中にどんどん趣味のモノが増え、好きなものに囲まれて生活できたら最高ですよね。でも、本当にインテリア以外の道具を使って日常生活なんて送れるものなのでしょうか。しかも、普通の家具に混ざってギアが置いてあっても、オシャレにまとまるんでしょうか。そんな訳で今回のGO OUT Livin’でも、皆さんの心配が吹き飛ぶくらいにオシャレに暮らす趣味人の家をリサーチしてきました。「これがボクの趣味だ」と言わんばかりに好きが溢れた楽しい空間。それなのに生活感もあってカッコいい！　皆さんもこの空間づくりのサンプルを参考に、今年こそ楽しく理想のインテリアを作りましょう。



01

Living With My Favorites

会社員
OLIVEさん

SPEC

居住地域　：　岐阜県岐阜市
居住形態　：　一戸建て（持ち家）
間取り　　：　5LDK
居住年数　：　5年
築年数　　：　35年

OLIVEさんの自宅には釣りのロッドやルアー、工具などが並び、趣味を凝縮したアメリカのガレージのような雰囲気を漂わせるが、ディスプレイのセンスによって洗練された印象。ここでD.I.Y.の作業もこなしていて、先日は庭で育てている鶏のために小屋を製作したそうだ。

Photo ／ Makoto Kazakoshi　Text ／ Showgo Komatsu　取材協力：【マルホデザイン一級建築士事務所】https://maruho-design.com/　【KOZUE さん Instagram】@rugme_japan

リノベーションとD.I.Y.で作り上げた、ヴィンテージが馴染む空間。

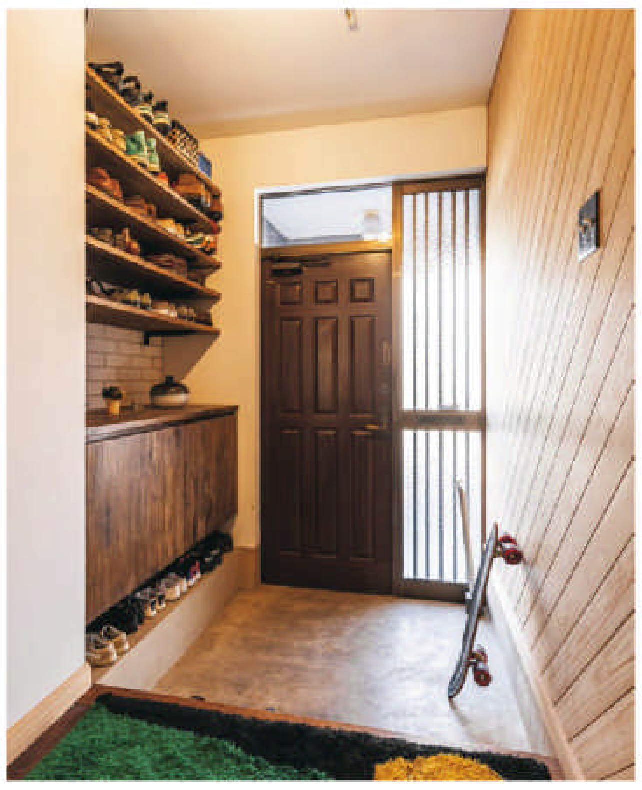
5年前、住居と縫製工場を兼ねていた中古物件を購入してリノベーションし、新たな価値を自邸に宿したOLIVEさん。夫婦共通の趣味であるヴィンテージの趣を工務店にリクエストしたと話す。「雑誌や書籍で見た、古いアメリカの住居を参考にしています。基本的に日本の壁紙は使用せず、アメリカの老舗メーカー〈シャーウィン・ウィリアムズ〉の塗料を使ってもらったり、自分でできる範囲はD.I.Y.しました」。こうして、各所に配されたヴィンテージ家具がよく馴染む雰囲気が完成した。そしてリノベーションの際に要望をもうひとつ。膨大に所有するレコードやCD、洋書を収納できる壁面収納を依頼した。あらかじめ物量を把握し、それに合わせて設置してもらったことで、家中がゴチャつくことなくすっきりと収納できている。

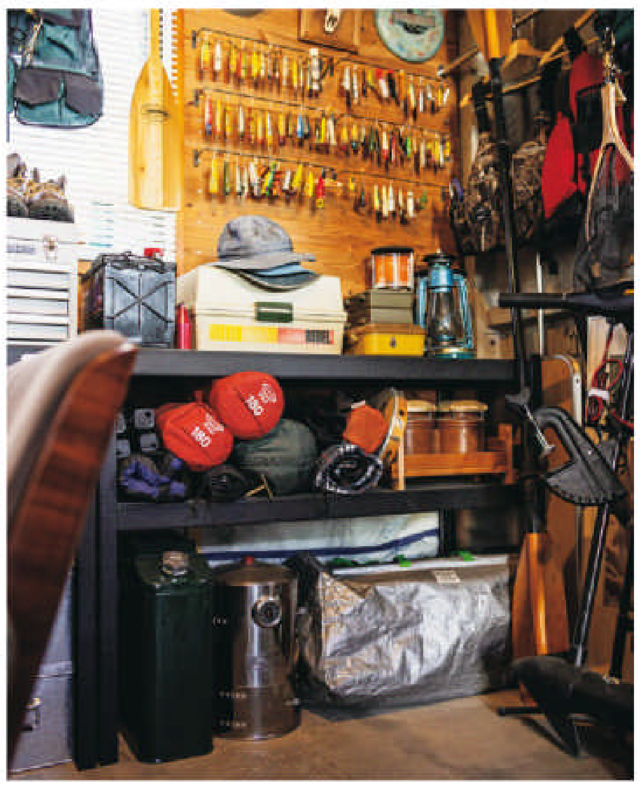
一番のお気に入りは、こちらの趣味部屋。季節によってバス釣りとテンカラ釣りを楽しむOLIVEさんは、この部屋に釣り道具とキャンプ用品、D.I.Y.で使用する工具を収納する。内装は自身で床材を剥がし、コンクリートむき出しだった壁に柱を立てて木材とペグボードを打ち込んだ。そんな好きなものだけをズラリと並べた場景は、誰もが羨むはず。さらには、趣味部屋はここだけではなく、隣接するプレハブにもおよぶ。中を覗くと、そこにはスケートミニランプが。なんと、それもD.I.Y.したというから驚きだ。そこは、KOZUEさんが手掛けるラグブランド〈ラグミー〉の作業場にも使われているとのこと。それらの空間は、さながらガレージに作った秘密基地のようで、ロマンを感じずにはいられない。

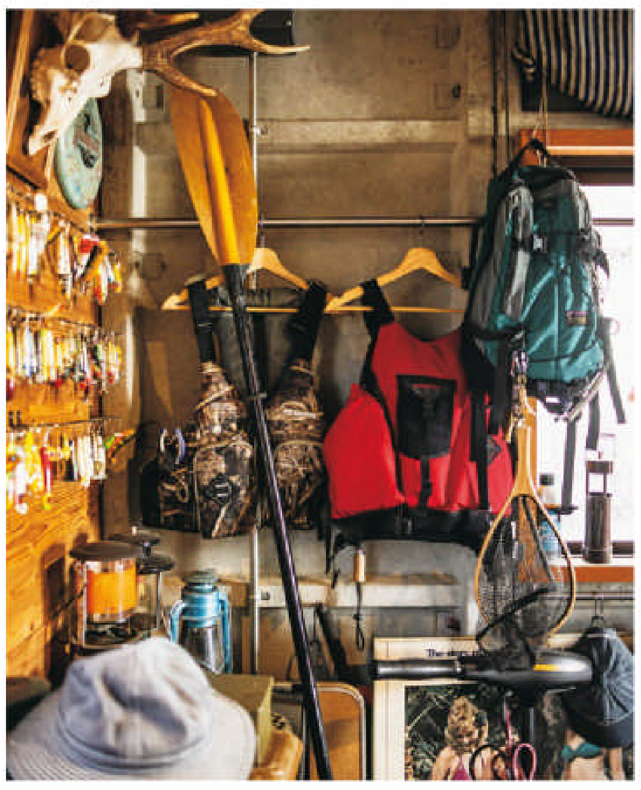
壁は〈シャーウィン・ウィリアムズ〉の塗料でベージュにし、無垢材のフローリングと相まって落ち着いた印象に。〈ラグミー〉のラグと〈アクメファニチャー〉のソファの色味もリビング全体にうまく溶け込み、ヴィンテージのブルーのスパゲティランプがアクセントに映える。

01.〈ロイヤルコペンハーゲン〉の一輪挿しやアメリカに行った際に購入したものなど、ヴィンテージの小物を随所にレイアウトし、インテリアのテイストを加速。　02.食器棚はスウェーデンのヴィンテージで、グラスやプレートもアンティークが中心。　03.ターンテーブルを置いているチェストはアメリカのヴィンテージ。音楽も趣味に持つOLIVEさんはギターも弾き、ジャズやソウルなどのブラックミュージックを好んでいるそうだ。壁に木材を使うつもりだったが、ログハウスのようにウッドの主張が強くなりすぎるのを避けるために、シナ合板を使用してモダンに仕上げている。　04.リビングの隣の書斎の一角。こちらにもスパゲティランプをセット。ハンガーラックは〈パシフィックファニチャーサービス〉で購入したもの。デンマーク製のチェストには、アメリカのフリーマーケットで購入したランプなどをディスプレイ。古いインテリア雑誌から着想を得て設置してもらった窓は、中央で回転する。書斎にエアコンはないが、窓を全開にすると風通しがよくなる。　05.近所の家具屋で購入したチェストと〈リオン〉のロッカーで収納を拡張。　06.システムキッチンに十分な収納があるため、使用頻度が高い最低限の調理器具だけを吊り棚に収納。キッチンのタイルもOLIVEさんによるD.I.Y.。

家の隣にあるプレハブにD.I.Y.で作ったスケートミニランプ。アールにドロップインするプラットホームは、天板を外すと収納できるように工夫されている。敷地内に悪天候でも遊べる場所があるのは羨ましいが、「歳も歳なので、最近はそんなに滑れていませんが……」と話す。







07.書斎にあるヴィンテージの〈ブラザー〉のミシンで、ラグの裏地を縫うKOZUEさん。その横には、大量のレコードや書籍などを収納するために設置してもらった壁面収納。　08.OLIVEさんの部屋では、ヴィンテージの〈ヘドン〉やハンドメイドの〈アブディール〉のルアーをディスプレイしながら収納。ヴィンテージやハンドメイドならではのフォルムやカラーは、もはや芸術の域。バス釣りで使うルアーは、トップウォーターのみを使用しているそうだ。　09.壁はカリフォルニアの住居をイメージして、斜めに木材を配置。アメリカンスイッチプレートを使用しているところにも注目。細部にまでこだわりを感じる。　10.プレハブにある〈ラグミー〉の作業場。ここでハンドメイドのラグを製作している。ターコイズブルーの壁が多彩な毛糸とマッチして、プレハブとは思えないほどオシャレな空間となった。左に配しているターンテーブルは、'70年代の〈エレクトロホーム〉のもの。　11.棚にはテントや寝袋などのキャンプギアを収納。OLIVEさんにとってキャンプは釣りとセットで楽しむものなので、移動しやすいように極力荷物を減らしているそうだ。　12.ボートやカヤックに乗る際に着用する〈パタゴニア〉のフローティングベストと、〈アストラル〉のフィッシングベストをディスプレイ。

02

Living With
My Favorites

アートディレクター
高原弘樹さん

SPEC

居住地域	：	神奈川県川崎市
居住形態	：	メゾネット（賃貸）
間取り	：	1LDK
居住年数	：	2年
築年数	：	2年

フレンチブルドッグのウルくんは、家族へと迎え入れたばかりだという甘えん坊の男の子。「生まれて3ヵ月の幼犬なので、まだまだ育ち盛り。自宅で仕事をする機会が増えたので、普段はずっと一緒にいますね。ちょっとした合間で、ついつい甘やかしてしまいます」。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Tamaki Itakura

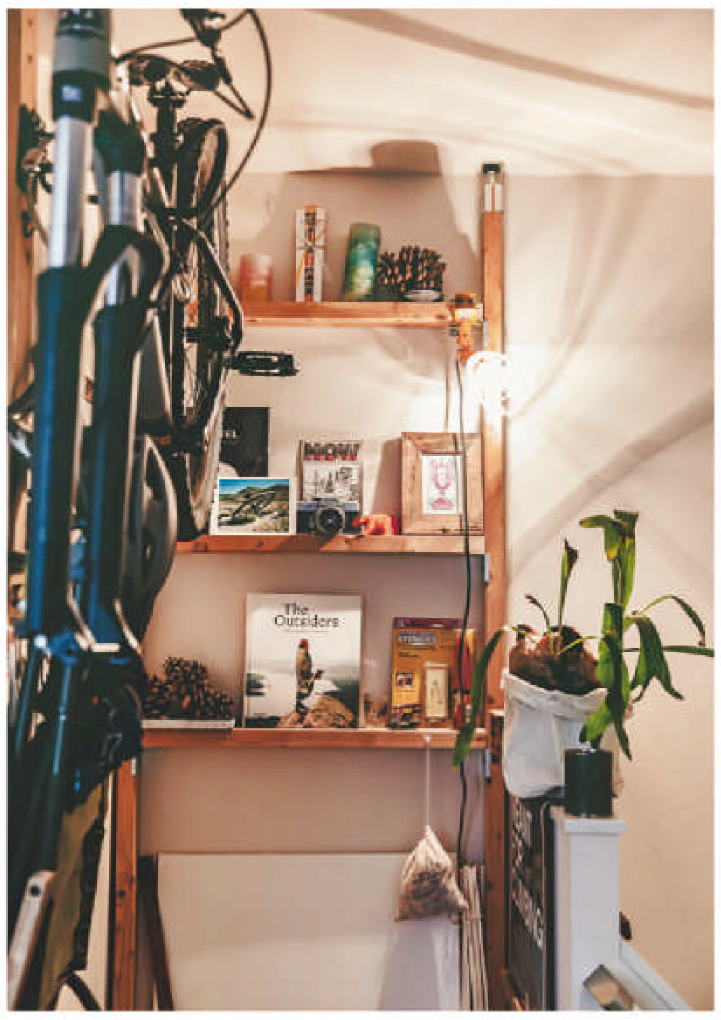
ガレージっぽい趣味を匂わせる空間を、ほどよく演出。

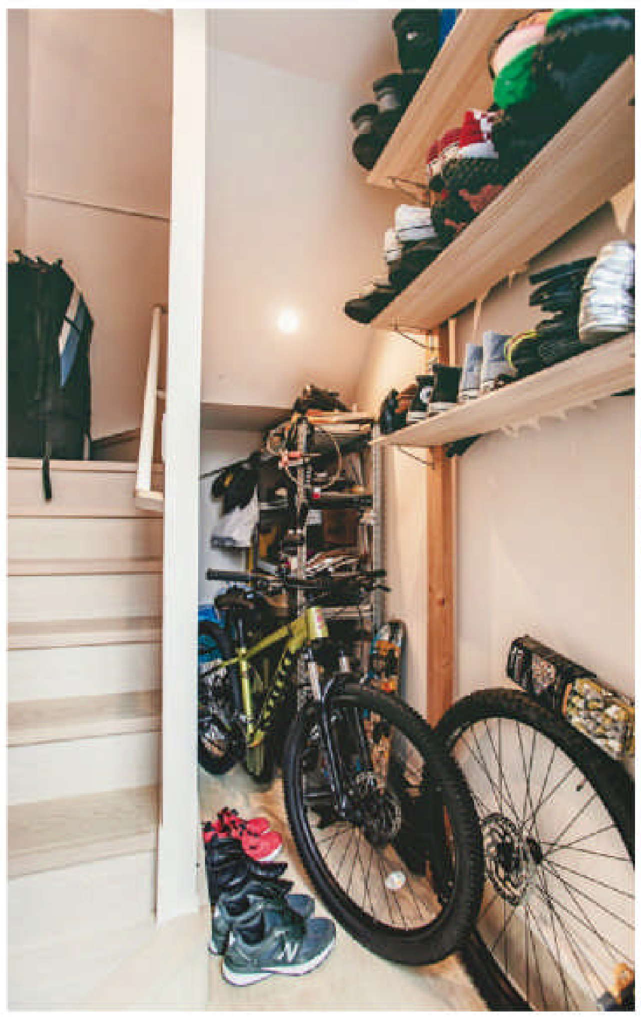
新築のメゾネットハウスへと引っ越してきたのは2年半ほど前。ほどよく自然が残るエリアとしても人気の多摩川からほど近い住宅街だ。1階はシューズ棚とマウンテンバイク、そして趣味のアウトドアギアを収納するパントリー的なスペースが設けられ、階段を上がると大きなウィンドウから自然光が射し込む、広いリビングダイニングへと繋がっている。

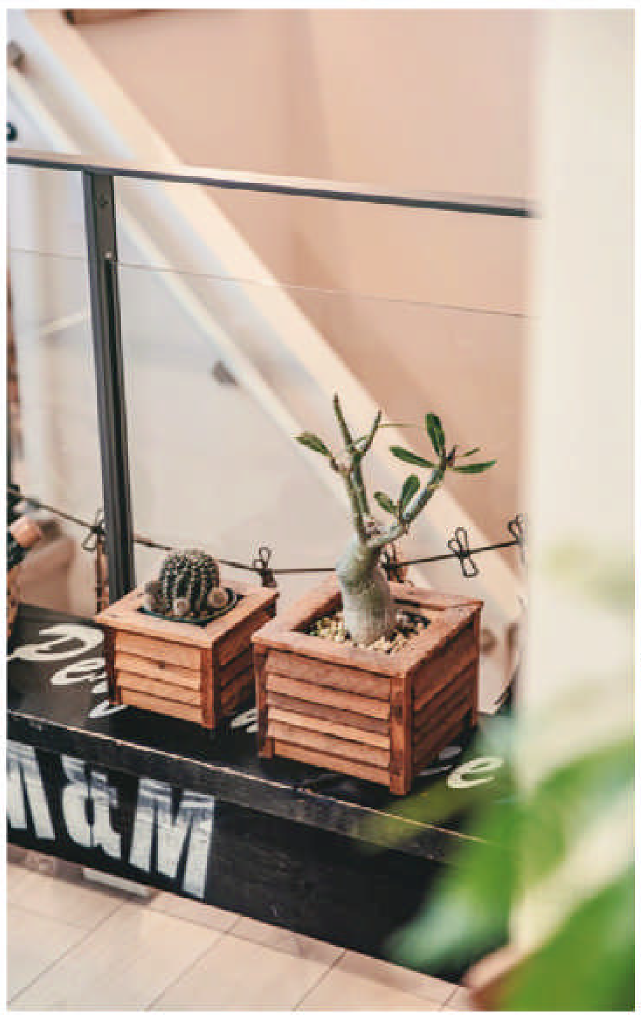
「ガレージっぽい部屋にしたいなと思って、趣味のダウンヒル用のマウンテンバイクやスチールロッカーをレイアウトしました。正直、リモートワークが浸透する以前に引っ越しを決めていたので、自分のワークスペースのことを考えなかったことは、少し誤算でした。リビングの隅に急遽、デスクを整えることで解決しましたが、それ以外は2面からの大量の採光が望めますし、バルコニーも広くて気に入っています」。

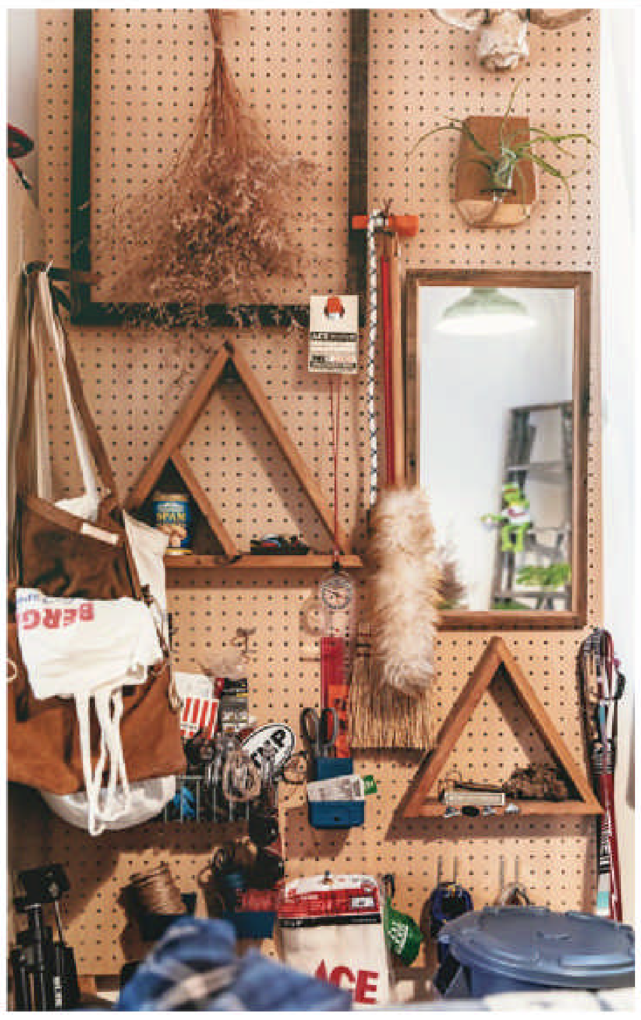
スケート、キャンプ、クライミングに続き、最近、ハマっているアウトドアアクティビティがダウンヒル。この空間の中で、まず目に飛び込むのは、壁面に設置されたマウンテンバイク。ガレージっぽい空間作りをイメージしていたこともあり、自転車の収納を部屋のインテリアとして活用し、かつスチールロッカーが、ガレージ感を増幅させている。

「ガレージは、あくまでもイメージ。普段生活する場所であり、ましてやリモートワークで、ほぼ一日中、自宅に居ることが多くなったので、部屋のインテリアもやり過ぎないことを心掛けました。あとは少し誤算だったワークスペースを、より快適に、仕事がしやすい環境に変えていこうかなと思っています」。









01.壁に穴を開けずに工事不要で棚を設置することができるピラーブラケット。パーツを2×4の角材に取り付け、床と天井を突っ張り棒の要領で固定することで柱を作り、木材を合わせて棚を製作。高原邸では思い入れのあるアートブックや雑貨などが飾られている。　02.リモートワークになるとは、つゆ知らず。空間の隅に急遽、設置したワークスペース。現在はもっと快適に仕事ができるように検討中なのだとか。　03.リビングダイニングの中央に鎮座する大型のソファは〈ウニコ〉のもの。座面が大きいため、ベッドのように横になってリラックスできるのもよし。　04.アメリカンなスチール製のランドリーカート。バスケットの中には、ブランケットやファンの間では希少とされる、オフィシャルの〈セサミストリート〉のぬいぐるみたちが収納されている。　05.美しく整頓されたキッチン内。スタッキングされている皿群は、ここ数年注目されている〈波佐見焼〉。上部の戸棚には、使用頻度の少ないそのほかのキッチンツールが収められている。　06.自宅のドアを開けると1階は収納部屋。このパントリーには、シューズのほか、街乗り用のマウンテンバイクやキャンプ用品など、アウトドアアクティビティで活躍するアイテムの収納部屋となっている。　07.ガレージっぽさを大いに演出するスチールラックは〈リヨン〉のもの。壁面には、ピラーブラケットを柱にパンチングの板を壁にすることで、気兼ねなく釘を打てるようにしている。　08.部屋には適度なサイズのグリーンがインテリアとして置かれる。サボテンと塊根植物が植わる鉢は〈リクレイムドワークス〉のプランター。　09.パンチングの板を利用し、壁面に飾られる想い入れのある小物たち。日常的に使用するツールもこの部屋ではもはやアートのようだ。

テレビ台として使用しているのは、〈メタルシステム〉のスチールシェルフ。テレビ下に置かれるホワイトの収納箱は、バンカーズボックスで有名な、〈フェローズ〉のもの。壁面に飾られたアートは、アメリカ遠征のクライミング時に撮ったフォトグラファー小関新平氏の作品。

ダウンヒル用のマウンテンバイクは、カナダの〈ロッキーマウンテン〉。そのほかアウトドアチェアやクライミングのザックなど、アウトドアアクティビティに必要なギア類も部屋のインテリアとして壁面にレイアウトすることで、ガレージっぽい空間に仕上がっている。

03

Living With
My Favorites

ヒノヤ プラスマート スタッフ
佐藤哲彰さん

SPEC

居住地域 ： 埼玉県川口市
居住形態 ： アパート（賃貸）
間取り ： 1K+ロフト
居住年数 ： 2年
築年数 ： 20年

ロフト物件ならではの高い天井を有効利用し、〈リーバイス〉が1950年代に販売促進用として手掛けた大きなデニムバナーの限定再販品を配置。壁面にはポールを設置し、簡易のハンガーレールを増設することで、空間を一周するかのようなレイアウトを実現させた。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Tamaki Itakura

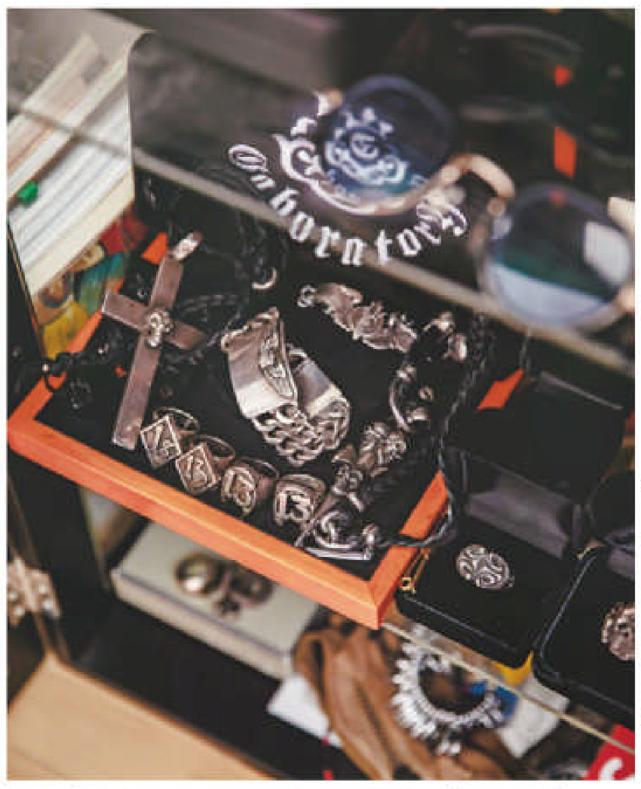
初のひとり暮らしは、好きな服だけに囲まれていたい夢のライフスタイル。

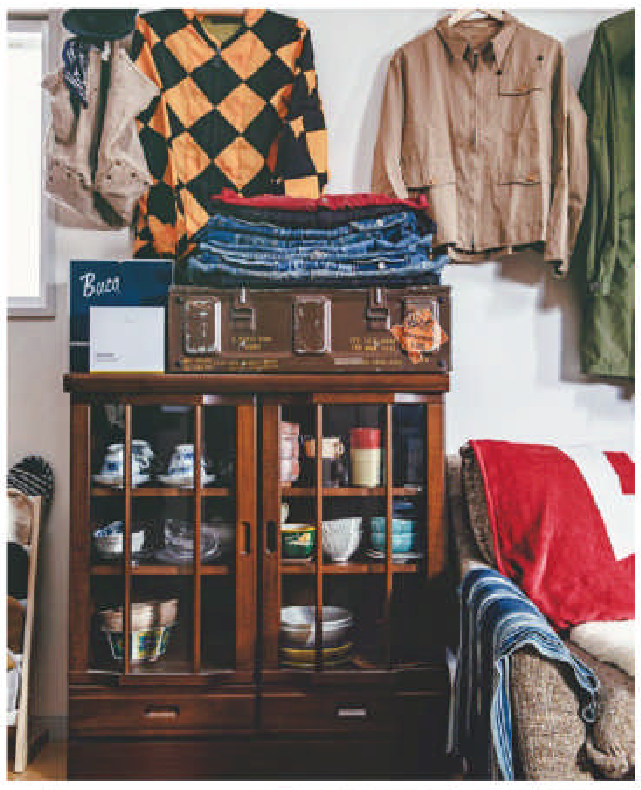
ファッションに目覚めたのは10代半ば。誰もが自分のファッションに疑念を抱き、見つめ始める年齢でもある。その始まりは人それぞれで、好きな映画、アーティスト、身内や友人らに感化されることがほとんどだ。「ファッションに興味を持った決定的なきっかけは、あまり覚えていないです。ただ、自分のどこかで他人とファッションで被りたくないというのがあったのか定かではありませんが、気づいたら都内近郊の古着店に通うようになっていたんです」。

東京・上野を代表するアメリカンカジュアルショップ『ヒノヤ プラスマート』に勤務する佐藤さん。大好きなファッションの職に就き、約10年。日に日に着道楽として磨きがかかっている。彼が住む自宅は埼玉県川口市にある。聞けば、ひとり暮らしは今回が初めてで、それまで実家から職場へと通っていたが、職業柄、服のコレクションも多くなり、30歳を機に自立を決意。好きな服だけに囲まれていたい夢のライフスタイルを手に入れたのだ。間取りは13畳の1Kだが、ロフト付きで天井も高く服の収納にも困らない、佐藤さんにとっては充分な物件だ。「とにかく服が多いので、収納力の高いクローゼットの有無は必須条件。不要なものはすべてロフトに収納し、お気に入りの服だけに囲まれるような部屋にしたかったんです」。

そんな彼の言葉どおり、部屋を一周するほど壁全面に服が掛けられ、好きな服に見守られている印象。自身の店にて扱う服はもちろん、希少なヴィンテージも多く所有し、それらを毎日眺めながら送る生活が佐藤さんの日常なのだとか。

3面で採光でき、日当たり、風通しは充分。湿気を嫌うウエアにとっては好都合だが、反面、強い陽射しが照りつけるため日焼けなどには特に気を付けている。写真奥はインナーとして活躍するベスト、お気に入りの1960年代製〈バーバリー〉のマックコートが掛けられる。

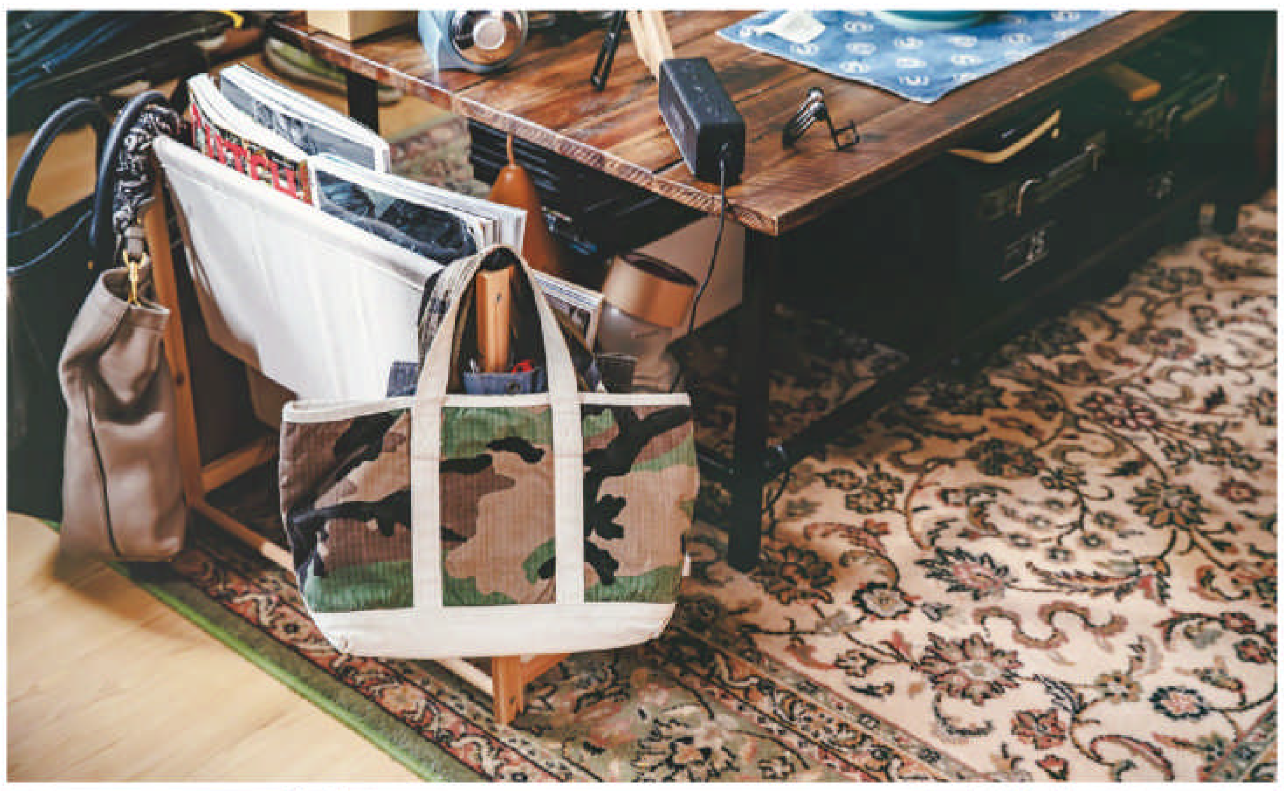


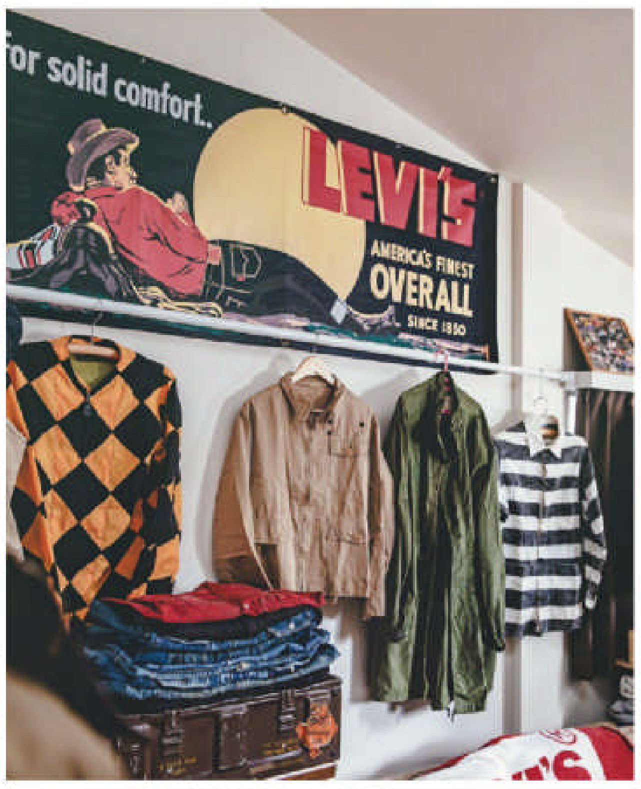


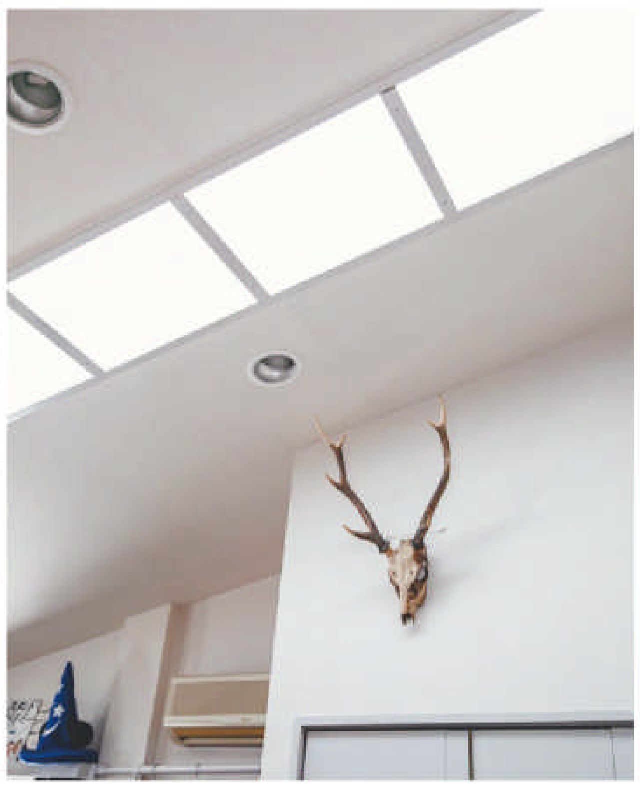
01.玄関のシューズラックだけでは収まりきらず、テレビを配置するローボードの収納部分にも、〈コンバース〉のチャックテイラーをはじめとするお気に入りのスニーカーたちが並ぶ。その上には色違い、太さ違いで揃うレザーベルトを陳列。　02.アメリカ・ベニスビーチ発のシルバージュアリーブランド〈ガボール〉は、佐藤さんがコレクションするアイテムのひとつ。　03.大きな家具が揃わない佐藤邸の中で、ひと際目を引く古いキャビネットは、祖母の家で長年使っていたものを食器類とともに譲り受けたそう。そんなキャビネットの上には、ヴィンテージ市場でも高騰中のデニムジャケットが複数枚覗く。　04.玄関の扉を開けたシューズラックは、すでに飽和状態。正面の壁に飾られるアートは、佐藤さんの祖父が描いた油絵なのだとか。　05.ゴミ箱として使用するために手に入れたヴィンテージのオイル缶。意外に使いづらく、いまや部屋のオブジェと化しているが、エイジングの赤が空間のいいアクセントとなっている。現状、1足しか置けないがブーツ置き場としても活用している様子だ。　06.ロフト付きの物件ではあるが、寝室は窓側にベッドを配置。本棚にはインダストリアルな照明が設置され、夜間の読書などで活躍する。額装した写真はお気に入りの映画『スタンドバイミー』のポートレイト。

01 02 03
04 05 06

さすがはプロの整理整頓術。ヴィンテージのはしごをキャビネットとして代用し、うまく収納。下段にはデニムパンツ類、中段には〈チャンピオン〉のリバースウィーブが美しく畳まれ置かれている。隅にあるハンガーポールには、レザーウエアをまとめてハンギングした。







07	08	09
10	11	12

07.部屋中央に鎮座したテーブルの脇にはマガジンラックが置かれ、両サイドに小ぶりのトートバッグを掛けて収納。　08.大きなバナーが配置される壁面はミリタリーのコーナー。佐藤さんの職場ではミリタリーブランドの〈バズリクソンズ〉を取り扱っているため、オリジナルのヴィンテージを見比べることで、よりミリタリーものに造詣が深まるのだという。　09.キャビネットの上に乗せられたヴィンテージのトランクケースの上には、ファンから絶大な支持を集める〈リーバイス〉の507XXなど、希少なデニムジャケットが美しく並ぶ。　10.ソファから玄関の方角の壁面には、2階のロフトへ上がるはしごが設置され、その隣のトルソーに〈バブアー〉のジャケット、ミリタリーのオーバーオールを着用し、飾られる。ショップのディスプレイさながらの一角に。　11.斜めに駆け上がりのロフトの天井は吹き抜けになっており、自然光が部屋を明るく照らしてくれる。また壁面には鹿の頭部の骨標本が飾られる。高い天井のため、圧迫感などなく生活できる。　12.テーブル脇にはターコイズブルーにエイジングしたデニムワークパンツ。こちらは趣味で集めているものだそうで、購入してから1度も着用していないのか、購入時のタグが残されたものも。服好きならではの光景だろう。

04

Living With
My Favorites

Tiny kitchen and counter代表
古平賢志さん、**夏恵**さん

SPEC

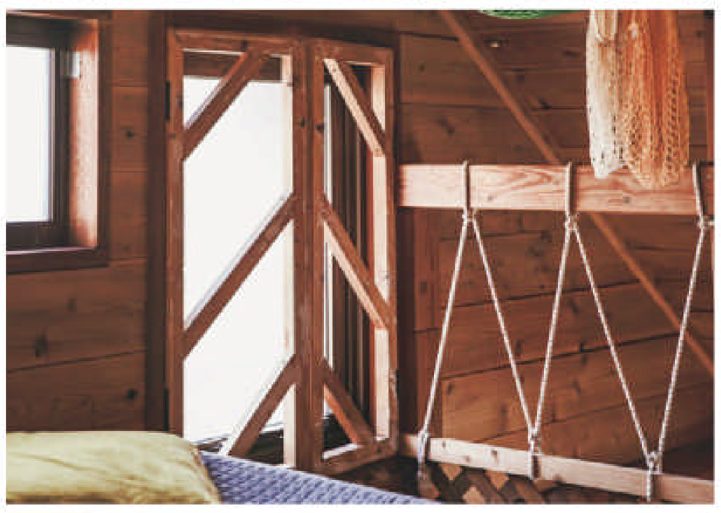
居住地域	:	群馬県吾妻郡
居住形態	:	一戸建て(持ち家)
間取り	:	1LDK
居住年数	:	約1年
築年数	:	25年

Photo／Chie Kushibiki Text／GO OUT

五感が研ぎ澄まされる、オールセルフビルドの自由な山暮らし。

4坪の小さなレストランを営むなど、松戸市を中心に活動するフードユニット『テシゴト』の古平さん夫婦。約1年前に賢志さんの父親から地元・群馬県の山中の小屋を受け継ぎ、2拠点生活をスタートさせた。「時勢的にレストランでの活動に限界を感じていたタイミングで、山小屋を譲り受けました」。実はこの小屋、父親のセルフビルド。「子どもが自由に過ごせる場所を」という思いで土地を探し、土壌の整備から丸太の皮むき、基礎工事など20年ほどの歳月を掛けすべて手作業で完成させた。「ここは電波がほとんどなく、強制的に何もできない。完全にクリアな状態で、本当に力を抜いて過ごすことができます」と話す山での時間だが、この不便さが夫婦の食に対する考えに変化をもたらした。「テレビもスマホもなく食事中はしっかり食に向き合うことができる。五感を研ぎ澄ませて生活していると不思議と食事＝栄養を体に入れる、という感覚が生まれてきました」。さらに周辺地域は湧水が多く、鮮度の高い地元の野菜が手に入りやすい最高の環境だ。そんな体験が元になり、現在は〝MOKUJIKI〟という食べる瞑想体験を取り入れたメニューを店舗で展開している。「山では周囲の雑音がなくなり、心が自由になる。いかに周りに気を遣って生きていたのか実感しました。今後は食と山小屋体験を通じて、いろんな人にこの自由さを広げていきたい。今はこの小屋が〝ラボ〟のように機能して、どんな活動ができるか実験中です」。古平さんが父から受け継いだ自由な時間は、今後は古平さんの手を通じ、世の中に広まっていくのだろう。

3～4年かけて皮を剥いでいったという丸太。古平さん自身も幼少期に小屋作りの手伝いでこの山を訪れた記憶がある。「電気は通してますが、下水がなく湧水を汲んで使います。実は最近雨水を再利用できるトイレを父親が作っていました。本当にすべて手作りです」。



01.山小屋の隣に作られた機材用の倉庫も、もちろん手作り。「いずれは隣にウッドデッキを増設しタープを取り付けて、外で食事が楽しめる空間を作ろうと思っています」。　02.冷暖房がないため薪ストーブが活躍。後ろに置かれた皿は、群馬で活躍する同年代の作家『関太一郎』の器。「実は、彼とは前に住んでいた家の元住人だったことがきっかけで仲良くなりました」。　03.小屋を囲む形でウッドデッキが取り付けられている。ここで味わうタバコは格別だとか。「山小屋では都心で食べる食事と味の感じ方が違うんです。空気や水で味付けされている感じがします」。　04.キッチンとして『ユニフレーム』のカセットコンロや水道がわりにジャグを設置し、『ヒューナスドルフ』のタンクを使い汲み置き。動物避けとしてスピーカーから常に音楽を流していた。　05.手すりはロープを使い格子が付けられていた。窓の建具には和紙が貼られていたが、古平さんがリメイク中。　06.「非日常を味わえる空間を提供する山小屋」を目指し、インテリアはヴィンテージテイストでまとめている。飾りとして古いランタンなどを吊るし、雰囲気よく。　07.役所の什器だったというテーブルを重ね、キッチンラックとして活用。「食器などはお気に入りを選んでもらえるように、種類を多めに置いています」。　08.壁に飾りとして掛けられた古い登山用のフレームバッグは、以前車のない頃のイベント出店時に活躍していたという、古平さん思い出のアイテム。　09.外には焚き火用スペースも確保。アウトドア用チェア2脚と大きめの焚き火台を設置。ここで湯沸かし、調理なども行っている。　10.父親が作ったベッド。移動できないため、現在はソファ的に使用中。クッションやラグはパキスタンのもの。バックパッカーとして旅してきた古平さんらしいセレクトだ。

大きなメインテーブルは下仁田にある『古道具・熊川』にて購入。中央のランプもイギリスヴィンテージだ。こうした非日常的な空間の中で五感を使い食を感じてもらえるよう活動中の2人。現在の様子はインスタグラムのアカウント(@yamanofoodlabo)でも発信中。

2階はコットを使った寝室。奥は古平さん用で軍モノのデッドストック。手前は夏恵さん用でウッド製だとか。ここに寝袋を敷き就寝する。収納などがないため、コットの下や屋根にアイアンハンガーを取り付け、服を吊るすほか籠を使って小物を上手に収納していた。

05

Living With
My Favorites

plus9_lifeさん

ミキさん

SPEC

居住地域	:	東京都板橋区
居住形態	:	団地（賃貸）
間取り	:	1LDK
居住年数	:	1年
築年数	:	約50年

もとは畳の2LDKだった空間は、1LDKにリノベーション。エアコンは1基のみだが、窓も大きく日が差すほか、冬場は〈コロナ〉の灯油ストーブで家中が十分暖かくなるそう。中央に置いたソファはPlus9_lifeさんが前の家から使っていた〈無印良品〉の2人掛け。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ GO OUT　取材協力：【Instagram】@ plus9_life

シンプルさがキーになる、機能的かつデザイン性に優れたD.I.Y.のある生活。

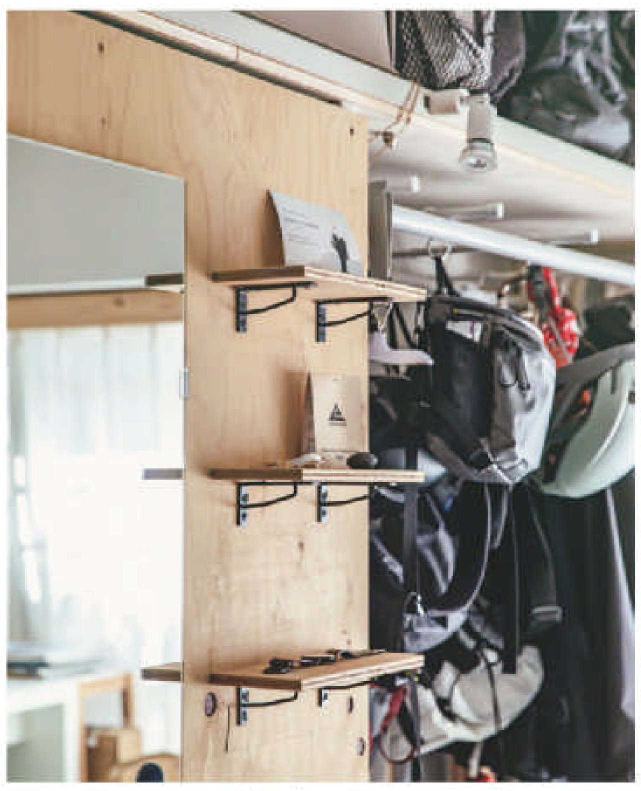
UR都市機構と『無印良品』がダッグを組んで生まれた、リノベーション物件に住むカップル。イス以外すべてD．I．Y．したそうだが、まるで造り付けられていたかのように部屋のテイストにマッチした家具や収納が並ぶ。「ここの収納は壁上のシェルフだけとシンプル。そこで下の空間に突っ張り棒を使った収納を作りました」。偶然にも登山という趣味が同じだった2人。アウトドアギアのスペースも洋服収納も2人分をまとめ、全体をスッキリと見せている。

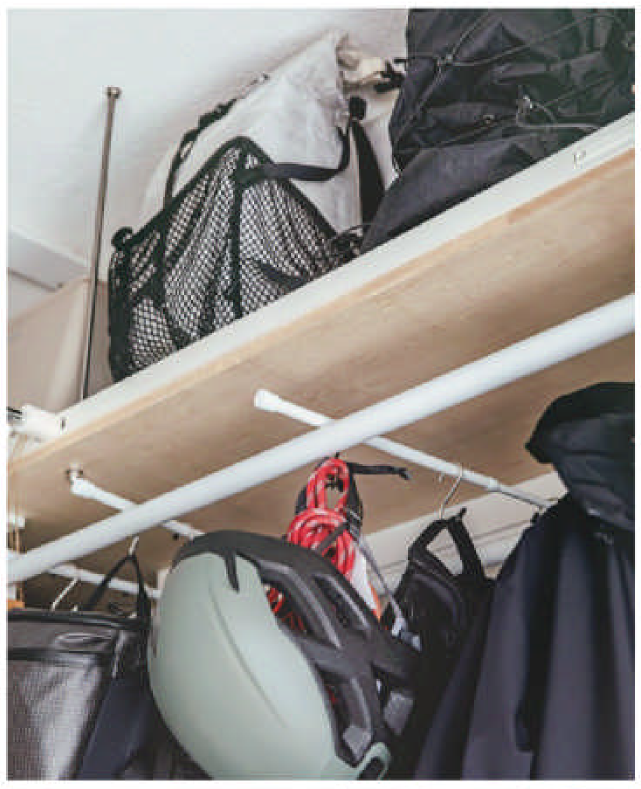
そんな2人の共通の趣味である登山だが、実はバラバラに行くことが多いとか。「登山口までは一緒で、あとはお互いのペースで登って帰りに合流することも。お互い知識も経験もあるから、いい意味で放置しても安心できます」と話すが、この自由さも空間全体にまとまりを生んだ秘訣のように感じる。

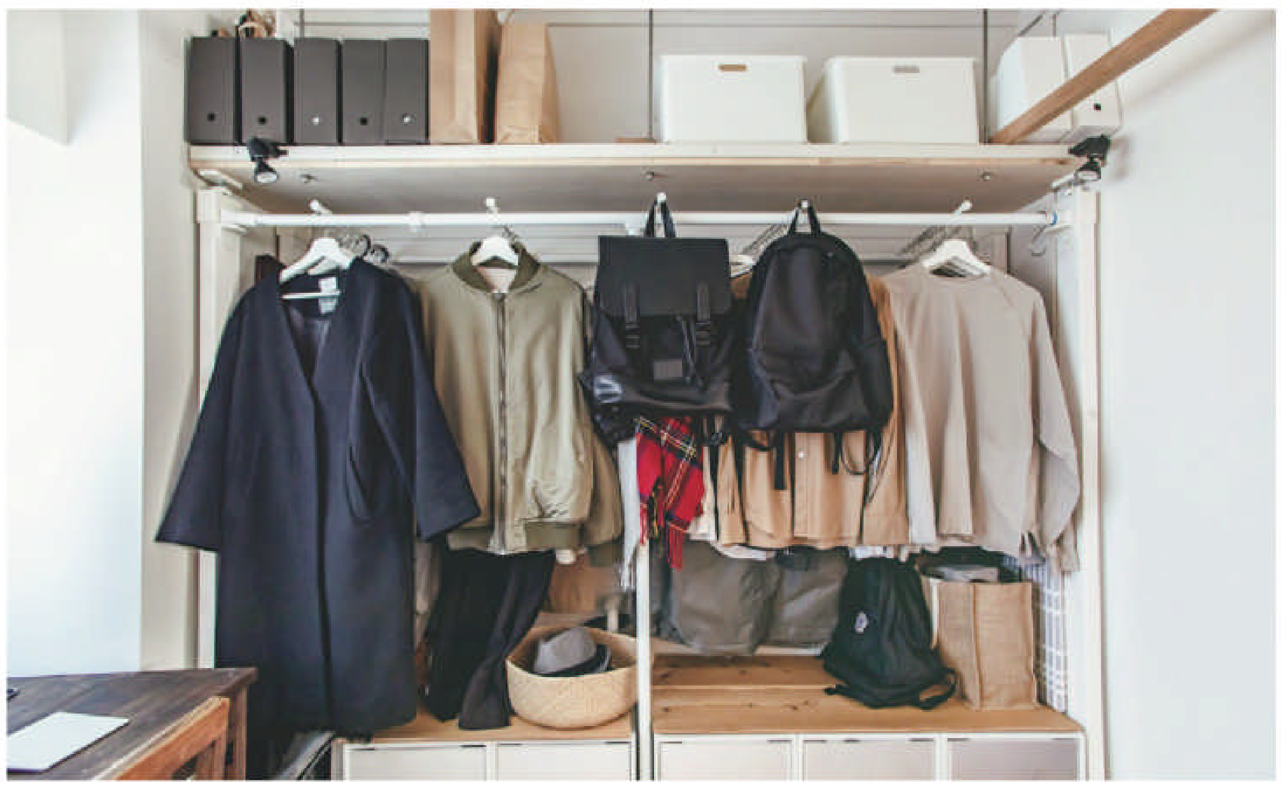
インテリアは主にplus9_lifeさんが主に手掛けているが、ミキさんはすべてお任せしたそう。「私がインテリアにこだわりがなかったこともありますが、彼が前に住んでいた家も同じ『無印良品』リノベーションの団地。勝手を知っていると思って」。前の部屋も、現在と同様に収納もデザインも最低限だったとか。そのシンプルさが本格的にD．I．Y．を始めるきっかけだとplus9_lifeさんは話す。「使い勝手も自分仕様にでき、工夫次第でいくらでも変化が付けられる。インテリアに統一感も出ます」。

最近ではキッチン収納の作りを変えるなど、今の気分や使いやすさによって姿を変えているこの部屋。2人の暮らしに合わせ、今後も自由に進化を続けていくのだろう。

ダイニング側のシェルフ下は、共通の趣味である登山ギアが置かれたスペース。2×4材を2本立て、突っ張り棒を取り付け。さらに縦に突っ張り棒を乗せハンガーラックに。plus9_lifeさんはこのほかバックカントリースキーも大の趣味。最近はグラベルバイクにも挑戦予定。







01.寝室奥の1室は、クローゼット兼書斎。ヴィンテージライクなデスクは、古道具屋で見たデスクを真似て自作したというから驚き。同テイストのイスを合わせ、統一感もアップ。 02.上写真のギア収納スペースに作られた扉には、ホームセンターで購入したラック用パーツや取っ手、『イケア』で購入した鏡を取り付けた。中には2×4材で棚が付けてあり、細々としたD.I.Y.アイテムが収納されている。 03.こちらが突っ張り棒を活用したハンガーラック。短めの突っ張り棒を縦に置き、専用バンドで固定させた。S字フックを使えばバックパックやロープなど、さまざまなギアも引っ掛け可能に。 04.部屋中央に置かれたベッドもなんとD.I.Y.。2×4材と建築用パーツで2つフレームを作り、マットレスを乗せている。D.I.Y.の細かな仕様については自身で作成しているブログ（https://plus9log.net/）に詳しく書かれているので、気になる人はぜひチェックを。 05.洗面所の横はSPF材で作ったシェルフのほか、角材を乗せただけの天井収納が。同様の仕様で寝室部分に洗濯用ラックが置かれているが、生活感も出ない上に手軽と、真似したいアイデアのひとつ。 06.寝室奥のシェルフ下は洋服収納に。ギア収納と同様の作り。下にある〈無印良品〉のPPケースには床材の天板を載せるだけで、収納になり見た目も◎。

キッチン後ろの壁面収納は、最近変えたばかりだそう。2×4材の柱に合板を打ちつけ、フックや包丁マグネットを取り付けたもの。下には以前から使っていた自作のシェルフが置かれ、キッチン家電などを配置。上は明るい色、下に重い色を置くことでメリハリも出る。

07.アイランドキッチン横には、りんご箱を3段ずつ重ねたラックを配置。食器やplus9_lifeさんの長年の趣味であるカメラが置かれている。またキッチンとボックスの間に合板の板を挟み、シンクの水跳ね防止、小物収納と2役こなしている。　08.長い天板を使用したキッチン収納は、角材を4角のフレーム状に組み立て脚として固定している。電子レンジや炊飯器などの重さがあっても問題なし。　09.軽めの杉材をL字型に組み、カーテンレールと天井の隙間に乗せた目隠し。麻紐で固定しているそう。何気ない場所も抜かりなく手を加えている点はさすがのひと言。　10.ヘッドボードも工夫がぎっしり。こちらも合板をL字に組み、壁とベッドで支えている。中にはPCなどの箱が隠され、収納としても機能している。またコンセント通しのスペースも作られ、スマホなどの充電もバッチリ。壁には上田で見つけた鹿の骨を飾りとして吊り下げていた。　11.ベッド下の〈無印良品〉のPPケースには、目隠しとしてplus9_lifeさんが撮影した写真をプリントし中身が見えないよう工夫が。さらに、空間として違和感を感じさせないため、床に置かれたボックスには地面に近い写真を選ぶなど、参考になるアイデアばかり。　12.備え付けのカウンターキッチンは、テーブル部分が可動式。2つを向かい合わせに配置し、空間を広く確保している。

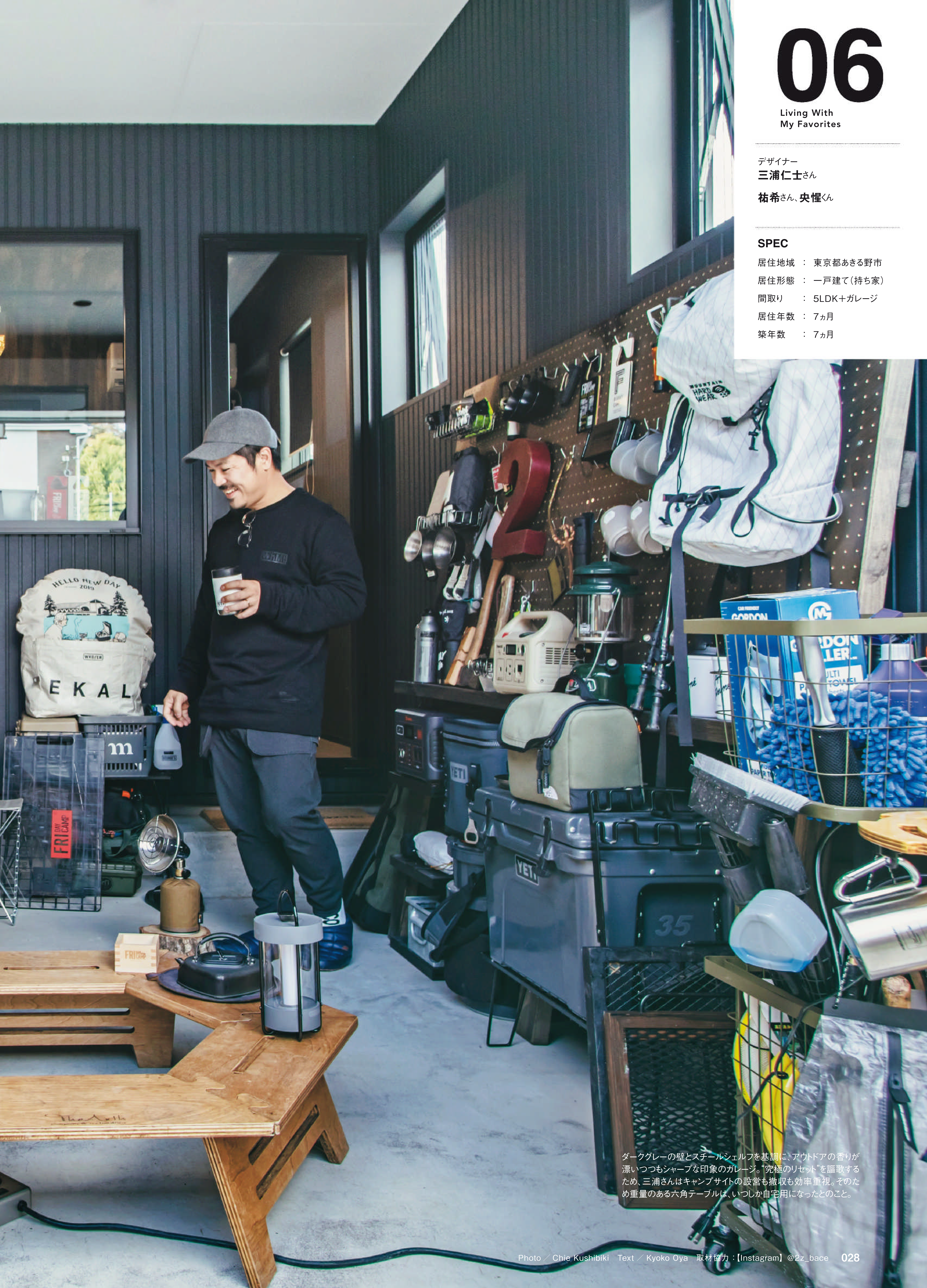
06

Living With
My Favorites

デザイナー
三浦仁士さん
祐希さん、**央惺**くん

SPEC

居住地域	：	東京都あきる野市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	5LDK＋ガレージ
居住年数	：	7ヵ月
築年数	：	7ヵ月

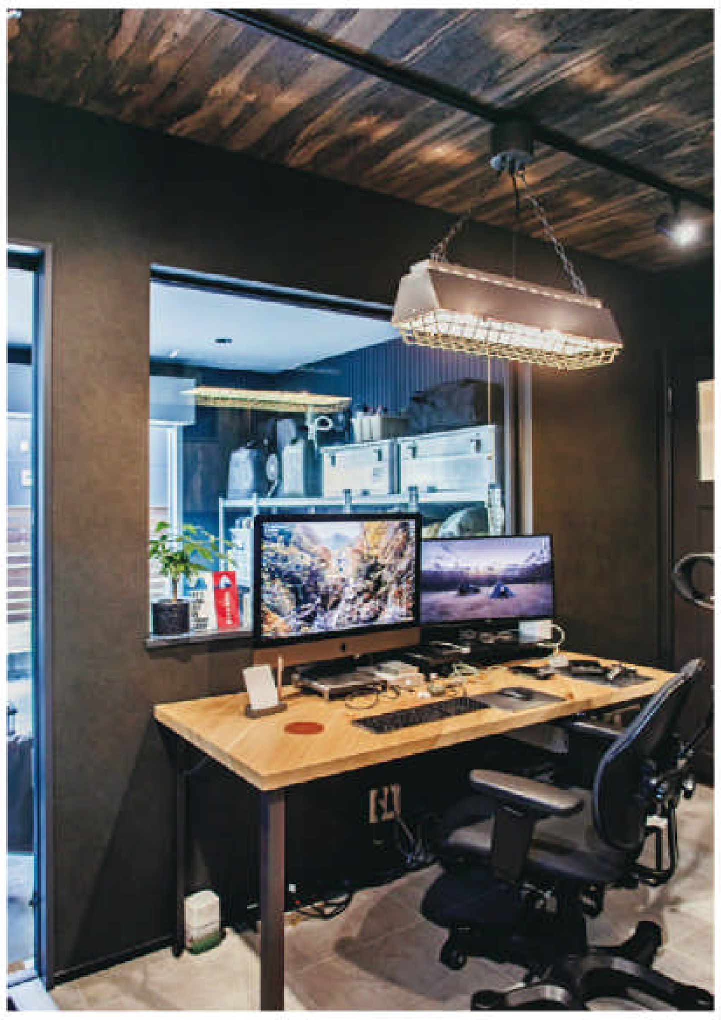


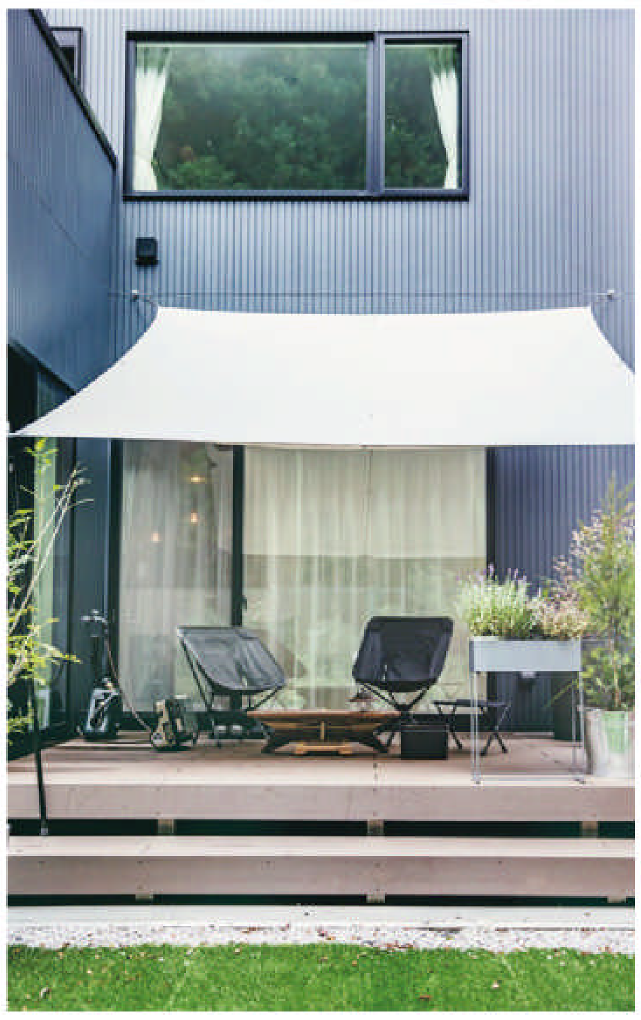
ダークグレーの壁とスチールシェルフを基調に、アウトドアの香りが漂いつつもシャープな印象のガレージ。“究極のリセット”を謳歌するため、三浦さんはキャンプサイトの設営も撤収も効率重視。そのため重量のある六角テーブルは、いつしか自宅用になったとのこと。

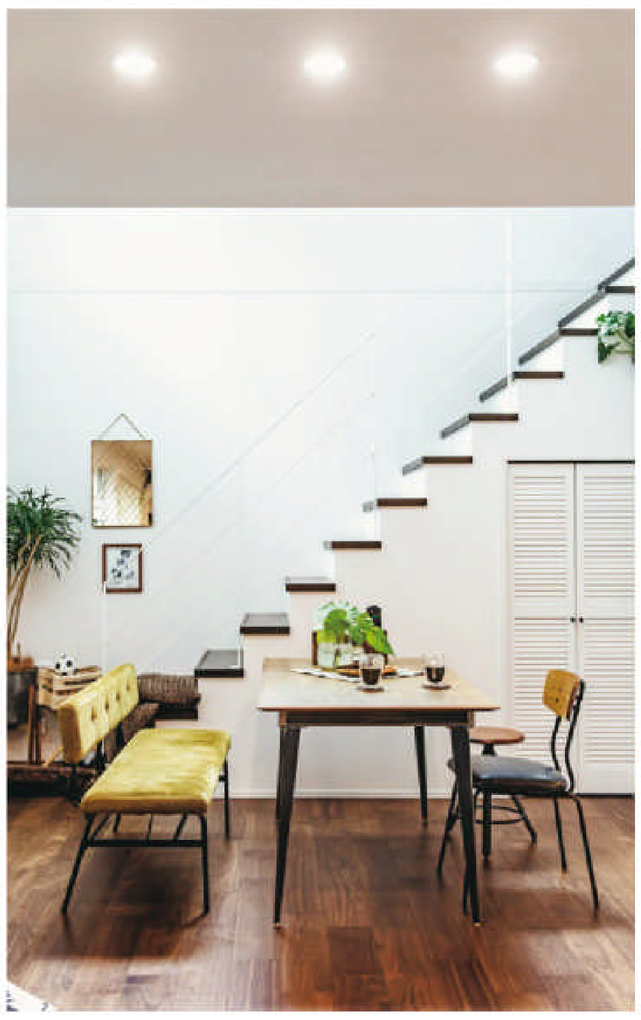
部屋にもほのかに漂うキャンプ好きの表情、その理由は“偏愛”にあり。

外遊び好きなら一度は目にしたことがあるだろう、#Fridaycampのハッシュタグ。「金曜の夜からキャンプを楽しもう」という意図だが、このハッシュタグの生みの親こそが三浦さん。筋金入りのキャンプ好きゆえに所有するギアも多く、引っ越しから約7ヵ月という新たな住まいはキャンパー憧れのガレージ付きだ。「ボクにとってキャンプは、究極のリセット行為。それゆえにサイトにも落ち着きを求めるというか、派手な色のギアはあまり好きじゃなくて」。その言葉どおり、ガレージに並んだギアにヴィヴィッドなカラーリングは皆無。グレーの壁を基調にシャープな男っぽさが漂い、三浦さんはどんなサイトインテリアを好むのか、ガレージの様子から見て取れる。

それが打って変わって、リビングダイニングはナチュラルなイメージだ。ホワイトとヘリンボーンを組み合わせた壁のコーディネートがナチュラルモダンを思わせる。「家はあくまでも居住空間。何よりも暮らしやすさが第一です」と話してくれたが、家族の住み心地を重視したインテリアのなかにも、不思議とキャンプ好きの表情を感じられるのが興味深い。「その理由はもしかすると、ボク自身のギアの好みにあるのかもしれません。効率性の高いアイテムを重宝する一方、ギミックに凝ったギアへの偏愛はやめられず、部屋の家具にまでクセのあるデザインを選んでしまうんです（笑）」。その言葉を象徴するのが、リビングに配されたチェスト。つまりは部屋の家具にもギアへの好みが通底し、暮らしやすさ第一の居住空間にも、そこはかとなくキャンプ好きの表情をにじませる。







01.ガレージに大きな窓の付いた壁を設け、自身のワークスペースに。ガレージと同様のシャープな色調が集中力を高めつつも、窓からは愛すべきキャンプギアを眺められる絶好の環境だ。ちなみに存在感抜群の照明は〈ハモサ〉のコンプトンランプ。　02.こちらもワークスペースのひとコマ。〈カレ〉と『ジャーナル スタンダード ファニチャー』のキャビネットが男っぽく、くすみがかった木目の壁がシャープな印象を保ちつつも部屋全体の印象に程よい軽さをプラスしている。　03.細々としたギアが並ぶラックは、2×4材を用いたテーブルに有孔ボードを設置する形でD.I.Y.したとのこと。　04.「野外で楽しんでこそ、キャンプです」と話す三浦さんだが、新居にはウッドデッキも完備する。2脚並んだチェアと〈キャンプオーパーツ〉のブーメランテーブルが、いかにもチルな雰囲気。　05.キャンプの相棒としても、仕事中の一服にも欠かせないのが〈ブラックデザイン〉のチェア。後ろに見える焚き火ラックは〈アイアンクラフト〉のイザナミだ。　06.家の外壁にフックを設え、デッキにタープを張れる仕様に。タープには〈タトンカ〉のレクタ型をセレクトし、ブラックのチェアは〈ヘリノックス〉のスウィベル。一方のグレーには〈ホールアース〉のキャリーチェアの脚に、〈ヘリノックス〉のシートをセットしているそう。　07.ギアが男らしさを漂わせるガレージから一転、居住空間は隠す収納を徹底。それを象徴するようなキッチンボードは〈イージーライフ〉のプロダクト。　08.『ジャーナルス タンダード ファニチャー』からセレクトした家具を組み合わせ、ダイニングセットに。けっしてヴィヴィッドな色の家具を選ばないセンスも、ギアの好みと通底する。　09.キャンプにも持ち出すという〈トヨトミ〉のラウンドストーブの前で暖を採っているのは愛猫のキラ（♂）。

ガレージにセットしたシェルフは、軽量にして耐久性抜群の〈メタルシステム〉。豊富なオプションパーツがラインナップされ、棚板のカスタムも拡張も容易だ。さらにはタフな質感のスチールがシルバーやサンドカラーのギアとマッチし、ダークグレーの壁とも調和する。

ナチュラルながらもキャンプ好きの表情がにじむリビング。「ギミックに凝ったギアが好き」という家主の好みが投影されているのが、ガレージにも色違いがレイアウトされている〈カレ〉のキャビネット。デザインの異なる引き出しが絶妙に配置され、まさにクセがある。

07

Living With
My Favorites

会社員
mitsuさん

保育士
eriさん

SPEC

居住地域 ： 北海道札幌市
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 2LDK
居住年数 ： 8年
築年数 ： 8年

Photo ／ Yusuke Yarimizu Text ／ Kumiko Nagaso 取材協力：【Instagram】@u_erii

外遊びを存分に楽しむための、ほっとくつろげる家。

季節を問わずにキャンプを楽しむという外遊び好きな夫婦。そんな2人の自邸は、札幌中心部からのアクセスがいい場所にありながらも、自然も感じられる貴重な場所にある。

「家が欲しいねと話していて、当初はリノベーションも考えていたのですが、住宅メーカーの方がこの土地を見つけてくれたんです。ここは地下鉄の駅から徒歩圏内なのに、近所に木立があって自然も感じられる。そのおかげで、新築で家づくりをすることに決めました。」と、eriさん。

1階はリビングとダイニングキッチンのみの広々とした造りで、2階に寝室とフリースペースを設けている。家を建てるにあたり、外遊びが快適になるようにと土間を広めに取り、玄関脇にアウトドアギアが収納できるストレージを設けた。ほかにも、車の荷台から室内にキャンプ道具が出し入れしやすいように作った窓などさまざまな箇所に工夫がある。

「収納が多いので、片付けしやすいのも嬉しいですが、新築のよさはやっぱり暖かいこと。パネルヒーターとポータブルのストーブだけですが、快適に暮らせていますよ。庭もあるのでBBQもしやすいですし」。

随所に夫妻のこだわりが詰まっており、ホームパーティーの際に友達が料理をしやすいようにとオープンスタイルを取ったキッチン、レンガやコンクリートブロック、古い窓枠などのユニークな建材を取り入れているのにも注目だ。

夫妻が集めた古道具をディスプレイするのも楽しく、アウトドアグッズや北欧や日本のヴィンテージのアイテムなど、2人のフィルターをとおして集められたアイテムが織りなす居心地のいい空間となっている。

キッチンとリビングは開放的な空間となり、このままダイニングから玄関へと繋がっている。eriさんが座っているソファは〈トラックファニチャー〉のもので、ヴィンテージが多い室内にしっくりと馴染んでいる。ソファ横の大きなスモークツリーは庭で育てたものだ。

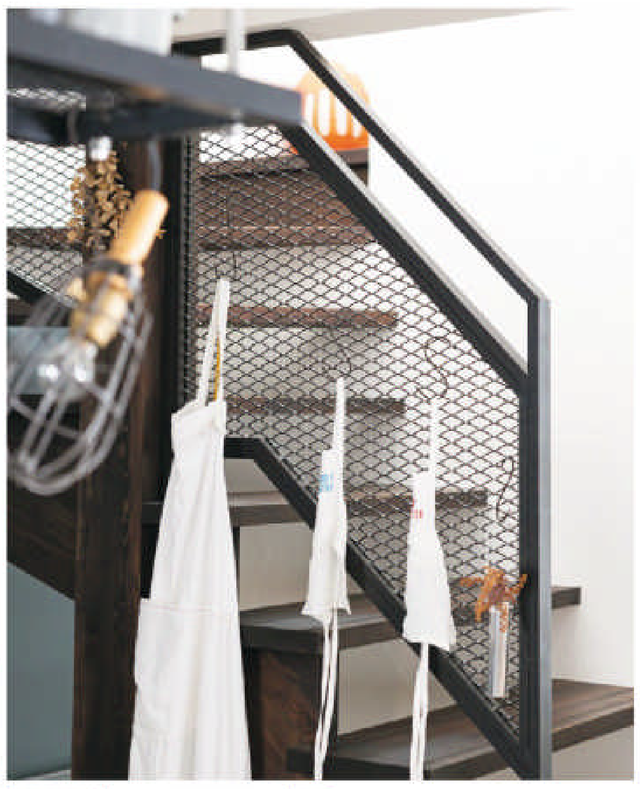
オールステンレスのキッチンは、気に入ったものを探し、施工会社と相談しながら取り付けたもの。業務用のキッチンのようなシンプルなつくり。コンロ脇にブラウンのタイルを取り入れたり、壁紙をブルーにしたりと、温かみのあるキッチンが完成した。

01. 玄関を入ってすぐの土間部分は、ここからダイニングへと繋がっている。大きな窓は、キャンプギアなどの荷物を出し入れしやすいようにと観音開きになっている。土間の一部にはレコードなどのオーディオスペースを置いた。飾り棚の上には、コツコツと集めたヴィンテージのアウトドアギアをディスプレイ。 **02.** 小屋に見えるこの建物は庭部分にある物置で、ガーデニングやアウトドアのグッズを収納している。庭にはアンティークの雑貨を並べており、小鳥がやってくるようにと餌台も置いている。餌が少ない冬場は小鳥が集まりやすく、窓から小鳥が餌を食べに来るのを眺めて楽しんでいるとか。 **03.** キッチン横にある食器棚には、奥さんが趣味で集めたお皿がズラリ。〈アラビア〉のヴィンテージや、沖縄のやちむん、作家が手がけたものなど、和洋問わずにセレクト。全体的にブラウンやネイビーなど、渋めのカラーのアイテムが多い。 **04.** 玄関脇には斧や古道具、ドライフラワーなどがディスプレイされる。古道具を追いかけて、札幌を中心に北海道の各地へと足を運んでいるそう。 **05.** ブラウンのタイルがアクセントになったキッチン。友人たちとホームパーティーやBBQを楽しむことも多く、取り出しやすいようにとキッチンツールや鍋を吊り下げて収納している。

01	02
03	04	05

07 Living With My Favorites

玄関すぐ横にあるストレージには、バーナーやランタン、ダウンなどの外遊び用のアイテムたちを収納するためのスペース。オープンになっていて見やすく、片付けしやすい。アウトドアギアは、ヴィンテージのものも多く、長く愛用できるモノをセレクト。



06	07	08
09	10	11

06.オーディオスペースから玄関、ストレージを見渡したところ。開放的なつくりだが、ストレージ前の壁や玄関前にブロック塀の仕切りがあることで、外から丸見えにならないようにと工夫されている。突然の来訪者にも慌てずにすむ。　07.2階へと繋がる階段の手すりなどのアイアン素材のパーツは、eriさんの父親が手掛けたものだそう。愛猫のエプロンをディスプレイ。　08.キャンプでも使用できるようにと、味のあるポータブルストーブが室内のあちこちに置かれている。こちらは、旦那さんの趣味で集めたイギリスの〈バーラー〉のヴィンテージで、オークションで格安で手に入れたものをメンテナンスして愛用中。ほかにも、〈ニッセン〉や〈トヨトミ〉のストーブもコレクションしている。ストーブのほかに、〈プジョー〉や〈ザッセンハウス〉などのヴィンテージの珍しいコーヒーミルなども収集している。　09.ダイニングと玄関を仕切る役割の壁に、古いガラス窓をお願いして入れてもらった。ゆらゆらと波打つガラスならではの温もりがある。　10.リビングの一部。雨竜町にある古道具店『豆電球』で購入したテーブルや、丸椅子などの古いものを置いて。　11.2階にあるフリースペース部分。テーブルで集中して作業をするほか、ゲストが来た際にくつろぐこともできる場所だ。

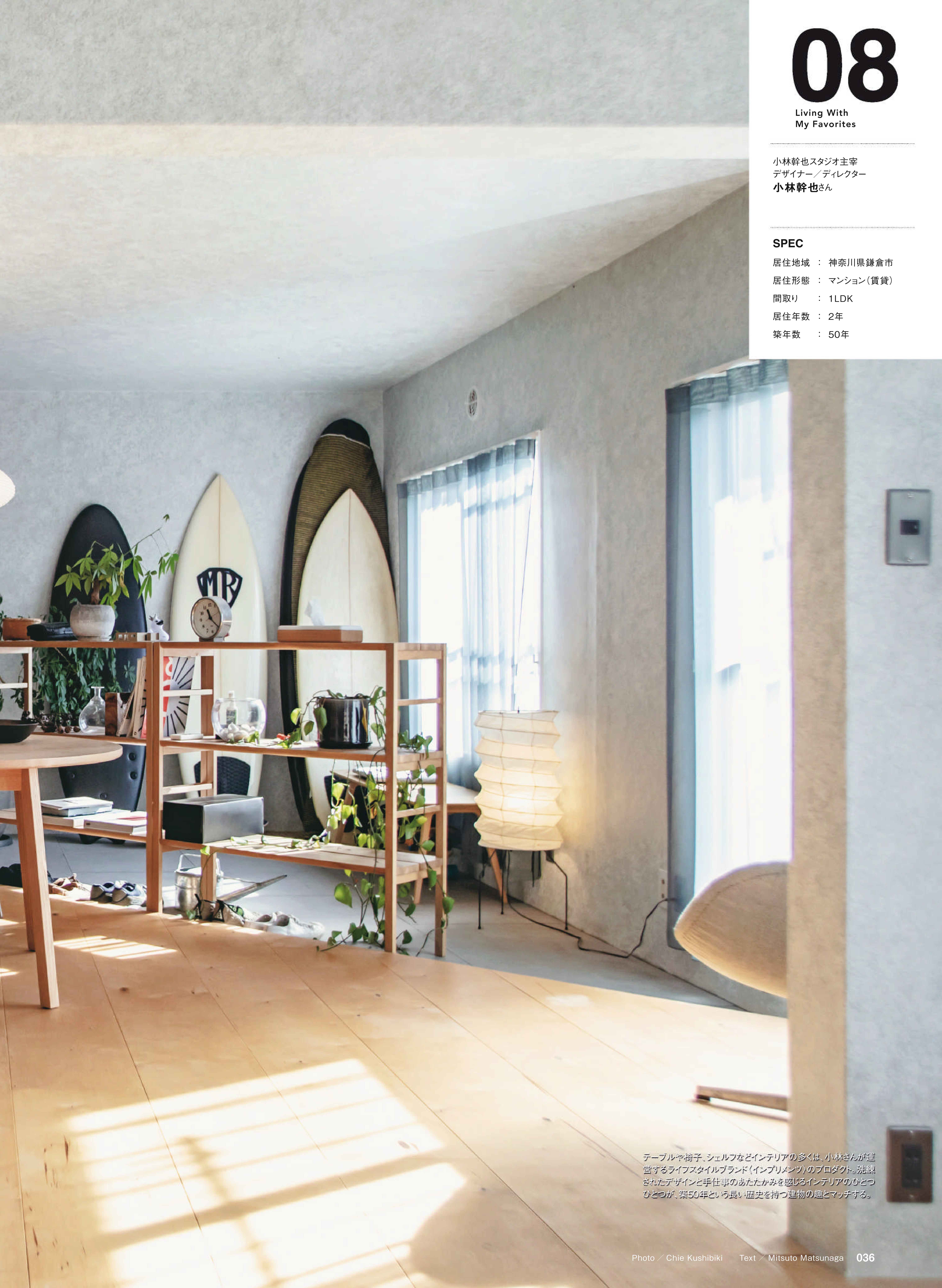
08

Living With
My Favorites

小林幹也スタジオ主宰
デザイナー／ディレクター
小林幹也さん

SPEC

居住地域	：	神奈川県鎌倉市
居住形態	：	マンション（賃貸）
間取り	：	1LDK
居住年数	：	2年
築年数	：	50年



テーブルや椅子、シェルフなどインテリアの多くは、小林さんが運営するライフスタイルブランド〈インプリメンツ〉のプロダクト。洗練されたデザインと手仕事のあたたかみを感じるインテリアのひとつひとつが、築50年という長い歴史を持つ建物の趣とマッチする。

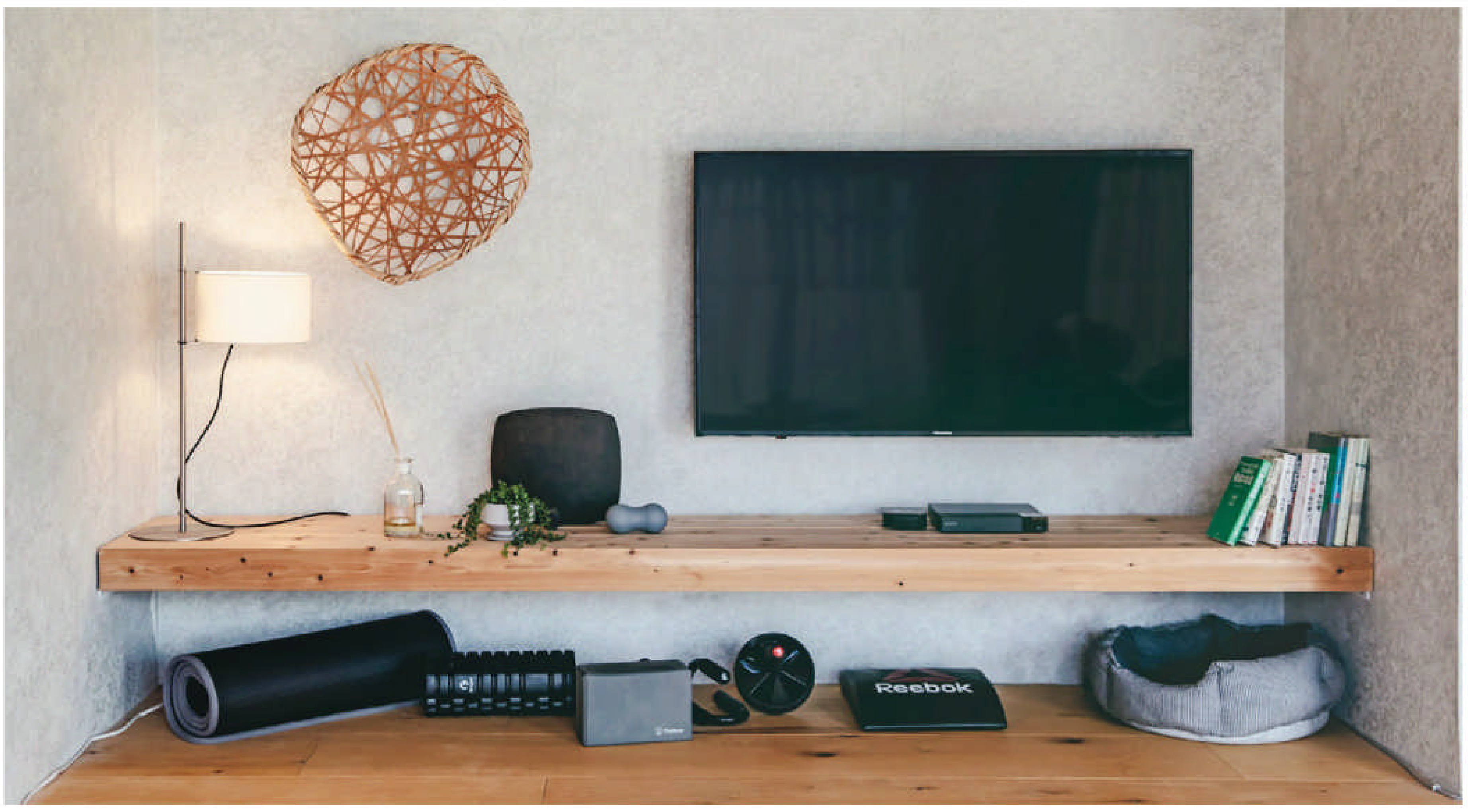
Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Mitsuto Matsunaga

自然豊かな山に囲まれた、築 50 年の趣あるマンションをセカンドハウスに。

サビをモチーフにしたクロスが懐かしくもモダンな雰囲気を醸し出すこちらの住まいは、デザイナーとして国内外で活躍する小林さんのセカンドハウス。鎌倉の自然豊かな山に囲まれた地域にあり、昭和に建てられた趣あるマンションの一室をリノベーションした物件だ。サーフィンが趣味の小林さんにとって鎌倉はもともとよく訪れていた場所だったが、セカンドハウスをこの地に持つことになったのは2年ほど前のこと。東京とスペインを拠点に活動し国内出張も頻繁にあったため以前は多忙な毎日を送っていたが、コロナ禍により移動が制限。家族との過ごし方や自身のライフスタイルについて考えることが増え、「仕事以外の時間を大事にしたい」という思いが湧いてきたのがきっかけだったそう。

オフの日に訪れるセカンドハウスでは、早朝海に行き、その後は家族で過ごすことが多いが、時には集中して仕事に取り組むことも。とはいえ自然を近くに感じる環境は「そこにいるだけで癒やされる」と話す。「暖かい季節は、部屋の中にいても鳥や虫の鳴き声がうるさいぐらい(笑)。でも、ここにいると本当にリラックスできて。何もしていなくても心地いいんですよね」。

室内には、冒頭に触れたクロスをはじめ、自身でデザインを手がけた家具のほか、国内外のさまざまなる意匠がレイアウト。その多くは、洋の東西を問わず、職人の手仕事と自然素材の温かみを感じさせるものばかり。木の優しい質感を漂わせ、どこか和のテイストをたずさえるインテリアは、まるで昔からそこにあったように空間に溶け込んでいる。



01.リビングの照明は〈イサムノグチ〉のアカリシリーズから15Aモデルをセレクト。天井が高くない日本の家屋でも圧迫感を生まない薄型の形状が特徴。　02.キッチンのシェルフは備えつけの天板の下に棚を追加。整然と並べられる食器には絵付け作家・大谷桃子氏の作品も。「こういうお皿に盛り付けるだけで気分が変わりますよね」。　03.畳ベッドは〈飛騨フォレスト〉のために小林さんがデザイン。小上がりとしてくつろぐこともでき、布団を敷けばベッドとしても利用できるスグレモノ。　04.見せる収納として使う〈インプリメンツ〉のシェルフはあえて部屋との境に配置。空間を柔らかく仕切り、土間に前室的な機能を持たせている。　05.調理器具は、日本を代表する工業デザイナーの柳宗理氏や、その教えを受け継ぐ吉田守孝氏デザインのプロダクトを愛用。　06.小林さんが「一番こだわったかもしれない」というのが、デンマークのテキスタイルメーカー〈クヴァドラ〉のカーテン。「窓の外に見える鮮やかな緑を室内に引き込むような意図もあって、色がリンクしている薄いグリーンを選びました」。　07.テレビ下のテーブルはD.I.Y.。「壁に固定した金具の上に並べて載せただけ」だそうだが、9cmの角材を用いているので重厚感のある仕上がりに。壁に飾られているのは竹籠作家の山崎大造氏によるその名も「鳥の巣」。　08.フロアライトは左写真のライトと同じくスペイン・バルセロナの〈サンタ&コール〉。スペインの工業デザイナー、ミゲル・ミラ氏の作。　09.デンマーク製のヴィンテージのワゴンは、学生時代の先輩が運営する『ミチオオカモト・ウェアハウス』でひと目惚れ。食事の際にテーブルに載りきらないものを置いたり、畳ベッドの脇に移動してサイドテーブルとして使ったりと、キャスター付きで利便性が高いところもお気に入り。

数々のサーフボードを所有している小林さんが、最近よく乗っているというのが一番手前に見える〈キャッチサーフ〉。浮力が強くテイクオフが速いスポンジ製ボードでありながら、通常のサーフボードのような高い機能を持つためプロサーファーにも愛用者が多いブランド。

ダイニングとキッチンもリビングと同じクロスを使用しているが、こちらはダークなカラーをチョイス。室内をツートーンに分け空間を視覚的にも区切っている。「こちらのテーブルで仕事をすることがあるので、気持ちを切り替えられるよう色を貼り分けています」。

09

Living With
My Favorites

自営業
MASATOMIさん

自営業
RUMIさん

SPEC

居住地域	：	徳島県美馬郡
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	6LDK
居住年数	：	18年
築年数	：	30年

Photo ／ Nobuyuki Miyake　Text ／ Showgo Komatsu　取材協力：【Instagram】@masa_87uta、@hanauta63

もともとコンクリート打ちっ放しだった壁は、漆喰を塗って明るい空間に。木材の色味と調和して、温もりと清潔感を覚えるリビングが完成した。部屋中のいたるところにヴィンテージのギアが数多く並んでいるが、野暮ったい雰囲気は一切なくスタイリッシュな印象を受ける。

セルフリノベーションと“見せる収納”で、ギアに囲まれた生活。

「ここは、親が営んでいた会社の事務所兼住居でしたが、事務所が空いたので壁に漆喰を塗ったり薪ストーブを置いたり、セルフリノベーションしてリビングにしました」。その空間は木材を中心に構成され、アウトドア好きな2人らしさを存分に感じられる。リビングの中央部には木の幹が立てられ、まるで自然の中にいるかのよう。「事務所だった頃、コンクリートの梁にヒビが入ってしまい、耐久性は問題ありませんでしたが、念のため父が支柱として立てたものです」と話すが、リビングとなった今では、部屋の雰囲気を加速する大事な要素になっている。

リノベーションの際に掲げたテーマは〝キャンプ部屋〟。もともと別の部屋に収納していたギアを、見せる収納でディスプレイすることにした。そこで役に立ったのが、りんご箱。いくつも積み重ねて、壁面収納を作り上げた。「数年前、りんご箱を3つ手に入れて、キャンプ中の棚として使っていました。それをリビングでも取り入れることに。スーパーから20個ほど譲っていただき、ギアをたくさん収納できる棚を作りました」。こうして既製品の棚とは異なる印象の、味わい深くて自由度も高い棚が完成し、インテリアの一翼を担っている。

自転車やカヤックなど、キャンプをしながらアクティビティも楽しむ2人。「普段は自宅で仕事をしているので、休みの日は外に出てロケーションのいい場所でゆっくり過ごすのが気持ちいいです。毎日ずっと一緒に過ごしている愛犬も一緒に泊まれるのがキャンプの魅力です」と話す。そんなリフレッシュできる趣味の道具に囲まれたインテリアは居心地よく、細部にもこだわりを色濃く反映した。

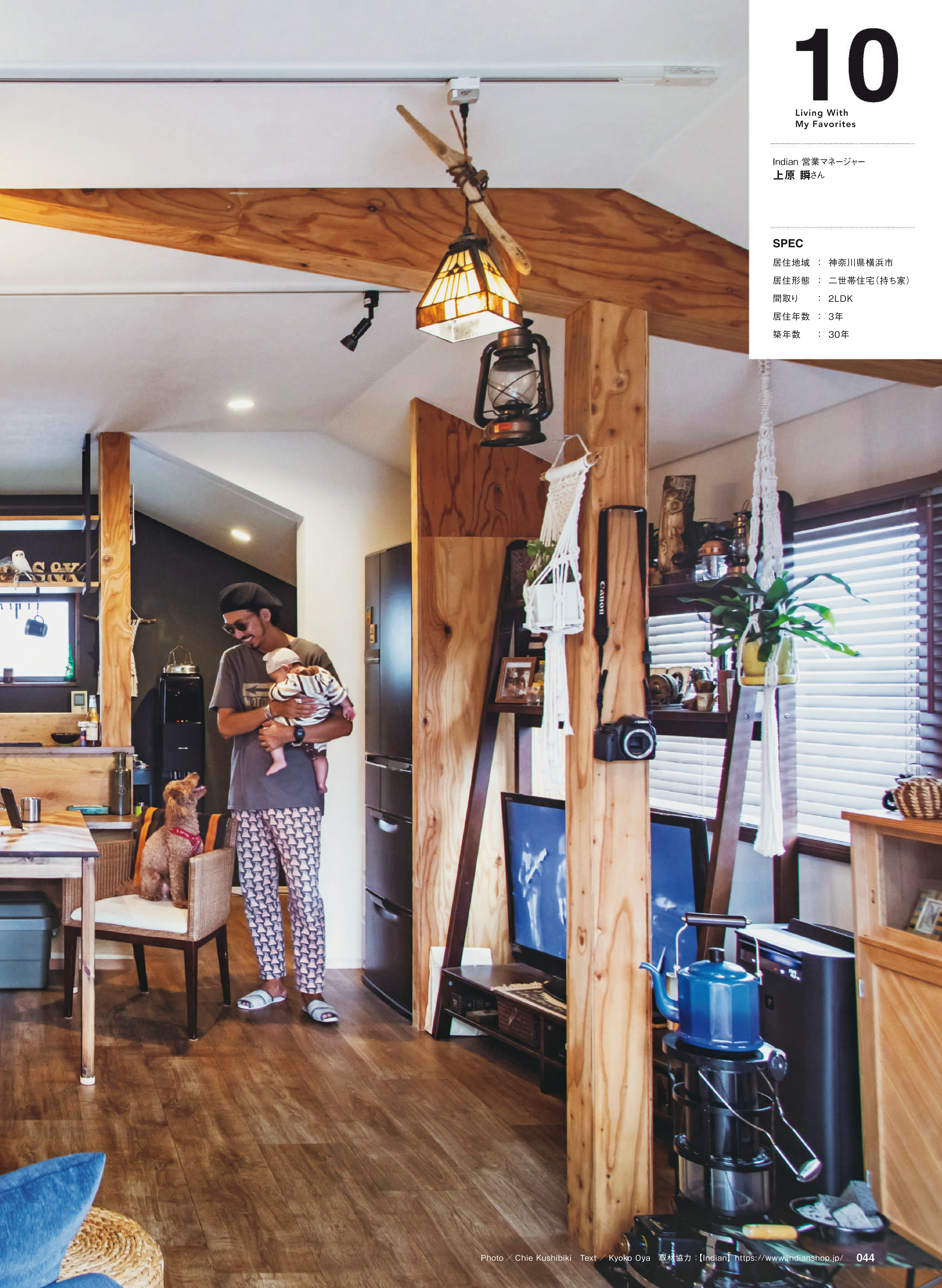
大物から小物まで、さまざまなキャンプギアをりんご箱にディスプレイ。中央に重ねたテントとタープは〈ノルディスク〉と〈クレッパー〉のヴィンテージ。右側には〈テンティピ〉のテントなど。キャンプの準備と片付けをしやすいように、カテゴリーに分けて配置している。

01.テレビの前に置いている〈エニウェアチェア〉のミニサンドチェア。多彩なカラーリングで展開されているが、グレーをチョイスしたことでウッドの色合いを邪魔しない。左のチェアに掛けているのは米軍のメディカルブランケット。　02.キャンプの際、愛犬とポタリングを楽しむ折り畳み自転車が置かれ、ブルーのバッグにはフォールディングカヤックが収納されている。そのほかにカメラなど、キャンプを軸にした多趣味を窺える。　03.〈クリッパン〉のブランケットを敷いた〈アクタス〉のソファ。〈ハーフトラックプロダクツ〉と群馬のアウトドアショップ『パーベイヤーズ』がコラボしたクッションカバーには毛布やシュラフを入れている。　04.オークションで購入したアルミのコンテナボックスをテーブルとして使用。見た目ほどの重さはないので以前はギアの運搬に使用していたが、現在はリビングに置いてシーズンオフのモノを収納している。　05.カトラリーやシェラカップなど、食事関連のアイテムを収納しているスペース。その上にはランタンやストーブを配した。左奥はRUMIさんが父から受け継いだ〈オプティマス〉のランタンで、右奥は〈バーラー〉のクッカーストーブ。手前の2つはイギリスのもので、左のクッカーストーブは100年ほど前のもの。右にあるのは鉄道ランタン。

01	02	
03	04	05

リノベーションをする際、最初に置くと決めていた薪ストーブが存在感抜群。リビング全体に派手なカラーを使用せずナチュラルな色を中心に選んでいるので、見せる収納で並べたギアが映える。窓から注ぐ光が心地よく、ふんだんに使用している木の表情を明るく照らしてくれる。

06. 薪ストーブは、揺らめく火を眺められるよう大きめの窓が搭載されている〈バーモントキャスティングス〉のアンコールを選んだ。家にいながら、焚き火を味わうことができる。愛犬のワイヤーダックス、麦と唄も気に入っている様子。　07.壁には海外の住居に使われていたアンティークのレンガを使用。グローブや手斧などを収納している後ろには、灰入れとして使うミルク缶と、ファイヤーブラスターや掃除用具を入れているコールバケツを並べ、細部にまでこだわりを感じさせる。　08.自転車用の工具やメジャーなどを収納している小物入れには布を掛けて雑多感を解消。　09.猟師をするRUMIさんの父からプレゼントしてもらった鹿のオーナメント。　10.部屋の中央にそびえる木の幹に取り付けた〈コールマン〉 200Aは'65年製。ランタンを整理して、ほとんど手放してしまったそうだが、現在も発売され続けているスタンダードなこちらは手元に残した。「同じデザインでも微妙に違っていたり、当時の使っている様子を想像したり。数十年経った今も使えるのがヴィンテージ品の魅力です」と話す。　11.テーブルは、事務所だった時から使い続けている一枚板の天板で、脚も一枚板のものを組み合わせた。テレビの横にもテントとタープを配置。テントだけで8張りも所有しているそうだ。



10

Living With
My Favorites

Indian 営業マネージャー
上原 瞬さん

SPEC

居住地域	:	神奈川県横浜市
居住形態	:	二世帯住宅(持ち家)
間取り	:	2LDK
居住年数	:	3年
築年数	:	30年

Photo／Chie Kushibiki　Text／Kyoko Oya　取材協力：【Indian】https://www.indianshop.jp/

梁や柱は無垢の木材でコーティング。床も無垢材で統一する一方、壁はホワイトだ。あえて全体をウッドにしないバランスが木の表情を引き立て、さらに「ここは奥さんのセンスです」というダークグレーに塗られたキッチンの壁がLDK全体の印象を引き締めている。

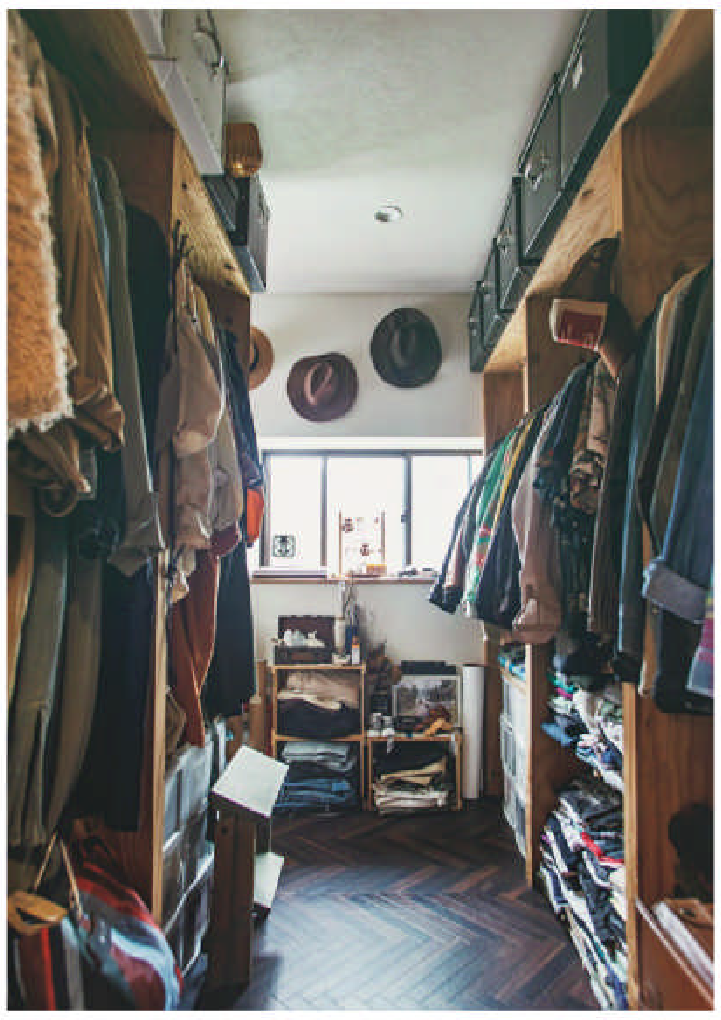
赤茶に色づくウッドと手仕事の品々ににじむ、ネイティブアメリカン。

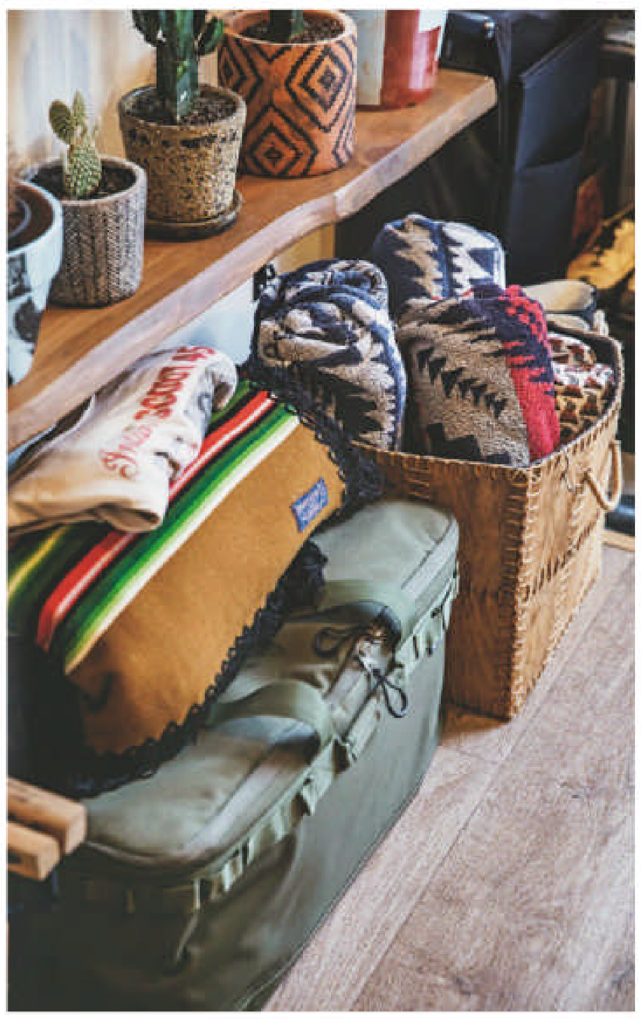
上原さんは一軒家を二世帯住宅にすべく、自身の住まいとなる2階を解体。リノベーションによって理想の住まいを手に入れた。その理想のベースとなったのは、ネイティブアメリカンのムード。上原さんは1901年に創業し、アメリカ最古のバイクメーカーとしてのルーツを持つ〈インディアン〉のスタッフ。ネイティブアメリカンの姿を模したブランドロゴは〝アメリカントロフィ〟と称され、世界のファンに愛されている。

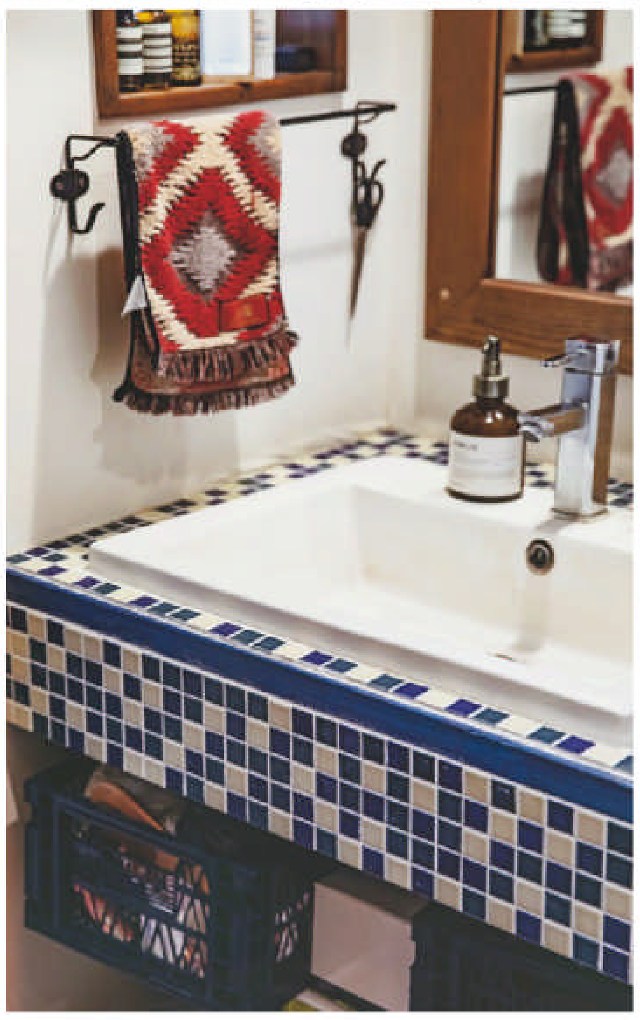
上原さん自身もアメリカの歴史や文化をこよなく愛し、赤土の大地に暮らしたネイティブアメリカンへの憧憬だろう。リノベーションに用いたウッドも、どこか赤茶けたカラーチョイス。「柱の素材には特にこだわりました。経年変化していくウッドの色合いを楽しむため、実際の柱を無垢の木材で覆っているんです」。

リノベーションから約3年の時を経て少しずつ赤茶色に移ろいゆく空間のアクセントも、やはりキーワードとなるのはネイティブアメリカンだ。「この柄を見つけると、ついつい手が伸びてしまいますね」というブランケットは〈インディアン〉や〈ペンドルトン〉のプロダクト。ネイティブ柄のファブリックがウッドを主役とした空間に映えるだけでなく、家主の個性を浮き彫りにする。

そしてもうひとつ、特筆すべきなのがD.I.Y.のアイテムだろう。一家団らんの時間を過ごすヘリンボーンのダイニングテーブルも、部屋の随所を飾るマクラメも手作り。このハンドメイドの品々に、生活のすべてを自らの手で作り出し、長い歴史を紡いできたネイティブアメリカンのスピリットが生きている。







01.ウォークインクローゼットはリノベーション時の造り付け。さすがはアパレルブランドに勤める家主とあって収納されたウエアの並びも美しく、ヘリンボーンにデザインされた床からウッドへのこだわりが見て取れる。　02.サボテンがディスプレイされたウッドラックも上原さんのD.I.Y.だが、ライトブルーをベースカラーにした鉢まで自らがペイントしたそう。作家モノさながらの出来映えだが、「コツはにじみにくい油性塗料を使うこと。後は思いのままにハケを滑らせるだけです」。　03.レザー製のボックスから顔を出すブランケットは自社の〈インディアン〉、その隣はヴィンテージの〈ペンドルトン〉。このネイティブ柄が、抜群のアクセントになる。　04.洗面台のシンク周りに張られたタイルは、なんと奥さんのD.I.Y.だそう。ブルーとホワイトのタイルをランダムに張り、こちらもネイティブ柄のタオルがアクセントに。　05.読者にもおなじみのアラジンストーブはブラックをセレクト。ちなみに「サウナが大好きなんです」という上原さん、スツールにセットされているのはサウナストーンとのこと。　06.「20歳のころに購入してから、ずっと愛用しています」という〈ヤマカワラタン〉のチェアに合わせ、ダイニングテーブルをD.I.Y.。表情の異なる木材シートを貼り合わせ、ヘリンボーンの天板まで自作したというから驚きだ。　07.テレビボードや冷蔵庫には木目調のダークブラウンをセレクトし、ウッドの印象を保ちつつもナチュラルに偏りすぎないイメージに。　08.愛娘専用のハンガーは、上原さんと奥さんによる合作。奥さんが編んだというマクラメを主役に、上原さんが庭のキンモクセイから採った枝を用いてD.I.Y.したそうだ。　09.ターコイズブルーとレザーのコントラストは、まさにネイティブアメリカンのテイスト。窓際のちょっとしたディスプレイも絵になる。

『アクメ ファニチャー』のソファには、ネイティブ柄の代名詞ともいうべき〈ペンドルトン〉のブランケットをレイアウト。赤茶けたウッドの柱や壁にスツール、ハイセンスにディスプレイされたレザーバッグやハットもネイティブアメリカンのイメージを引き立てる。

上原邸は玄関がウッドデッキという造り。リノベーション前のベランダを拡張する形で造られ、こだわりはデッキにもフェンスにも天然木を使用していること。さらに居住空間との仕切りはスライドドア。LDKとデッキがフラットにつながり、部屋からの眺めも開放的。

11

Living With
My Favorites

会社員
朝倉早人さん
由香さん

SPEC

居住地域 ： 神奈川県三浦郡
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 1LDK
居住年数 ： 5年
築年数 ： 5年

Photo ／ Chie Kushibiki Text ／ Mitsuto Matsunaga 取材協力：【Design Source】https://www.design-source.jp/

「ブルックリンハウス」の特徴である、スキップフロアに設けられたリビングからの風景。広い吹き抜けに加え、2階へのアプローチを視界を遮らない鉄骨階段にすることで抜群の開放感に。ヴィンテージ感漂うインテリアとの組み合わせにより、まさに倉庫のような佇まい。

倉庫のような空間が広がる、新しくも「ヴィンテージ」な家。

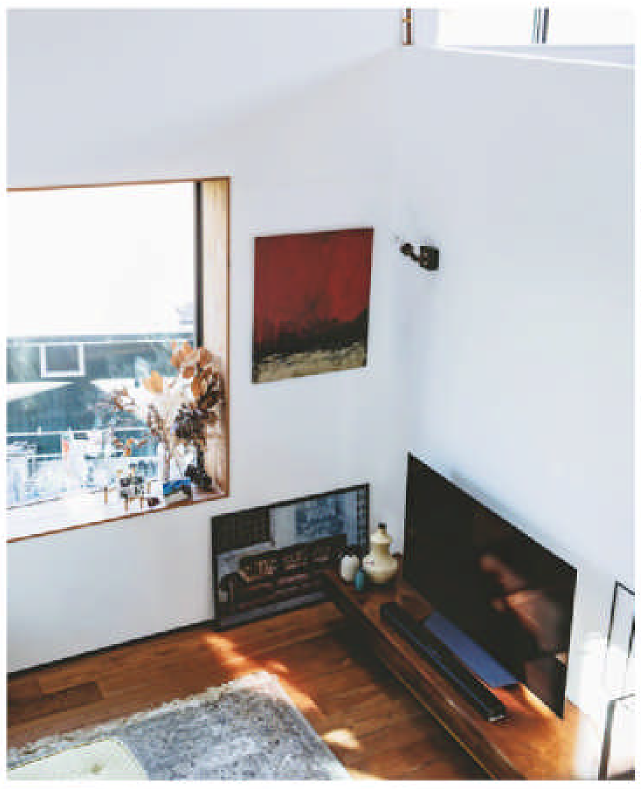
海に囲まれ、起伏に富んだ内陸部を有する神奈川県の葉山町。サーファーとして長いキャリアを持ち、海はもちろん山も好きと話す朝倉さんが住むのは、その葉山町の小高い山の上。「もともと倉庫に住みたかったんです。倉庫の2階の一角にベッドを置いて寝られたらなと」。

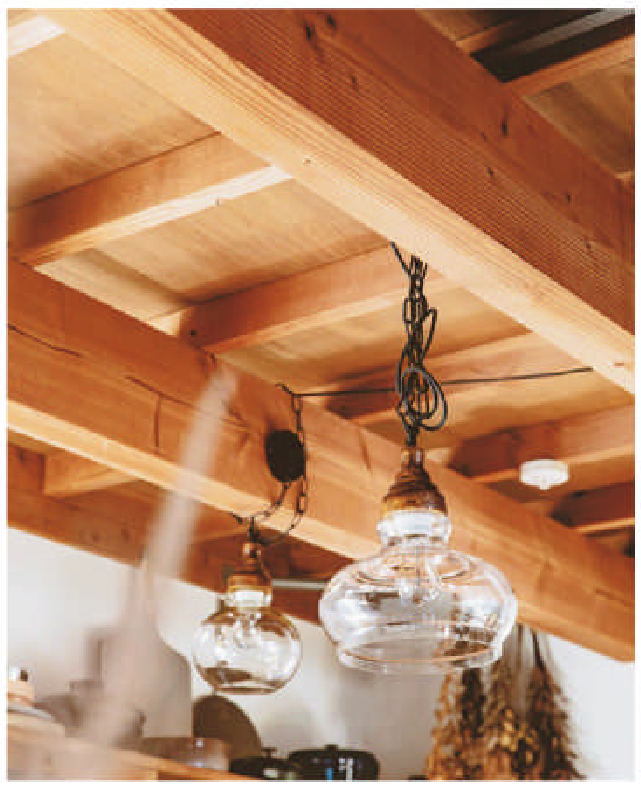
朝倉さんのそんな野望を叶えたのは、建築デザイン事務所の『デザインソース』がプロデュースする〝ブルックリンハウス〟だ。開放感あふれる大きな吹き抜け、1階と2階の中間層に設けられたリビング、そしてむき出しの梁や無骨な内装。まさに古い倉庫や工場が立ち並ぶブルックリンから抜け出してきたような佇まいが特徴となっている。

大阪の家具ブランド〈スクエアファニチャー〉が手がけるインダストリアルなインテリアもまたユニークだ。自然の風合いを活かし素材には無垢のオーク材や黒皮のアイアンを使用。新築時からヴィンテージな趣を感じられるよう、木材には職人があえてノコ目で傷を入れているのだとか。細部にまで世界観が徹底されているが、聞けばこちらはサイズや仕様が決まった規格住宅。その規格外のコンセプトに驚くばかりだが、そんなところも朝倉さんが望んでいたイメージとぴったりだったという。

「この家にあるドアは洗面所の1ヵ所だけ(笑)。広いところに住みたかったので仕切りが無くて開放感があるのが気に入っています。それに住んでいくうちに経年変化が出てくるのもいいところです。アイアンはサビが出てきたり、無垢のフローリングも色が変わっていったりと、段々とかっこよくなっていくんですよね」。

眺望を活かすため、あえて北向きに設定されたリビングの大きな窓。外には山が連なり、その先には江ノ島の姿も望める。帆布生地が用いられた3人掛けのソファも標準装備。壁に立てかけられた愛用のロングボードはカリフォルニアの名匠が削る〈クーパーフィッシュ〉だ。

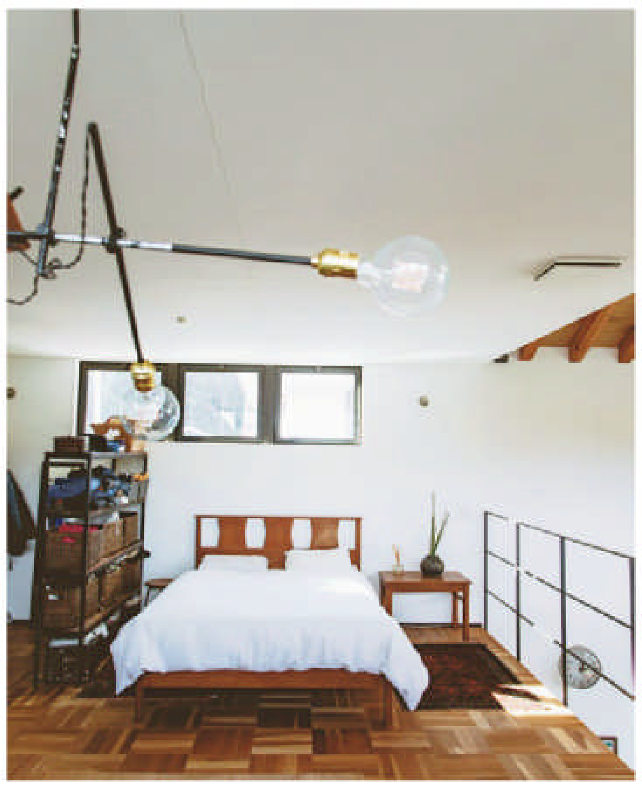


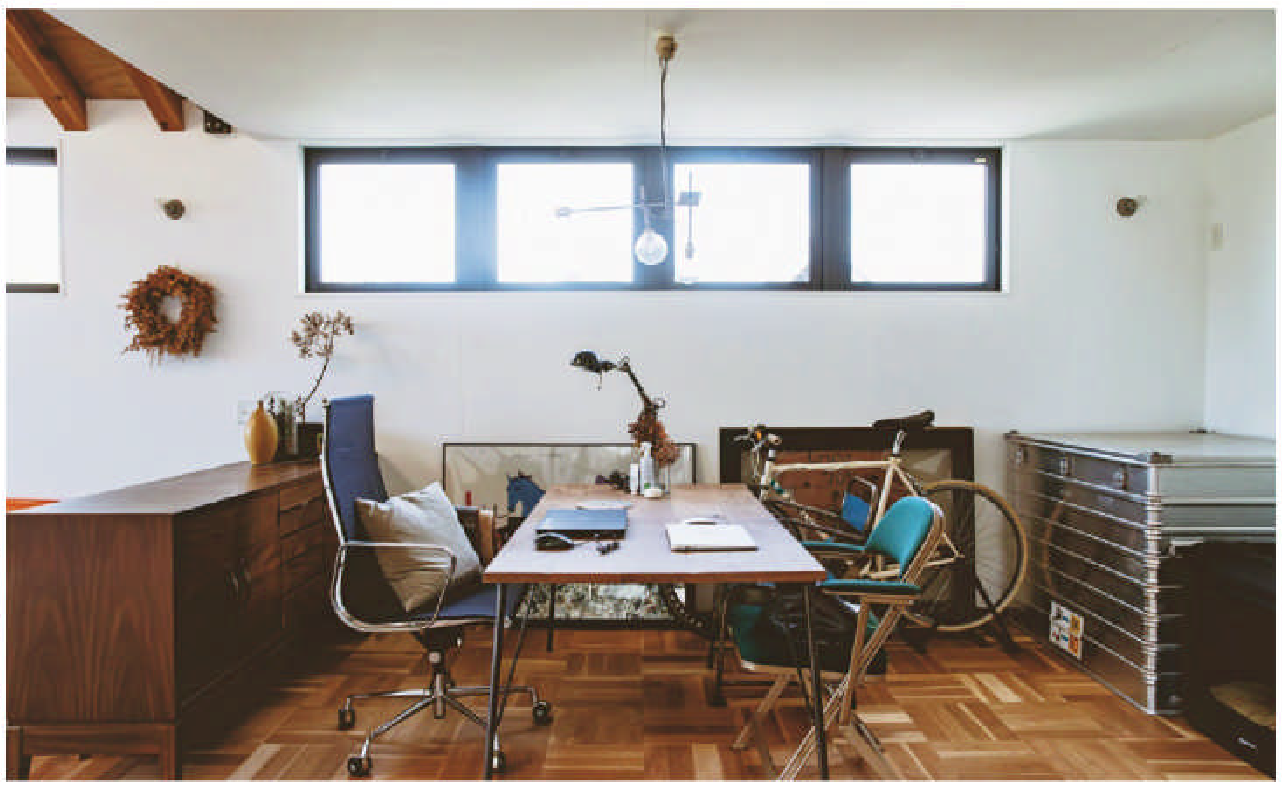


01.リビングへと繋がるスキップフロアは一番上の高さをキッチンの天板の高さと合わせ、階段に座ったときにキッチンに立つ人と一体感が出るよう設計。「友達が来てもソファやイスに座るより、階段に座る人の方が多いぐらいなんです」と由香さん。リビングの床下に当たる部分には6畳分の空間が造られており、内部をまるまる収納に使える構造となっている。　02.壁に備えつけられた照明ブラケットはガス管で製作。経年変化でサビが出てくることで味わいを増していく。ザラッとした手触りの白い壁は、壁紙や吹付け塗装ではなく手塗りにすることで表情を加えた。　03.玄関正面の板壁は、ペンキの跡もそのまま残る使い込まれた足場板で造作。床には土間を打ち、両サイドのダイニングや屋外ともフラットに繋がる。「犬がいるので土間のある家がいいなと思っていたんです。ちょっとした作業もここでできるので便利ですね」。　04.ネットで入手した照明も、ソケット部分にオイルステインを塗りひと手間プラス。天井はあえて梁をむき出しにする「あらわし」を採用。　05.玄関横にヴィンテージのロッカーを置き下駄箱として利用。奥にあるキッチンとのパーテーションとしても機能。　06.キッチンにも、インテリアと同じ黒皮のアイアンと無垢のオーク材を使い統一感のある仕上がりに。

01 02 03
04 05 06

2階のフロアはワークスペースやベッドルームとして利用。高い天井と吹き抜けのおかげで縦方向の開放感が加わり、約25畳という数値よりさらに広く感じられる。インテリアは以前から所有していた家具類を活かしてミッドセンチュリースタイルにコーディネート。





07.茅ヶ崎の『マービスタガーデン』で購入したロッカーを始め、ブルックリンハウス標準装備のアイアンハンガーや、配管を使用したパイプハンガーで洋服類を整理。家の内部に仕切りは無いものの気密性が高いため、夏場でも右上に見えるエアコンひとつで1階も冷えるのだそう。　08. 3年ほどかけて朝倉さんが自身で造った庭はプロ顔負けの完成度。写真手前側の位置には大きなウッドデッキもD.I.Y.。外構工事は未経験だったとのことだが、植栽も含めイチから仕上げたというから驚きだ。「ここで焚き火をしながらのんびりするのが最高です。キャンプに行く回数が減っちゃいました（笑）」。ロープを使ったチェアも自作品。　09.ダイニングキッチンの真上に当たるスペースにベッドルームをレイアウト。2階の床は寄せ木タイプのパーケットフローリングを採用し1階とは趣を変えている。　10. 2階の一角は、リモートワークを行っている由香さんのワークスペース。フロアを緩やかに分けるシックなチェストは、以前の家から使用していた〈カリモク〉。ヤフオクで偶然見つけた大きな貨物用コンテナは収納ダンス代わりとして利用。　11.こちらも以前から持っていたという〈アクメ ファニチャー〉のソファ。天井付近に備えつけられた内倒し式の窓がさらに倉庫感を醸し出す。

12

Living With
My Favorites

WOOD LIFE SERVICE
鈴木賢二さん

SPEC

居住地域	:	北海道上川郡
居住形態	:	一戸建て(賃貸)
間取り	:	1LDK
居住年数	:	8年
築年数	:	不明

家族がくつろぐリビング。ランタンやボトルケース、ミリタリーのボックスなど、アメリカンなアイテムがぎっしり。ポスターフレームは、古材を使用したオリジナルのもの。鈴木さんがディスプレイを手がけると、ショップのような「見せる」インテリアに。

Photo ／ Eri Shimizu　Text ／ Kumiko Nagaso　取材協力：【WOOD LIFE SERVICE】https://woodlifeservice.com/　【Instagram】@wood_life_service

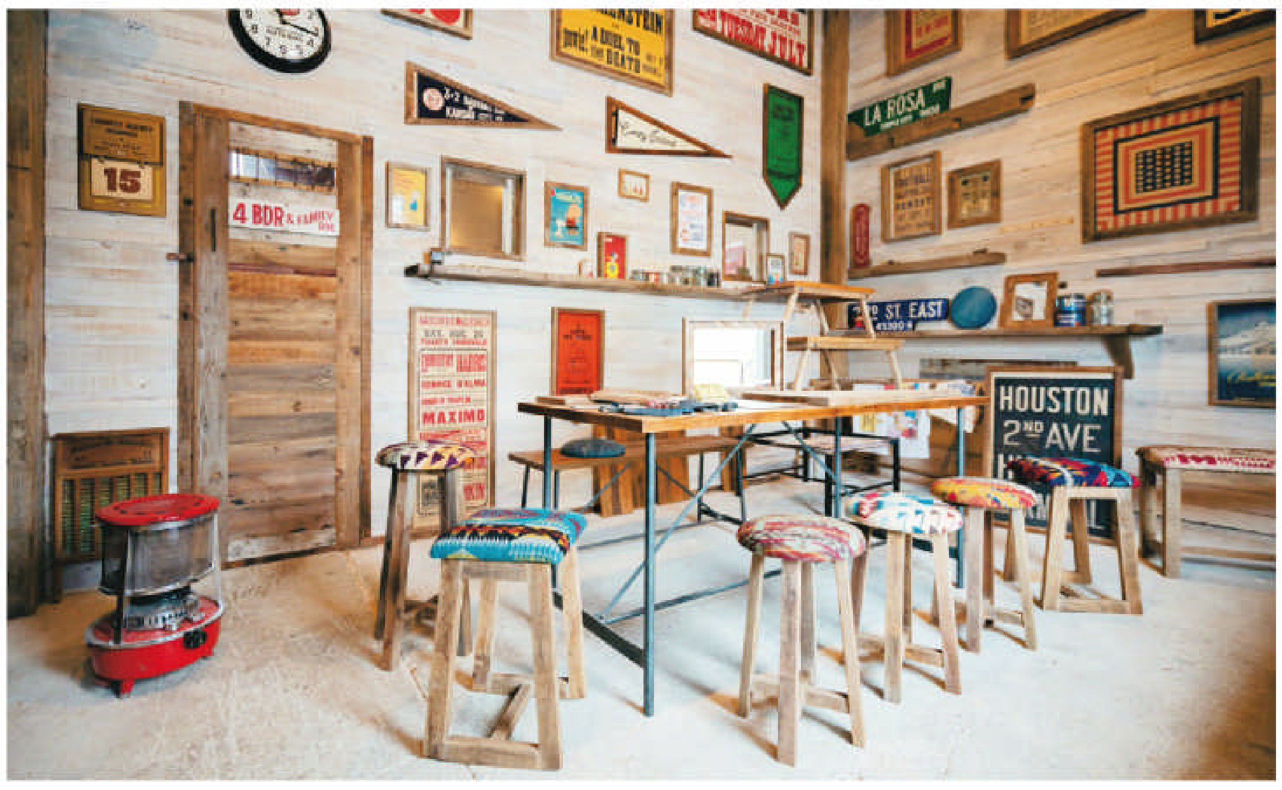
アメリカンヴィンテージのアイテムで彩られた、開放的なリビング。

ヴィンテージアイテムが目を引く部屋に住む鈴木さんは、古材を用いた家具製作『ウッドライフサービス』を手がける家具職人だ。壁に掛けられたポスターフレームやソファ、棚なども自作する。旭川生まれの鈴木さんは、家具製作を学ぶためにと東川町に移住してきた。「家具製作と、静かなところでの田舎暮らしに憧れていたのもあって東川に移住しました。家具メーカーでの修行を経て、今年独立。春にはショールームをオープンさせる予定です。」

メーカー勤めの頃は、新品の綺麗な家具を作ることが中心だったそう。「新しい家具もいいのですが、どれも同じに見えてしまう。古材はひとつひとつ違うので一点モノとなるし、古いものの雰囲気が楽しめます」。古材の入手経路は難しく、解体した家屋から出る廃材などを利用することもあるが、腐った木材も多く、家具に流用できるのは1割にも満たない。そんな貴重な木材を、鈴木さんは職人の技術で、しっかりとした強度で仕上げていく。スツールには、〈ペンドルトン〉などのアメリカンテイストな生地を使用。そうしたチョイスも、根っからのアメカジ好きの鈴木さんだからこそ。

「中学生くらいの頃からずっとアメリカンな古着や靴が好き。札幌時代はアメカジのセレクトショップ『コニーアイランドストア』に勤務していて、今でも旭川のショップを手伝っています。家の中にあるヴィンテージの小物もコツコツと集めたものばかりですね」と、室内も貴重なアイテムばかり。長年かけて集められた鈴木さんの好きなものたちが、大切に飾られた空間となっている。

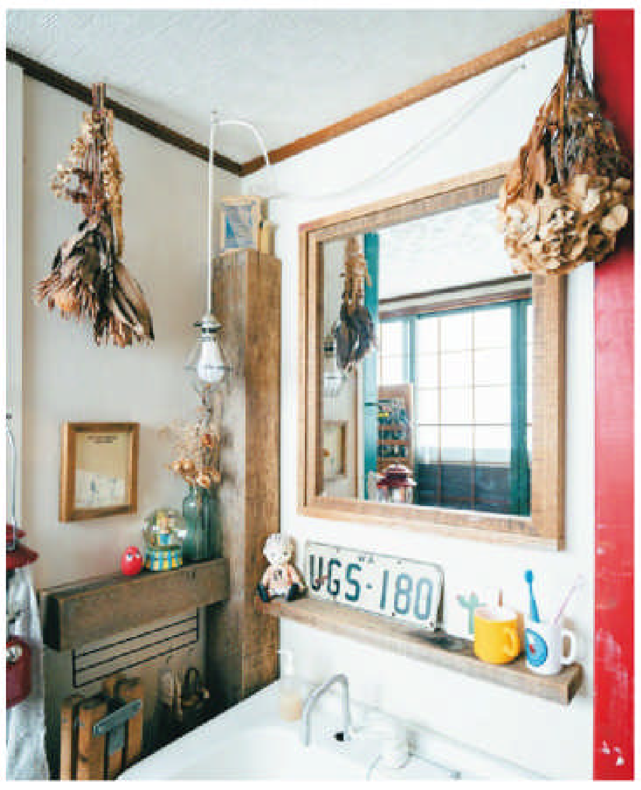
リビングの一角に、古材を使用した棚を取り付け、アメコミのキャラクターグッズを飾る。チョイスするキャラにも鈴木さんならではのこだわりがあり、スヌーピーだからどれでもいいというわけではなく、顔や雰囲気を見て、気に入ったものだけをセレクトする。



01.庭を眺めながら食事ができるように、窓際にはカウンターを自作した。カウンター下には、ランタンやクーラーボックスなどのヴィンテージ〈コールマン〉などのアウトドアギアを並べて。庭にはウッドデッキがあり、夏は屋外でBBQを楽しんでいる。その際に、このアウトドアグッズを使用することも。　02.玄関にある靴棚も鈴木さんが手がけたものだ。アメカジテイストな服装に合うよう、〈ダナー〉や〈ラッセルモカシン〉など重量感のあるブーツやアウトドアシューズが好み。　03.玄関脇にある納戸。好きで長年かけてコレクションしているというランタンの空き箱などを、角を揃えて収納する。鈴木さん宅がスッキリして見えるのは、ディスプレイするところと隠すところのメリハリをつけており、角を揃えた収納がポイントだ。　04.ハシゴにホウキやバッグをディスプレイ。バッグのほか、帽子などの小物も吊るし、見せて収納している。　05.こちらは自宅のすぐ近くにあるショールーム。古い倉庫だったが、時間をかけて手を加えていった。古材でできた壁とヴィンテージのポスターが並ぶ、雰囲気のある空間だ。
06.鈴木さんが手がけた家具が並ぶショールームの一角。〈ペンドルトン〉の布地を使用したスツールや、アイアン脚に古材の天板を採用したテーブルなどが並んでいる。

01 02 03
04 05 06

テレビボード代わりに、〈ペプシ〉などの古いアメリカのドリンクケースをぎっしりと並べることで、統一感が出てスッキリして見える。ケースの間に、DVDデッキを隠して収納されており、生活感を出さない鈴木さんならではのひと工夫だ。



07	08
09 10	11 12

07.備え付けのシステムキッチンの扉部分に薄い板を張っており、ヴィンテージアイテムと馴染むようなナチュラルな風合いに。　08.デニム素材のソファは、鈴木さんがフレームを製作したもの。大人2人がゆったりくつろげる大きなサイズで、クッションや布地は知人に製作してもらった。こうした大きな家具を自作できるのも、家具職人である鈴木さんならでは。　09.丸太の上にバングルや腕時計などの日常的に使用するものをディスプレイ。長年愛用する〈ハミルトン〉の時計は、鈴木さんの生まれた1975年のものを探して手に入れた。　10.一般的な洗面化粧台だったが、上部を外し、自作の古材フレームのミラーを取り付けた。飾り棚も古材で取り付けて、小物をディスプレイ。　11.リビング一角には、ピーナッツのコミックブックやヴィンテージのポスターが飾られている。珍しいアイテムは、『イーベイ』などで購入することが多く、時間をかけて探すのが楽しみだとか。　12.リビングの窓部分。寒冷地なこともあり、暖房器具がいくつもある鈴木さん宅でも、この赤と白の〈ニッセン〉のストーブは暖まる勢いが強く、短時間で部屋を暖めたい時に重宝する。味わいのある古いストーブは、磨いて芯を変えたりと手入れしながら愛用中。手間を掛けるのも楽しみのひとつだ。

13

Living With
My Favorites

elevenista コーディネーター
太郎館 季道さん

PR
めぐみさん

SPEC

居住地域	：	東京都世田谷区
居住形態	：	マンション（賃貸）
間取り	：	1L
居住年数	：	3年7ヵ月
築年数	：	41年

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya　取材協力：【elevenista】 https://shop.elevenista.net/

夫妻はともにアパレル関係に強く、部屋のセンスのよさも納得だが、とりわけ季道さんはECショップも運営。手にしているサッカーボール風のクッションもECの人気アイテムだ。手作りの柔らかな風合いかつメタリックな生地が、部屋のちょっとしたアクセントに。

モノクロームとグリーンが醸し出す、絶妙なアーバンテイスト。

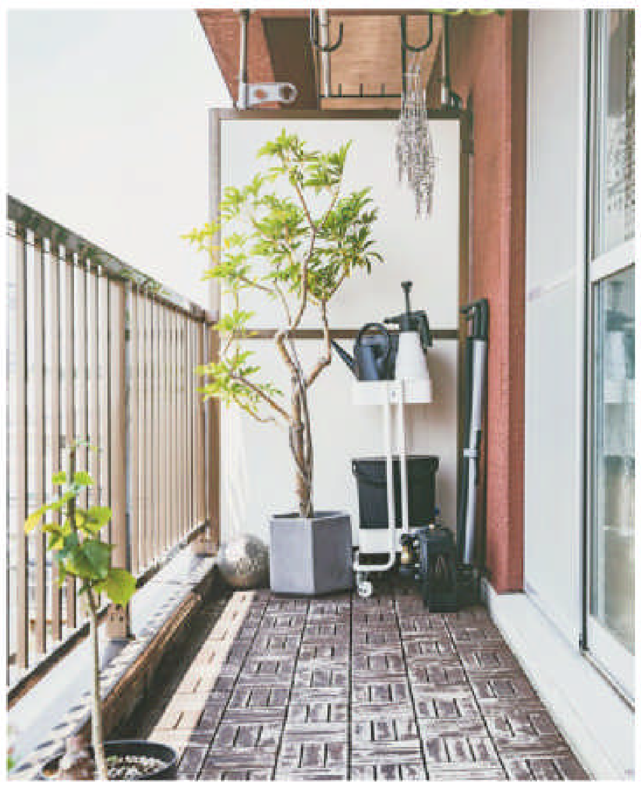
太郎館さん夫妻が暮らすのは築41年を数えるマンション。だがしかし、いかにもヴィンテージチックなのは外観だけ。フルリノベーションを経た住まいは、なんとも洒落た造りだ。小上がりの和室を備えるばかりか、リビングと和室を隔てるのは格子にデザインされたウッドラック。「この造りに引かれたのはもちろん、最大の決め手は抜群の日当たりです」。窓からは燦々と陽光が降り注ぎ、晴天の日には富士山までもが見渡せる。

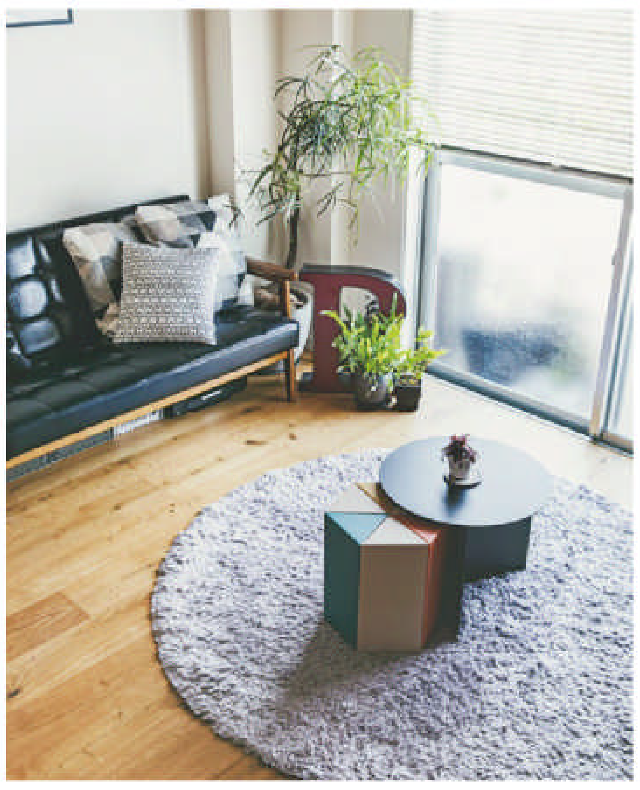
住まい探しに当たり、日当たりのよさを重視した理由こそ、季道さんがこよなく愛するグリーン。日光を浴びて健やかに育つ植物が部屋の主役を張り、品種もディスプレイ方法も実に多種多様だ。この表情の豊かさが部屋にリズムをもたらしているが、植物を多用しながらもナチュラルテイストに偏ることなく、都会的なムードさえ漂う理由はモノクロに統一されたインテリアにある。

「改めて語る理由も見つからないくらい、もともと白黒のカラーリングが好きなんです」という季道さんの言葉どおり、植物がディスプレイされたポールハンガーも、ダイニングテーブルにコーディネートされたチェアの座面も、さらにはソファも額縁までもがブラック。ブラックの家具や雑貨がホワイトの壁に映え、インテリアはまさにモノクロだ。

するとホワイトの壁が部屋を明るく見せるのと同時にブラックのアイテムが全体の印象を引き締め、植物の緑をより引き立たせる。つまりはシャープなモノクロと自由気ままに枝葉を伸ばすグリーンのコントラストが溶け合い、この部屋に漂う都会的なムードを醸し出しているのだ。

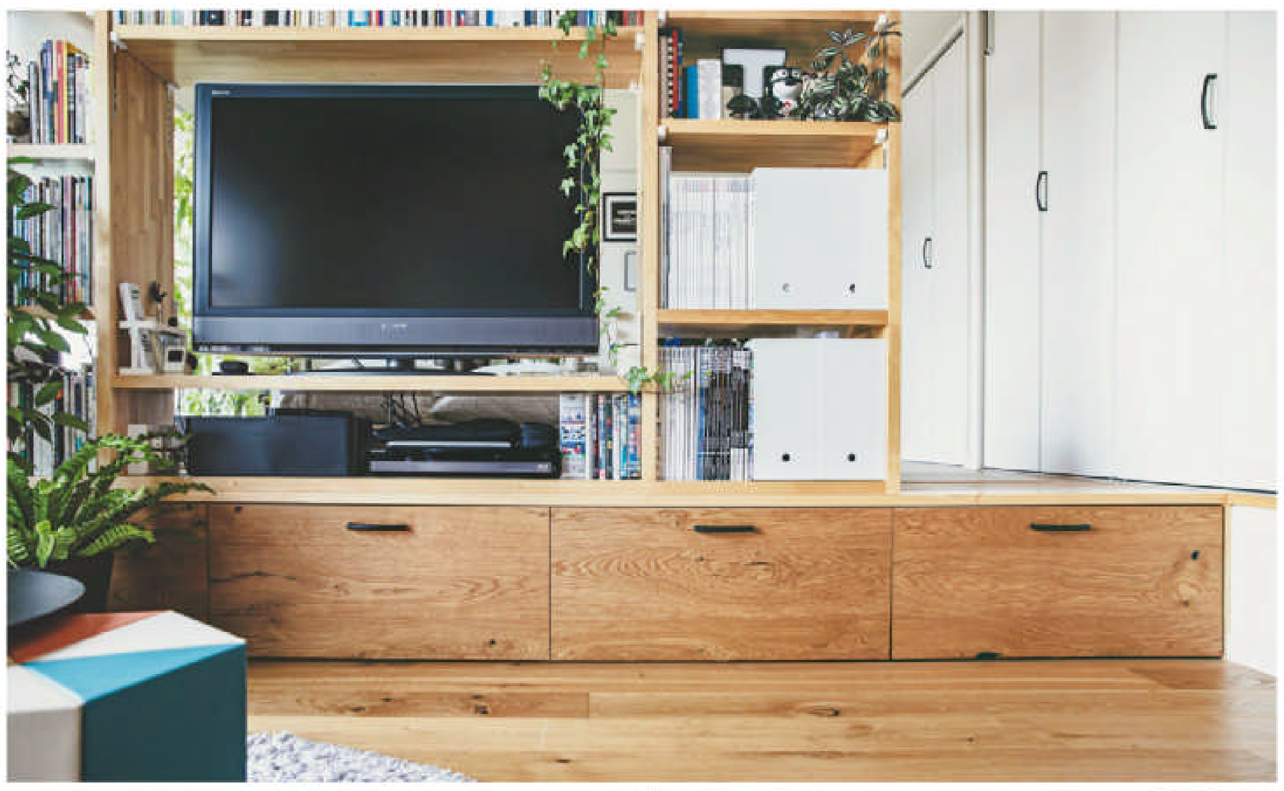
手前に見えるダイニングセットはアルヴァ・アアルト、テーブルを照らすのは〈ニューライトポタリー〉のホルン。この直線的なガラスシェードの隣に、季道さんはツタのように伸びるヤコブセニーをレイアウト。直線と曲線のコントラストも部屋の表情を豊かにする。

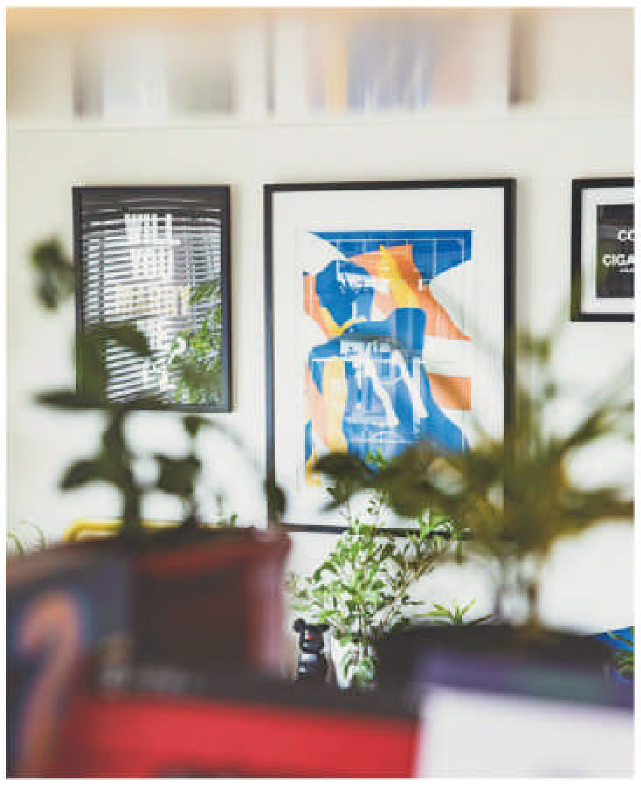




01.〈カリモク〉のKチェアももちろん、座面はブラックのタイプをセレクトし、その隣に見えるグリーンがディスプレイされたポールハンガーは〈ドローアライン〉のプロダクト。突っ張り棒の仕組みが応用され、ミニマルなビジュアルながらタフな仕様だ。　02.太郎館邸ではキッチンにも植物が顔を出し、レンジフードの上で立派に生長しているのはポトス。「料理の栄養を吸っているのか、こんなに伸びてしまって」というが、真相やいかに。　03.こちらのチェストは『ジャーナル スタンダード ファニチャー』からセレクト。アイアンの無機質なテクスチャーも、有機物のグリーンを引き立てている。　04.ベランダのデッキパネルは『イケア』のプロダクト。週に一度は屋内にある植物をすべてベランダに出し、2時間をかけて水やりをするそう。　05.リビングにポップなエッセンスをプラスしているのは、段ボール製にしてイスとしての耐荷重を備えたリキスツール。隣はデンマーク生まれのインテリアブランド〈ヘイ〉のサイドテーブル。　06.ホワイトに統一されたキッチンは、〈ドレスセン〉のミトンがカラーアクセントに。調味料ラックには種類豊富なスパイスが並ぶが、ストライプ柄のフタがかわいい容器にはアヲハタジャムの空き瓶をリユース。簡単に真似できる、エコにして洒落たアイデア。

モノクロと植物の調和ともうひとつ、部屋に都会的な香りを漂わせているのがアート。とりわけ季道さんはタイポグラフィ好きとあって、ヴィンテージのサインレターも収集。植物の影からちらりと見える"11"のサインレターは『レターズエイト』から購入したそう。





07		08	
09	10	11	12

07.格子にデザインされたラックにも植物をずらりとディスプレイ。現在、部屋にあるグリーンは60株にも及ぶというから驚きだが、植物とアートブックを混在させるミクスチャーの感覚に家主のセンスがにじむ。　08.住まいのリノベーションを手掛けたのは"思わず人に話したくなる家"をコンセプトに掲げる『エコラボ・デザインハウス』。リビングと小上がりの和室を隔てるラックは収納まで完備し、洒落たデザインにして利便性も抜群だ。　09.小上がりの和室は夫妻のベッドルーム。ウッドラックに並べた植物とアートブックが目隠しの役割を果たし、それでいて格子による抜け感も兼ね備えている。　10.季道さんは"フットボール"をテーマとしたフリーマガジン『FBI©MAG』を制作するほどのサッカー好き。"背番号11番"を描いたアートもサッカー雑誌の企画により、〈シティ ボーイズ F.C.〉が制作した1枚。モノクロとグリーンが織りなす空間に、カラフルなアートが映える。　11.〈ドローアライン〉のポールハンガーや、惜しまれつつも日本から撤退した北欧の雑貨ブランド〈ソストレーネ グレーネ〉のポットスタンドを用い、目線の高い位置に植物を配するセンスが部屋にリズムをもたらす。　12.木製のベンチとベンチ下のブックスタンドは、どちらも〈石巻工房〉のプロダクトだ。

14

Living With
My Favorites

ビームスボーイVMD
島田華衣さん

SPEC

居住地域 ： 東京都目黒区
居住形態 ： アパート（賃貸）
間取り ： 1K
居住年数 ： 4年
築年数 ： 約40年

自分で作っているからこそ、サイズを変えたり増設したりできるのもD.I.Y.のメリットのひとつ。部屋の中でひときわ目を引く壁面収納も以前はもっとシンプルだったが、置くものが増えたり、生活スタイルが変わったりするのに合わせ少しずつ形を変えているのだそう。

お気に入りのカルチャーに囲まれる自分だけの空間を、イチからD.I.Y.。

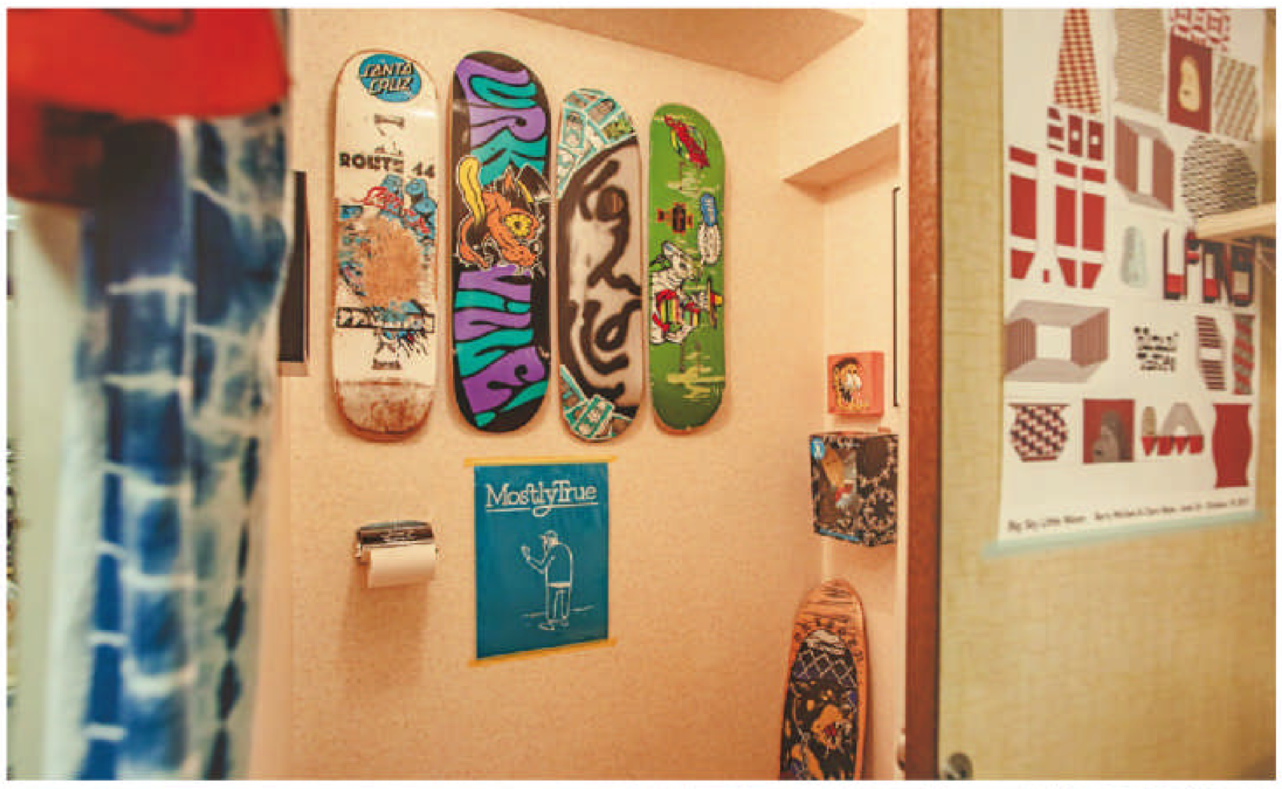
マーク・ゴンザレスのスケートボード、バリー・マッギーのアート、そしてお気に入りのパンクロックのCDやレコード。ストリートのカルチャー香るモノたちに囲まれながらこの部屋に暮らすのは『ビームスボーイ』でVMD（ヴィジュアルマーチャンダイザー）を務める島田さん。壁の棚には写真集や本、マンガなども収納されているが、部屋を拝見して気づくのはサイズ感ぴったりに収まっていること。それもそのはずで、家にある家具はほぼすべて自分で作っているのだそう。

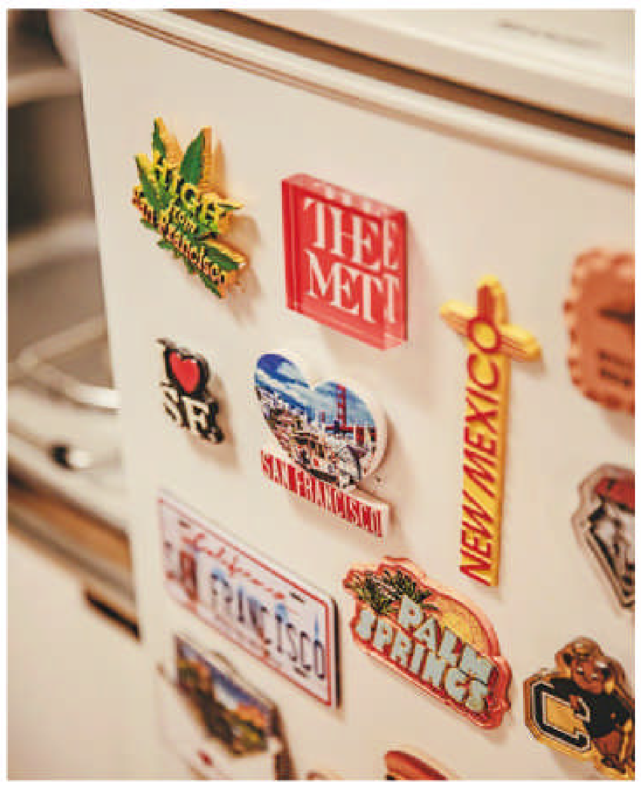
「D.I.Y.を始めたのは7、8年前ぐらい。こたつが大好きなんですけど、気に入るものが見つからず天板を作ったのがきっかけです」。そこからD.I.Y.に目覚めたことで数々の家具を製作。はじめは手軽に柱を設置できる〈ディアウォール〉などのグッズも利用していたが、今ではなるべく使わずに作り上げている。

「既存のグッズを使わない方が安いということもあるんですけど、何より自分が好きなビジュアルに作れるんですよね。もちろん失敗することもありますが、それもどうにかして持ち直します（笑）。自分で設計してるからちょっとした修正や調整がきくのもD.I.Y.のいいところなのかなと」。

置きたいものに合わせ、どう作るかを考えて作業する過程が楽しいとD.I.Y.の魅力を話す島田さん。そうして作ったオリジナルの家具は自分の住まいだけにフィットすることの世でただひとつのものばかり。そんな島田さんの部屋は、大好きなストリートカルチャーに流れるDO IT YOURSELFのスピリットを体現している、と言ったら言いすぎだろうか。

玄関脇のシューズを収納する棚は、スチールラックの脚のみを利用し好みのサイズに。もともとは奥行の長い棚板だったため、靴の大きさに合わせてカットした板に変更し、L字の金具で脚に固定している。スニーカーはお気に入りの〈バンズ〉をメインに40足以上所有。





01.玄関横のハンガーラックに使用しているのは〈イレクターパイプ〉。30cmから用意される長さから選べるほか、好きなサイズにもカットができる。豊富なジョイントがありアイデア次第でどんな形にもできるので愛用するD.I.Y.好きも多い。島田さんはさらにアイアン塗装を施し無骨な質感にカスタム。　02.トイレにはお気に入りのスケートデッキをディスプレイ。アメリカに行った際に現地でしか買えないスケートショップオリジナルのものもゲットしているのだそう。　03.冷蔵庫に貼るのは、都市や町の名前が入った“ザ・お土産”的なマグネット。「友達からもらったものもあるんですが、ほとんどはアメリカで訪れた先で買ったもの。ちょっとダサいぐらいのやつの方が好きなんです（笑）」。　04.「これは既製品で、前の家で使っていたものを持ってきちゃいました」と少々悔しさ（?）をにじませながら教えてくれたのは〈イケア〉のスチールラック。とはいえ棚の上にシールを貼りひと手間プラス。　05.梁を利用して突っ張らせた2×4材に有孔ボードを組み合わせ洗濯機の上に棚を造作。　06.玄関に置かれた自転車は、なんと映画『E.T.』で登場したBMX。〈T19〉×〈ビームス〉×〈クワハラ〉がコラボした復刻モデルで、細部のパーツまで忠実に再現したマニア垂涎の品。

01		02	
03	04	05	06

「昔からウォールラックに憧れがあって、この家に内見に来た時から梁の下に作れそうだなと思っていたんです」。壁面収納の支えとなる柱には市販の金具をあえて使わず、高さを調節できるキャスター用の金具を利用。柱の好きな場所に棚を付けられ壁もノーダメージ。

07	08	09	10
11	12		

07.パンクロック、スケートボード、映画などいろんなカルチャーに影響を受け、高校時代にバンドを組んでいたことも。近年のご時勢もあり、は音楽仲間と集まる機会が減ったためアコースティックギターを始めたそう。　08.以前はもっと小さなテレビだったが、PS5を大画面で楽しむため大きなテレビに変更。テレビのサイズに合わせて下の台も幅を広く作り変えた。　09.〈ブラッド〉のレコードプレーヤーと〈ヤマハ〉のギターアンプは、アナログな雰囲気のルックスが部屋の雰囲気ともマッチしている。10.壁にはお気に入りのアーティストの作品を。こちらは、雑誌やCDのジャケットなど多方面で活躍するミヤザキノブエとトモエ姉妹のイラストレーターユニット、ストマックエイクのアート。　11.島田さんがD.I.Y.にハマるきっかけとなったのがこのこたつの天板。「板の上に1×4材で枠を作り、そこに目地材を流し込んでタイルを張っています。初めて作ったものだったのですごく時間がかかりましたね。裏面の仕上げもきれいにはできてないんですけど、今でも使っています」。　12.仕事でリモートワークが増えたことから、もともと据えつけていた棚を外しPCデスクを設置。デスクはオーダーもできる家具ブランド『かなでもの』で好きな天板と脚を選び組み合わせている。

15

Living With
My Favorites

WINDY AND RAINY 代表
キノシタさん

SPEC

居住地域	：	長野県諏訪郡
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	4LDK＋3S＋土間
居住年数	：	1年1ヵ月
築年数	：	1年1ヵ月

「長野は四季の移ろいが豊か。氷点下15度の寒さになりますが、冬の景色も美しいんです」。その景色を切り取る窓のロールスクリーンを下げると、プロジェクターが投影できる仕様に。ちなみに家の設計を手掛けたのは、長野と隣接する山梨県北杜市の『木村工務店』。

Photo ／ Taizo Shukuri　Text ／ Kyoko Oya

無機質なインテリアとアウトドアの趣が互いに引き立て合う、大きな窓のある家。

再販のたびに即完売を繰り返している〈ウィンディアンドレイニー〉のスターライトタープ。五角形のシャープな造形が美しく、その繊細さとは裏腹に堅牢。外遊び好きの心をくすぐって止まないが、生みの親であるキノシタさんは自身のことを〝木を使わないキャンパー〟と称する。

とは言え、彼は生粋のアウトドア好き。南アルプスの麓に生まれ、幼いころからキャンプが日常。上京後も山麓から眺める夜空の美しさを求めてはキャンプに繰り出し、そして生まれたのがスターライトタープだ。さらには慣れ親しんだ東京での暮らしにピリオドを打ち、故郷である長野県へのUターンを決めたのも「自然に囲まれて暮らしたかったから」。それほどまでに自然を愛するキャンパーが、キャンプに〝木を使わない〟のはなぜなのか。その答えこそ、キノシタさんの住まいにある。

とりわけ象徴的なのが〈カッシーナ〉のソファが配された土間。「家具にしてもギアにしても、無機質な美しさのあるアイテムに引かれます。でも、無機質な美しさとアウトドアの趣が相容れないかと言ったら、そんなことはないと思っていて」。

グレーを基調にシャープなイメージにまとめられた土間には、外の景色を切り取るような大きな窓。夏には窓向こうの緑がみずみずしい印象をもたらし、冬には木枝に降り積もった白雪がグレーイッシュなインテリアに映える。まさに借景だが、借景は屋内と屋外の景観が融合してこそ成立する。〝木を使わないキャンパー〟の信条は住まいにも注ぎ込まれ、無機質な美しさとアウトドアの趣が互いの印象を引き立て合う。

キノシタ邸はウッドデッキも完備。目線の向こうにそびえる八ヶ岳の景色を眺めながら紫煙をくゆらすというから贅沢だ。そこにレイアウトされたローバーチェアのリプロはロータイプにカスタムし、ドリンクホルダーもプラス。ハンモックは〈イーノ〉のプロダクト。

01.「ギア収納の専用スペースを設けたものの、すでにパンパンの状態」と苦笑交じりに話してくれたが、どのアイテムも整然と並んだ様子が絵になる。ちなみに正面に見えるヴィンテージのレザートランクには、細々としたギアがぎっしり。使い古されたルックスが、美しくもタフな印象を醸し出している。　02.ギアの収納ラックは堅牢性重視のスチール製。ガチャ柱を用い、棚板の高さを自由に変えられる仕様に。　03.キノシタ邸は開放的な抜き抜け構造。2階部分に相当する壁にも大きな窓が設えられ、野外の景色を切り取っている。　04.玄関扉に飾られているのは〈コールマン〉によるシーズンズランタンの2014年モデル。その下は〈マウンテンリサーチ〉のカッティングボードに自身のブランド〈ウィンディアンドレイニー〉のロゴを刻印し、洒落た表札代わりに。　05.階段下のスペースに造作したラックには「好きなモノだけを詰め込みました」とのこと。レコードや写真集に混じり、アウトドア好きとして知られるジェリー鵜飼氏のフィギュアも並んでいるのが、なんともキャンパーらしいセレクトだ。　06.土間にレイアウトされているのはソファもテーブルも〈カッシーナ〉だが、ソファの座面は〈ペンドルトン〉と〈ナイキ〉のコラボによるブランケット生地に貼り替えているそう。

01 02 03
04 05 06

〈カッシーナ〉のプロダクトを主役にシャープな印象に仕上げた土間から一転、堂々たるカウンターテーブルを筆頭にLDKにはウッドを多用。それでもダークグレーの壁やオランダ人デザイナーのトン・ハースによるネットアームレスチェアは、やはり無機質な佇まい。

07 08
09 10 11 12

07.広々とした踊り場にも大きな窓が設えられ、“コルビュジエ家具の傑作”と称されるLC1 スリングチェアに腰掛けながら、ゆったりとアウトドアの景色を堪能できる。 08.“木を使わないキャンパー”であるキノシタさんがひと目惚れしたのが、〈シエルブルー〉のロールトップテーブル。これを主役にリビングには木製の家具を多用し、ソファとテレビボードは『クラッシュゲート』からセレクト。 09.玄関と土間を隔てるドアは格子のデザイン。格子の抜け感も野外の景色を引き立てる。 10.ワークスペースの間取りに合わせ、ついに探し当てたというデスクは〈ヴィトラ〉のプロダクト。そこに〈ペンドルトン〉と〈フリークスストア〉のコラボによる折り畳みチェアをコーディネート。ちなみにワークスペースの壁にもジェリー鵜飼氏のキャンバスアートが顔を出し、お気に入りぶりが窺える。 11.グレーの壁と美しく調和する造り付けのキャビネット。コンクリートのようなテクスチャーだが、キャビネットの素材はウッド。表面にモールテックスの塗装を施し、無機質な質感に仕上げている。 12.ダイニングテーブルと一体化した壁のカップボードは建築時の造り付けだそう。ダイニングではなく、キッチンに向けて調味料類が並び、手に取りやすさを叶えると同時に生活感もカバーしている。

16

Living With
My Favorites

THE GREAT BURGER オーナー
車田 篤さん

SPEC

居住地域	：	東京都世田谷区
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	3SLDK+ルーフバルコニー
居住年数	：	1年
築年数	：	1年

広々としたリビングで愛犬のマルコとくつろぐ車田さん。大きな存在感を放つレッドウッドのテーブルを中心に〈イームズ〉や〈ジャンヌレ〉といった銘品と呼ばれるチェアたちがさりげなく置かれている。また冬に活躍する薪ストーブの迫力もそれらに負けていない。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Tamaki Itakura

友人たちが気軽に集まれる場所としてデザインした自宅。

「店ではないけど、パブリックスペースのように、いつでも友人たちが集える場所をイメージしてデザインした」と話すのは『ザ グレートバーガー』のオーナーを務める車田さん。これまで自身の店も含めて、複数店舗を手掛けてきた彼だが、自宅をデザインするのは初めてだ。構想も含めて、2年掛けて仕上げた車田邸は、もはやプライベートな空間としては、遥かに高スペックな仕上がりを見せる。「おそらく小さなカフェよりは、格段にスペックの高いキッチンに仕上がっています。これまで30店舗ほどのショップを作ってきましたから、ここで手を抜くことは許されないですよね。リビングダイニングの半分以上が、キッチンになっていますからね。クオリティには自信があります。でももう少しコンパクトにしてもよかったかなって（笑）」。

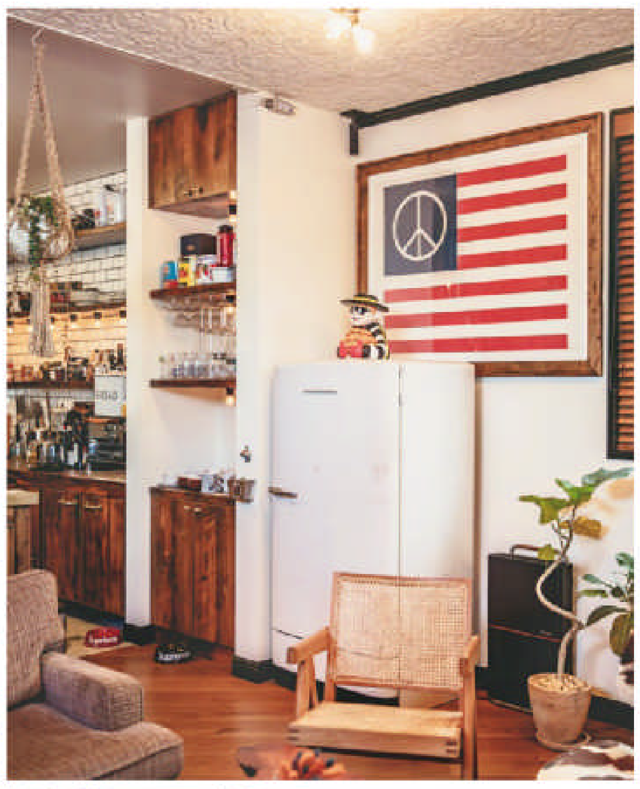
1階はバスルームとウォークインクローゼット。2階は大きなリビングダイニング。3階は自身の寝室と愛犬マルコの部屋。さらに上階は、まるでホテルのような客室。そして樹齢200年の巨大なオリーブの古木が植えられるバス付きのルーフバルコニー。もはや夢にも描けない勢いに限りを尽くした空間が広がっている。「友人たちが集える自宅をテーマにしているのですが、そのなかでも日常の中に非日常を入れたいと考え、寝室をホテルのようにしたり、ルーフバルコニーにバスタブを設置したり、キッチンにこだわってみたり、そんな日常を送れる空間にしたかったんです。もし次、同じように自宅を造る機会があるとしたら、もう少し田舎のほうに、もっとスケールの大きな平屋を建ててみたいですね」。

エスプレッソマシン、コンベクションオーブン、ハースグリラーなど、自宅のキッチンとは思えないほど、高スペックな機材が導入された車田邸。「カウンターには、天然石モザイクを使っているのですが、そろそろ天板を無垢の木材に換えてみようかなと考えています」。

01.カウンターキッチンの対面に、まるでショップのようなボックス席を設置。「階段脇のデッドスペースを有効利用しようと思いこのボックス席を作りました。店舗での仕様と同様に、ベンチのシートを開けると収納スペースになっています」。　02.タイル貼りの壁面に棚が設置され、上段は鍋などの調理器具類、2段目には皿類を収納。3段目にはスパイスなどの細かな調味料がずらりと並び飲食店オーナーならではのセレクトとなっている。　03.アメリカのホテルをイメージした寝室の壁紙が、クラシカルな空間へと仕上げ、心地よい眠りの世界へと誘う。シーズンや気分によって、いつでも貼り替えられるのも良点。　04.カウンターには、ラグジュアリーな印象のある天然石モザイクを使用。現在はリビングダイニングで使用する木製家具などに合わせて、無垢の木材に変えるか本気で検討をしているのだとか。　05.ボックス席のスペースには、チェックのファブリックシートに花柄の壁紙をコーディネイトしたファンシーな空間。窓際には、ニューヨーク・ブルックリンを拠点にテキスタイルを使って食材をテーマに作品を手がける〈ユキ&ドーターズ〉のオブジェが飾られる。　06.キッチンの足元もタイル貼り。ネイティブラグをイメージしたデザインはもちろん車田さんがオリジナルで考えたもの。

01 02
03 04 05 06

極力、柱を空間に存在させず、居住空間としては高めな2.8mもある天井。リビングには自然光が入り、明るく空間を照らす。また壁面には車田さんがコレクションしているヴィンテージの雑貨や食器類、さらにはサボテンをはじめとする観葉植物がズラリと並べられている。



07 08 09
10 11 12

07.知人のインテリアショップにて購入したというヴィンテージのキャビネット。天然木ならではの美しい木目や深みのある色に加え、年代物にもかかわらず、コンディションも素晴らしい逸品。「買ったことすら忘れてしまうほど、ショップの倉庫に置き去りにしていたキャビネットですが、この家が仕上がったことを機に自宅に迎え入れました」。　08.丸みを帯びたフォルムが特徴的な大型冷蔵庫は、1950年代製の〈ゼネラル・エレクトリック〉の冷蔵庫。その保冷力は現役だそう。　09.寒いのが大の苦手という車田さん。薪ストーブがあれば、冬でも室内が暖かく保たれ、エアコンを使用することなく過ごせるのだという。　10.リビングの棚に置かれているサボテンたち。特殊な形の個体が多く、どれも珍しい個体ばかり。その上にはネイティブアメリカンモチーフのヴィンテージトイ。こちらも1930年代以前の希少なものばかり。　11.リビングに圧倒的な存在感を放つローテーブルは、カリフォルニアで育ったセコイヤ（レッドウッド）の無垢材。　12.ルーフバルコニーには、なんとスペインから輸入した樹齢200年のオリーブの古木が植えられ、強烈なインパクトを放つ。またこの場所には、シャワーヘッドとバスタブが用意され、心地よい季節には露天風呂も楽しめる贅沢な空間へと仕上がっている。

17

Living With
My Favorites

GRWS Inc.代表
SHINPEIさん

SPEC

居住地域 ： 東京都世田谷区
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： 1DK
居住年数 ： 4年
築年数 ： 45年

同じグリーンでも濃淡の異なる植物を床から天井、そして壁面まで、室内にぎっしり埋め尽くし、若い頃から憧れだった植物に囲まれた部屋で毎日を過ごすSHINPEIさん。「植物はオブジェであり、ペットでもある」というだけあって、植物愛に溢れた空間となっていた。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Tamaki Itakura　取材協力：【PLEASE GREEN】https://pleasegreen.co.jp　【Instagram】@pleasegreen_studio

植物を育てるカルチャーに触れたのは、映画『レオン』を観てから。

「植物にハマるきっかけとなったのは、強いて言うなら、映画『レオン』を観てからですかね。当時、物語もさることながら、単純に彼が植物を愛する姿がカッコよかったんです」。

ジャン・レノ演じるレオンが愛したアグラオネマを目にし、植物を育てるカルチャーを知り衝撃を受けたと話すSHINPEIさん。同じく、ウォン・カーウァイやクリストファー・ドイルといった名監督らが手掛けてきた作品のインテリアの生っぽい質感に大きく影響を受けた10代。もっと遡れば、幼少期に夢中になった秘密基地のように、自身の理想の空間を徐々に具現化した結果が、いまの空間の基盤となっているのだと話す。

「植物と同じく家具やインテリアが好きで、名目上インテリアの勉強と称して、フランスに1年ほど住んでいたんです。そこでもやはりライフスタイルに植物が根付いていて、空間作りに関していろいろな刺激を受けることができました」。自宅は東京でも随一のカルチャーの発信地で知られる三軒茶屋からほど近く、築45年のヴィンテージマンションの一室だ。最上階の角部屋で3面からたっぷりの採光が射し込み、風通しのいい部屋は植物びいきな物件だ。

「趣のある古いマンションなので、建物の雰囲気を残しつつ、グリーンをインテリアとして置くように、かつ似たような色や形の植物はあまり合わせないようにしています」。

そんな彼が空間をプロデュースした『プリーズグリーン』は、同じマンションの下層階。もちろん自宅同様、グリーンにまみれた心地よい空間に仕上がっている。

01
02 03

01.このマンションを契約する以前から建物の存在を知っていたため、ここに住みたいと思っていたというSHINPEIさん。「陽当たりがよく風通しのいい部屋であるため、夏でも冬でも極力、エアコン類は点けないようにしています」。 **02.**インテリア好きでもある彼のベッドルーム。壁にはデザインコンシャスなヴィンテージラタンフレームのミラー。植物を飾っていない壁にも視覚効果でグリーンが目に映るようにしているのだとか。 **03.**壁や天井、床などありとあらゆるところにレイアウトされた植物たち。もちろんベランダも植物で溢れている。「植物は色と形で好きなものを選んでいるだけ。実はこれほど量はあってもマニアックな人ほど詳しくはないと思います」。

01.レトロな建物の雰囲気を壊さない程度に空間をカスタムするのがSHINPEIさん流。部屋のインテリアとして馴染んでいる木製本棚は、味のある木材を購入し、D.I.Y.で作ったもの。お気に入りの本が置かれ、そこにも植物がほどよくレイアウトされている。 02.部屋のグリーンや温かみのある木製ファニチャーの中にひと際映える〈イームズ〉のシェルチェア。美しいエッフェルベースにヴィンテージの質感が植物の空間にアクセントとなってくれる。 03.レコードとプレイヤーが置かれる棚も自身による手作り。盤の大きさはもちろん、ソファやスツールの高さ、空間のバランスなどを計算して作られているそう。 04.リビングダイニングとして使用している部屋には2人掛けのソファが置かれるも、グリーンに囲まれた空間は彼にとって癒し。インダストリアルな照明やアートなどとも相性がよく馴染んでいる。「暖房をあまり点けないので、冬は自宅でもアウターを着て、このソファで本を読んだり、酒を飲んだりして過ごしています」。 05.玄関に設置されたシューズラックは〈リヨン〉のもの。手前に映るウッドパネルの家具はお気に入りの冷蔵庫で、キッチンから冷蔵庫、シューズラックまですべて高さを合わせることで、空間の統一感が生まれるのだとか。壁面には鮮やかな色のアートが、額装され飾られる。 06.インダストリアルな1灯の照明。ダクトレールによって配線が繋がれているため、照明の位置を変えることができ、レールにもフックを設置することで植物を吊ることができる。ドライフラワーと合わせるのも新鮮。 07.いまとなっては珍しいバランス釜が設置され、タイル貼りがレトロな雰囲気を煽るバスルーム。もちろんここにもグリーンを配置。 08.グリーンに映える原色のインテリア小物が空間のアクセントに。

〈カリモク〉のソファに、ネルソンベンチこと〈ハーマンミラー〉のプラットフォームベンチをテーブルとしてスタイリング。「本来、腰掛ける目的のベンチなのですが、部屋のアクセントとしてテーブルとして使用しているため、脚の高さを底上げして使用しています」。

キッチンから冷蔵庫を挟んでシューズラックまで、ほぼ高さを合わせることで、キッチンの圧迫感を軽減させている。「新しいマンションでは見られないレトロなキッチンを最大限に生かす工夫をしました。スパイスや調理器具もインテリアの一部として活躍してくれてます」。

18

Living With
My Favorites

会社員
higebergさん

SPEC

居住地域 ： 愛知県
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 3LDK＋ロフト
居住年数 ： 9年
築年数 ： 9年

数ヵ月前まで子ども部屋だったが、2階へ移動したため自身の書斎として使用中。デスクの上に棚を、窓際にはペグボードを取り付けてキャンプギアを収納している。ほとんどが木材に囲まれた空間は、手を伸ばすとキャンプギアに届く広さで、ひとりで過ごすにはちょうどいい。

Photo ／ Makoto Kazakoshi　Text ／ Showgo Komatsu　取材協力：【Instagram】@9677camp

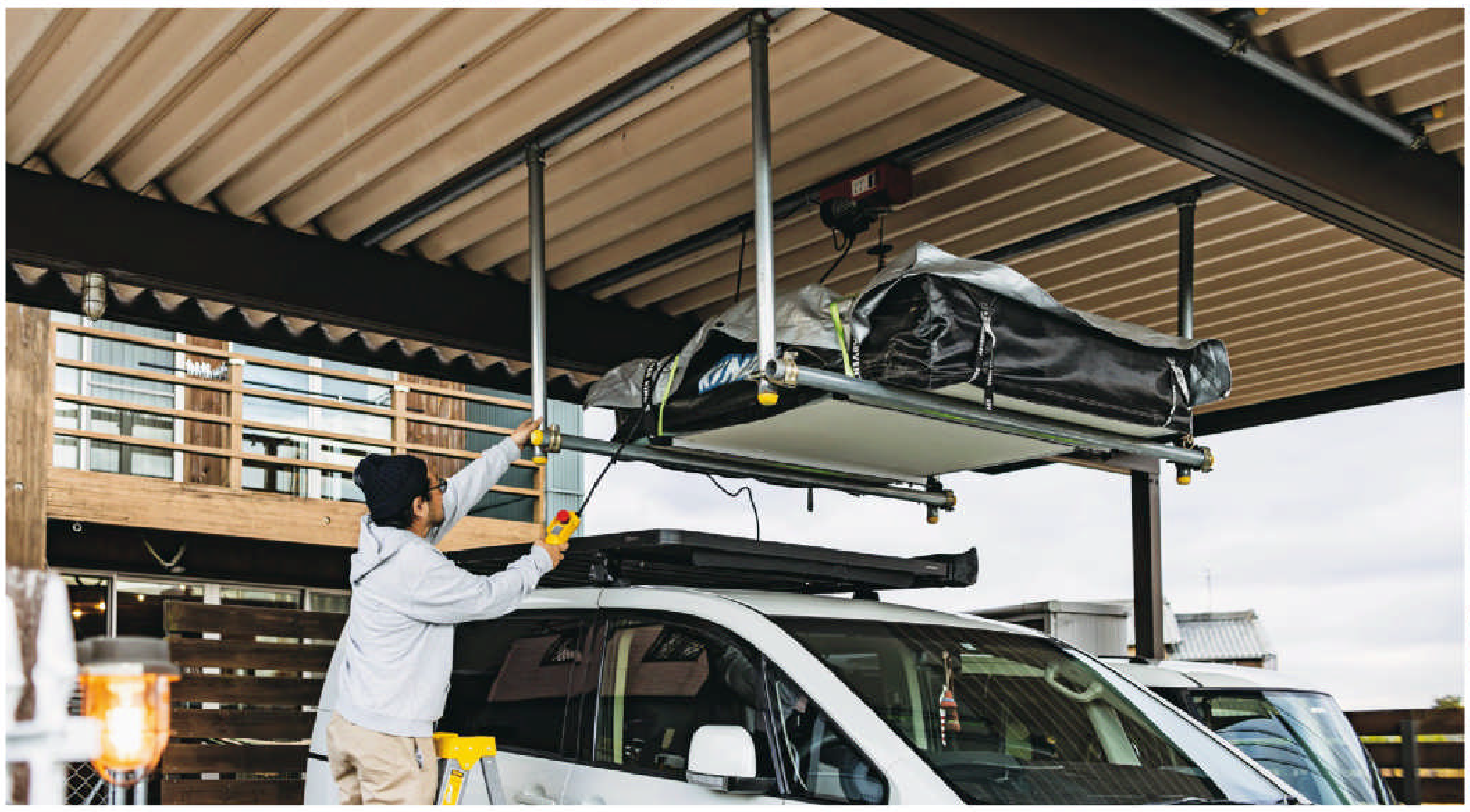
無いなら作る、無駄なく飾る。木の温もりを最大限に活かした空間。

「偶然雑誌で知り、展示場が近くにあったので見学に行ってみたら、アウトドア好きな僕の趣味と一致していて、そのまま契約しちゃいました」。そう話す箱木さんが選んだのは、『ベス』の家。それまで抱いていた一戸建てとログハウスのイメージを覆した新鮮さに魅了されたそうだ。「木をふんだんに使っているから、穴を開けたり拡張したり、自分でカスタマイズできるのがいい。遊びに来た友人3名も気に入ってくれて、『ベス』の家を建てていましたよ」。

箱木さんは、15年ほど前からキャンプを趣味に持つ。増えすぎたギアを整理したそうだが、まだまだ量は多い。そんな悩みには、このような工夫を施している。「収納が限られているので、ギアを新調する際は家でも使えるものを意識して選ぶようにしています。テントやシュラフなど、家の中で使えないギアは書斎に取り付けた棚に保管。内装のほとんどが木なので、既製品でしっくりとくるデザインが少ないから、棚などは自作しています。この家に住んでから、D.I.Y.のために工具も増えました」。家のところどころに趣味を落とし込みつつ実用し、暮らしやすさを自らの手で作り上げることで住居に対する満足感と愛着が増しているようだ。

吹き抜けから光が差し込む広々としたリビングは、ウッドデッキがシームレスに外と繋ぐ。「リビングの広さが何よりのお気に入り。できるだけモノを置かずにスッキリとさせて、派手な色の家具や小物を使わないようにして木の温もりを活かしたインテリアにしました。リビングからすぐに出られるウッドデッキも気持ちいいです。もうこの家以外、住めません」。

01.ハンモックを設置したウッドデッキには、〈カーミットチェア〉と〈マウンテンリサーチ〉のカバーを付けた〈キャンプテンスタッグ〉のベンチを置いて憩いの場に。夏ならここでBBQをしたり、小さいテントを張ったりして、子どもたちも大喜び。　02.収納したいモノのサイズを測りD.I.Y.した書斎の棚。テントやマットやシュラフは上段に、ランタンや小物はまとめて〈ワットノット〉のマルチギアコンテナに入れて下段に配置。　03.以前は座り心地の良さからキャンプに持って行っていた〈ニーチェアエックス〉と、ジャグの台として使っていた丸太モチーフのテーブルは、今では自宅専用に。キャンプ用として購入したもので、出番が減ったとしても家の中で使用している。



01.シューズボックスはりんご箱。中央に板を取り付けて収納力をアップした。上に設置した〈イケア〉のウォールシェルフも、マットやランタンなどのキャンプギアを保管するスペースとして利用。　02.キッチンに付けた棚には、キャンプに持ち出すモノをまとめて置いて、準備と片付けをしやすいように工夫。もちろん、これらも自宅で兼用している品々。　03.愛車にルーフテントを装着することもあるが、脱着を楽にするために高さのあるカーポートを選び、電動ウインチを搭載。　04.こちらの棚もD.I.Y.。引っ越しの際、収納を自作するため工務店に木材を注文しておいた。〈無印良品〉のワイヤーバケットとボックスに仕分けて収納している。ここでも木の主張を邪魔しないカラーリングをチョイスした。　05.〈イエティ〉のクーラーボックスはそのまま置いているが、ナチュラルなカラーリングが内装に使われる木の色合いと馴染んで静かに佇む。自宅では台として使っている〈バリスティックス〉のスケートボードスツールキットと〈マウンテンリサーチ〉のオットマン。　06.書斎のデスク脇にはキャビネットではなく、〈スノーピーク〉のシェルフコンテナを3つ積み重ねて、細々としたキャンプの小物を収納している。　07.最近、より好きになったというグリーンは、〈ソー〉のバケツを鉢カバーとして利用したことによって、洗練されたアウトドアのテイストがプラスされた。　08.寝室がこちら。カーテンの大きさに合わせてカーテンレールを取り付けた。　09.書斎のペグボードには、〈ヘリノックス〉のチェアや〈マウンテンリサーチ〉×〈ユーコ〉のキャンドルランタンなどをディスプレイ。〈スノーピーク〉のフィールドブロワは、エアマットを膨らませたり空気を抜いたりするのに使用。釣りに最近ハマっていて、ロッドも飾られている。

お気に入りのリビング。〈無印良品〉のベッドに〈マウンテンリサーチ〉のブランケットを敷き、くつろぎのスペースを作った。ダイニングテーブルとダイニングチェアは〈無印良品〉のもの。プロジェクターで120インチのスクリーンに投影して観る映画なども楽しみのひとつ。

〈イケア〉で手に入れたチェストは、部屋の雰囲気を損なわないようにニュートラルなグレーを選んだ。そこに置いている植物は植木鉢だけに限らず、コーヒーカップなどで自由にコーディネートを楽しんでいる。その鉢も、デザイン性は高いが、決して派手な色味を使っていない。

2階部分に作られた玄関とベランダ。床に敷かれたのは'80年代のオールドキリムとギャベ。ストーブも〈アラジン〉の古いものを愛用中だ。奥には骨董市などで集めたというヴィンテージのケリーランプが並び、彩りを添える。上のロフト部分は子どもの遊び場だそう。

19

Living With
My Favorites

Tem共同オーナー
旭立武基さん

SPEC

居住地域	：	東京都練馬区
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	2LDK +ロフト＋納戸
居住年数	：	3年
築年数	：	13年

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ GO OUT

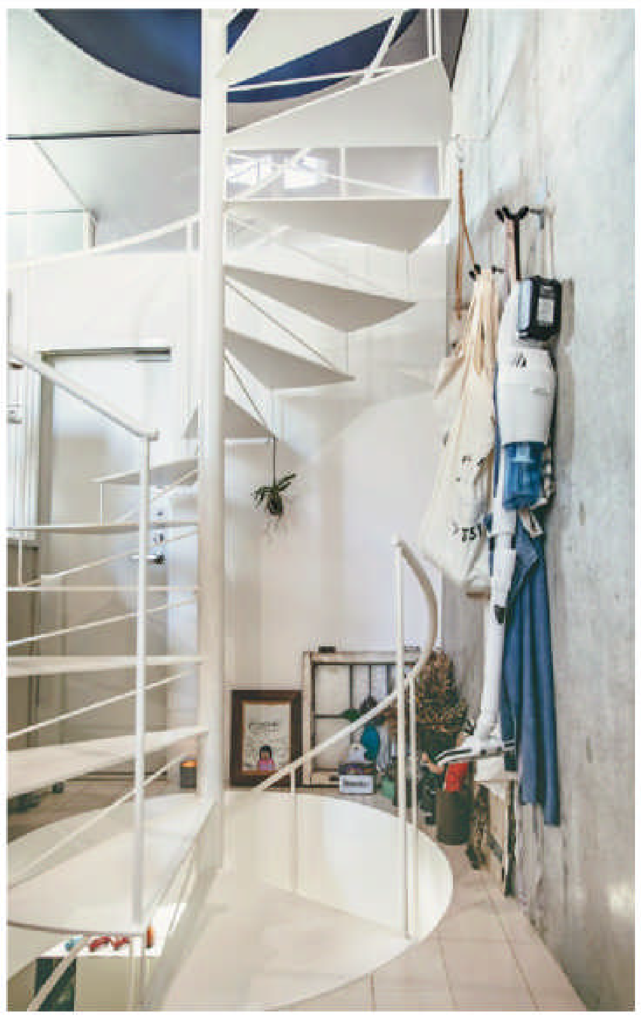
一期一会の出会いが詰まった、コレクションに囲まれるデザイナーズハウス。

伝統ある『ランドローバー』をはじめ、クルマ好きからイギリスヴィンテージに傾倒していったという旭立さん。特にミスターフレッドとして、世界的に有名な老舗食品メーカーのキャラクターグッズは、コレクターと言える程。「ガラクタばかり集めちゃって（笑）」と話すコレクションだが、積み重ねられたボックス類は収納として現在も大活躍。メーカーのバックボーンなども見た上でセレクトし、特にペッパーミルは〈プジョー〉を愛用中。「〈プジョー〉の始まりは製鋼業。こうした歴史を紐解いてアイテムを選ぶとより愛着が湧きます」。

またヴィンテージ品だけでなく、この家自体も旭立さんの自慢のコレクションだと言える。実はこちら、著名な建築家の遠藤政樹氏が手がけた物件。「前に住んでいたマンションも地域が同じ。以前テレビで知ってから気になって、犬の散歩ついでに見ていたんです。そしたら偶然売りに出されると聞いて、即問い合わせました」。引き合いが多数ある中、自宅として使用する人に譲りたいという前オーナーの願いもあり、運命的に旭立さんが購入することに。「いつどこで出会えるかわからないヴィンテージ品は、一期一会の出会いだと思います。この家も同じで、偶然が重なって住むことになった。そんな出会いがとても楽しいです」。

現在、成増駅の近くに構える90年代の古着屋『テム（@tem.203kilogram）』の共同オーナーを務める旭立さん。「人もモノも仕事も、こうした出会いを大事にした先に完成すると思います」。そう話す彼の住む家は、モノと人の想いが詰まった空間なのだと言える。

01.1階はフリースペースとしてリビングだけでなく、旭立さんのコレクションの保管場所にもなっている。大きく開く正面の窓の外では、夏に友人を呼びBBQなどを楽しむこともあるそう。　02.21歳の頃に購入したピンバッチがきっかけとなり、長年その数を増やしているフレッド君のコレクションたち。販促品として作られたものが多く、調味料ケースのほかパズルなどさまざまな種類が並ぶ。'68年に誕生して以降に作られた古いアイテムがほとんどだが、状態のキレイなアイテムばかり。　03.外階段から繋がる地下は、物置として20年以上の趣味であるキャンプギアが保管されているほか、アパレルで働く奥さんの靴などがズラリと並ぶ。シューズラックは後から設置してもらった。



01. 6枚のコンクリート壁がツイストして作られたこの家。「壁が真っ直ぐに伸びていないので、どうしてもデッドスペースが出てしまう。そこにコレクションを並べています」。前オーナーが将来カフェを開くことを想定して作られたカウンターキッチンに、'70年代の〈アーコール〉のイスなどが並ぶ。　02.オレンジのヘルメットは、以前旭立さんが所属していた『ジャーナル スタンダード』社長の私物だったもの。『リプレイス』で購入した。　03. 〈プジョー〉のヴィンテージミル。自らオーバーホールし現役で使える状態だ。ケースの反対にはバターを作る〈デイジーチャーン〉の手動ミキサーなど、レアなアイテムも。　04.地下のライティングレールには、古いシャンデリアのほか、ミリタリー仕様の〈ペトロマックス〉のランタンなどを吊り下げていた。　05.クルマ好きということもあり、ヴィンテージのミニカーもコレクション。階段脇の窓辺には〈ディンキー〉社のコレクションが並ぶ。ほかにも'50 〜'80年代の〈コーギー〉社製ミニカーも集めている。　06. バスケットは'70 〜'80年代の〈フォートナム&メイソン〉で、キッチンペーパーなどの日用品を収納。1階では〈グローブ・トロッター〉のヴィンテージスーツケースが置かれ、収納に使う。　07.イギリスアンティークの棚には、100年も前に使われていたバターや石鹸入れ、ビール入れなどのアンティークのコレクションが飾られている。こうした雑貨類は茅ヶ崎にある『メニュー』や静岡県にある『ドロップアンティーク』、大江戸骨董市で見つけることが多いそう。　08.ソープ類は〈イソップ〉を長年愛用。洗面台は階段途中の中2階に設けられている。　09.螺旋状の階段も、遠藤政樹氏の特徴のひとつ。階段の先の3階は家族の寝室や洋服収納のスペースのほか、広いバルコニーに繋がっている。

LDK部分にはソファを置かず、〈アウトプットライフ〉のフォールディングソファを愛用。後ろに見える黄色のボックスはフランスのポスト。ガラスケースには〈ランドローバー〉のミニカーなどが飾られてる。実はここもデッドスペースを活かした収納になっている。

〈ソルター〉の計りなど、レアなヴィンテージ品が並ぶ夢のような空間。旭立さんはコレクションを飾るだけでなく使うことも多く、イギリスアンティークのカゴはキャンプで収納として活用している。グリーンを飾るラックやハンガーラックももちろんヴィンテージ。

食事はもちろんのこと、読書や編み物をして過ごしているリビング。奈央さんが座っているイスは古道具屋で購入したもので、奥行きがあり座り心地のよさが気に入っているそうだ。ローテーブルも同じく古道具屋で入手。仕事の書き物など、作業をするにもちょうどいい広さ。

20

Living With
My Favorites

インテリアコーディネーター
奈央さん

SPEC

居住地域 ： 香川県
居住形態 ： 団地（賃貸）
間取り ： 2LDK
居住年数 ： 1年半
築年数 ： 40年

Photo / Nobuyuki Miyake Text / Showgo Komatsu

どこを切り取っても、好きなものが目に入るインテリア。

幼い頃、両親に連れられて山登りをしていたのですが、4年ほど前にキャンプ仲間に誘われてから本格的に登山を始めました。キャンプも登山も、外でご飯を食べる特別感が好きなんです。低山なら食材を背負って登り、少し凝った料理を作っています。登頂の達成感もあるので、キャンプで食べる以上に美味しく感じるんですよ」。そう話してくれた奈央さんの住まいには、自然を感じさせるモノや国内外の民芸品など、どこを見ても好きなものが目に入るように並べられている。

家で使用しているのは、古道具屋で購入したものや譲り受けたものが多く、モノを大切にしている様子が伝わってくる。リビングのコーディネートは、ホワイト×ブラウンを軸に、古道具屋や雑貨屋で出会い思わず購入した小物などでカラフルに彩った。登山中に見つけた松ぼっくりや枝なども飾り、山で過ごした思い出も空間を演出するエッセンスとなっている。「インテリアのテイストにとらわれることなく好きなものだけを置いた結果、このような部屋になりました」。そして、できる限り既製品を使いたくない、とD.I.Y.をこなす。テレビのサイズに合わせた飾り棚や、手狭なキッチンを使いやすくするための作業台など、家中のいたるところにお手製の棚を配して、暮らしやすさを追求した。

登山に使うアイテムは、襖を外した押入れに収納し、趣味に特化したコーナーを作成。中にペグボードや棚を設置して、ザックやシュラフなどを見せる収納としてきれいにディスプレイしている。登山ギアのほか、山に関連した小物や本も同じ場所にまとめているのもポイント。この前に立てば、次の山行に期待が膨らむばかりだ。

01
02 03

01.窓際のキッチンツールや登山中に見つけたお土産をハンギングすることによって、縦に動きをつけた空間。キッチンとリビングを仕切る調理用の作業棚はD.I.Y.によるもので、食器などを収納している。　**02.**使用頻度が高く、気に入っているモノをカーテンレールに吊る。色彩豊かな網のバッグは台湾の伝統的なもので、野菜入れとして活用している。ホットサンドメーカーや鍋敷きもこちらに並べているところから料理好きが分かる。「毎日立つキッチンこそ、好きなモノを並べておきたいです」。　**03.**色鉛筆やペンは仕事で図面を引く際に使用。かごには、消耗品や文房具などを収納して生活感を隠す。上部を開くと鏡になっているレトロな引き出しには、メイク道具を入れている。

01.本棚の上に置いたかごには、アダプターやコードなどの使っていないモノを収納。バッグから顔を覗かせているのは、雑貨屋で目が合って連れて（買って）帰ったというメキシコのぬいぐるみ。雑貨屋や古道具屋では直感が働いて買うことが多いそうだ。　02.押入れに作った登山に関連したスペースに、コレクションしている石や甥っ子が作ってくれた紙粘土の山を陳列。自然にまつわるモノは、基本的にこちらへ。写真家の石川直樹の作品も飾られ、山に対するモチベーションが上がりそう。　03.押入れに設置した棚には、山行の持ち物を配置。〈ナンガ〉のシュラフや〈ヘリノックス〉のチェアなどを愛用している。「ギアは長く使用したいので、吟味して選んでいます。吟味しすぎて、いまだに変えずに悩んでいるものも多いです。でも、長く悩んだ分、愛着が湧いています」。　04.好みが似ている母から譲り受けたかごに、毛糸を収納。以前、母から編み物を教えてもらい、おうち時間が増えて再び始めたそうだ。膝掛けやインテリアの目隠しを作る予定。　05.シューズラックもD.I.Y.。上段には鍵や時計、マスクを入れているかごを配して、外出の際にここで最後の身支度を。写真家の濱田英明によるポスターも飾る。香川県内の道の駅で購入した民芸品のほうきを愛用中。06.雑誌や小説、仕事の参考資料などが並んでいる本棚。読書好きな奈央さんは、特に料理エッセイを好んでいるそうだ。　07.冷蔵庫の上にキッチンツールをひとまとめ。冷蔵庫には女優の蒼井優と写真家の高橋ヨーコによるポストカード写真集の作品や、買い物リストを書くためのメモ帳が貼り付けられている。　08.写真をイラストにしてもらった作品や友人からプレゼントでもらったキャンドルなどを棚の上に飾った。奥に置いたフォールディングスツールは、キャンプの際にテーブルとして使っている。

押入れの上段にはキャンプギアをカゴに入れて収納。家中の収納は、ほとんどをかごに入れることで統一感が生まれている。下段には仕事の書類などをボックスに入れて管理。押入れをデスクとして使い、ここで作業することもあるそうで、限られたスペースを有効活用している。

母から譲ってもらったソファに、古道具屋で見つけたブランケットを掛け、彩りをプラス。パッチワークのクッションカバーと相まって、ほっこりとした印象を与えてくれる。 D.I.Y.した棚の上など、部屋中に小物が飾られていて色とりどりだが、不思議とうるさくは感じない。

ダイニングテーブル周辺はデスクもブックシェルフも木製、かつ家具の背丈も低く統一。この家具の低さによって天井が高く見え、コンクリートの壁が際立つのと同時に、すっきりとした印象に。無機質なコンクリートと有機質のウッドを上手に同居させるアイデアだ。

21

Living With
My Favorites

会社員
イノウエさん

SPEC

居住地域	：	東京都江東区
居住形態	：	マンション（賃貸）
間取り	：	1K
居住年数	：	5年
築年数	：	5年

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya　取材協力：【Instagram】@i_am_goino

部屋はキャンバス。ウッドという画材で描く、心地よくも都会的な空間。

イノウエさんが暮らす部屋は45㎡、約17畳もの広さを誇る1Kの間取り。だがしかし、「テナント利用を想定していたのでしょう。水回りは整備されていたものの、造り付けの収納はゼロでした」。多くの人は戸惑うはずだが、美大出身の彼は、むしろ腕が鳴ったという。コンクリートの躯体が剥き出しとなった1Kは、まるで無機質な箱のよう。この箱はいわば、自由に手を入れられるキャンバスだ。

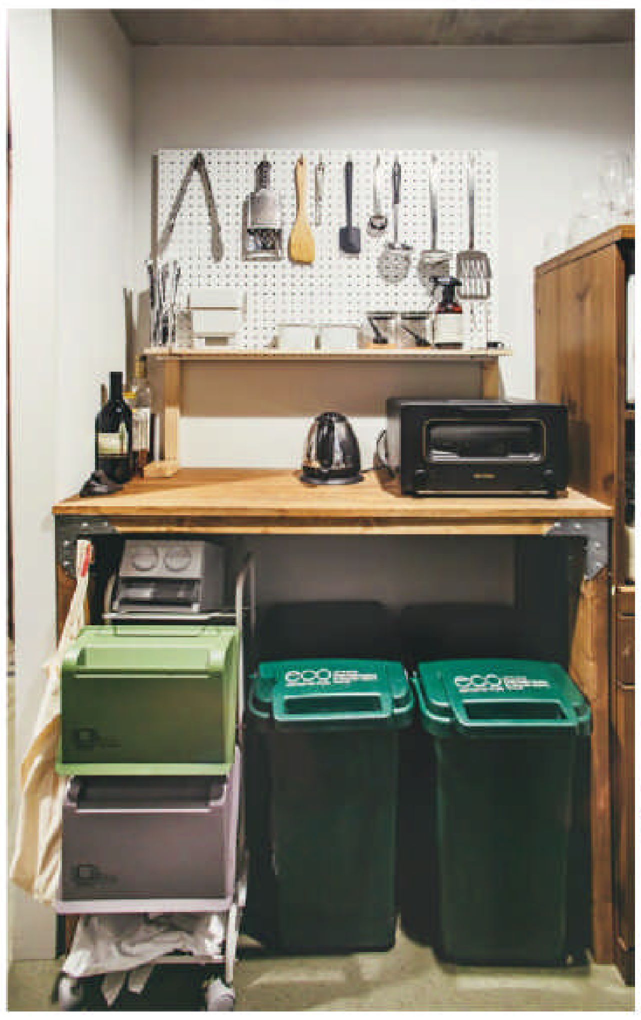
コンクリートに覆われた箱をキャンバスに、まず設置したのが〝木の壁〟。〝木の壁〟の裏にスチールラックを配し、イノウエさんはウォークインクローゼットさながらのスペースを完成させた。さらには〝木の壁〟の手前にレイアウトしたテレビボードも、テーブルからデスクにシューズラックまでもがD.I.Y.。

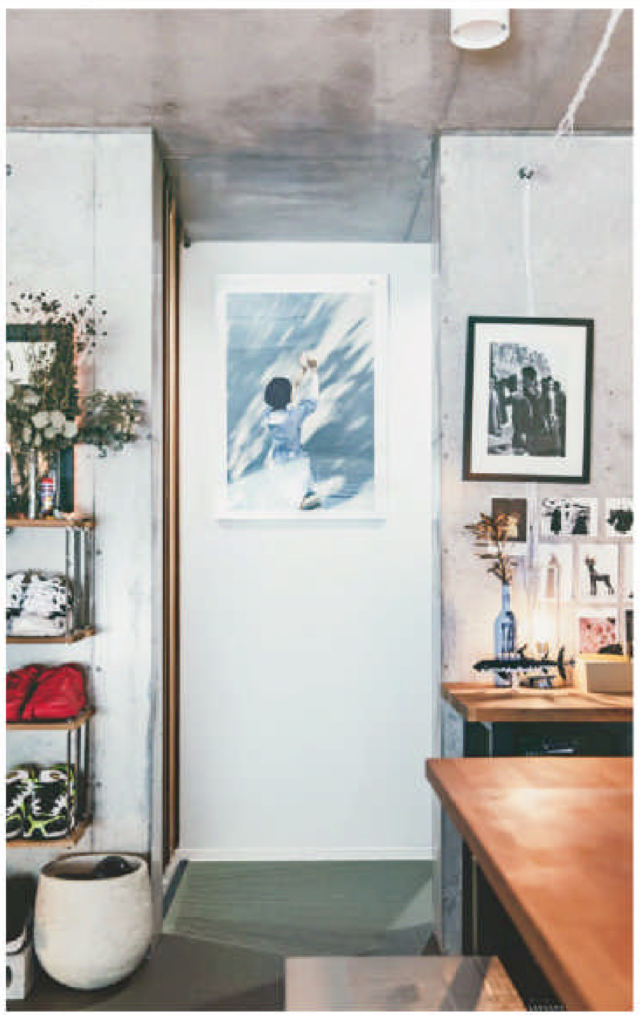
すると手製の木製家具が無機質な空間に温もりをもたらし、途端に居住空間の表情を見せ始める。すなわちウッドは、イノウエさんが住まいを描くに当たって選んだ画材。そしてウッドを多用しつつも都会的な香りが強く漂う理由は、家具の背丈にある。「家具を低く揃えることで天井が高く見え、より広々とした印象になります」と話してくれたが、同時に背の低い家具は壁の一部を露出させ、コンクリートとウッドのコントラストが都会の香りを醸し出す。

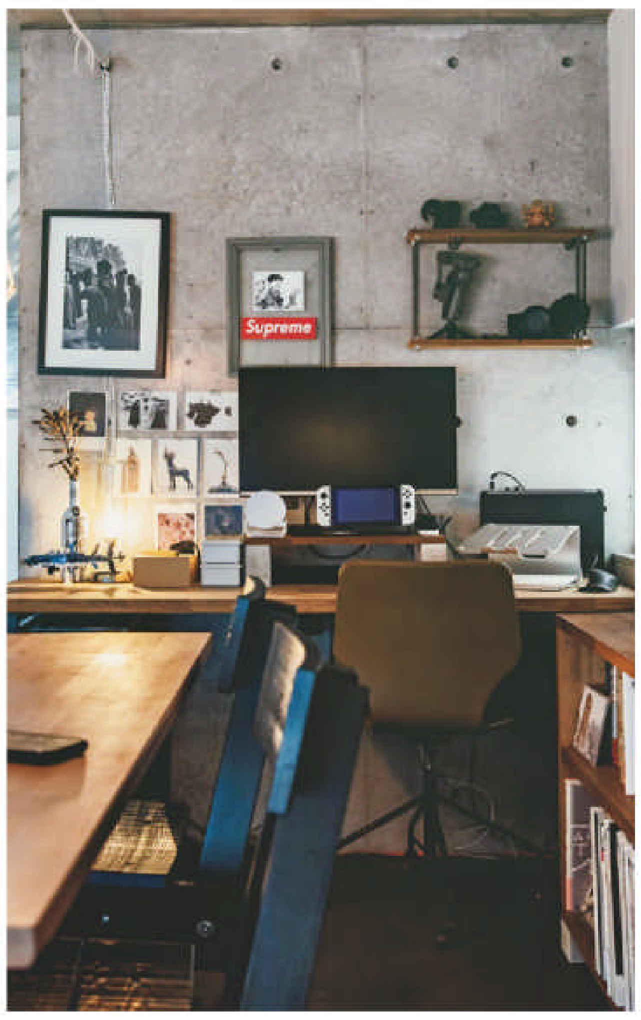
さらに美大出身こそのアイデアがもうひとつ。一切の仕切りがない部屋にリビング、ダイニング、ベッドスペースという異なる空間を同居させるべく、イノウエさんは直線的な家具を多用。その直線が仮想のパーティションとして機能し、無機質な箱を人の住まいに生まれ変わらせた。

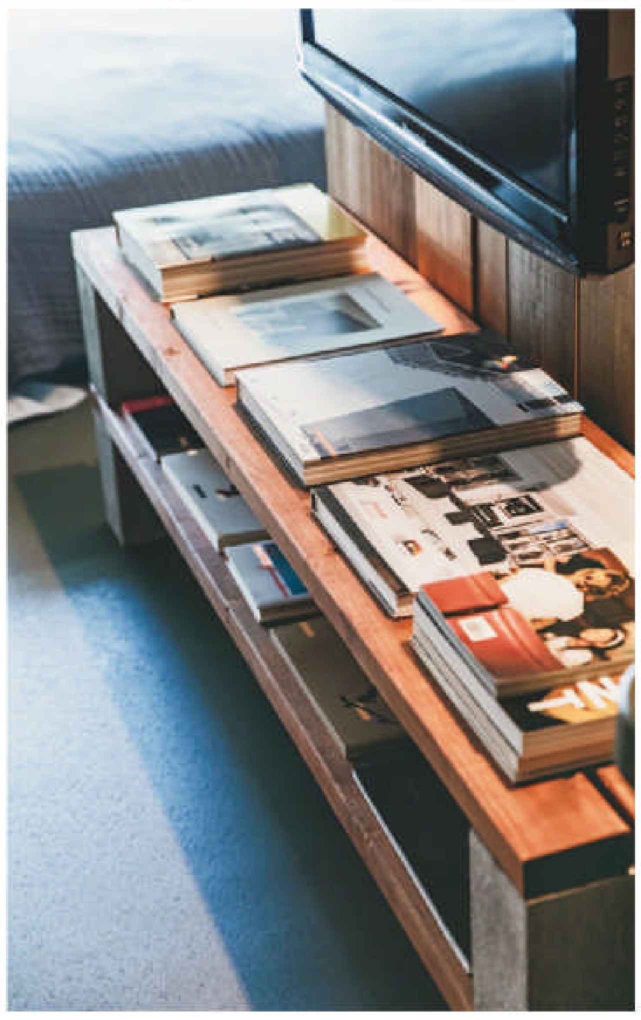
01 02 03

01.住まいの中央にレイアウトされ、テレビが掛けられているのがD.I.Y.による“木の壁”。部屋の内部に小部屋を設えたような大胆なアイデアだが、“木の壁”がもたらす直線的なラインにより、リビングとベッドスペースに仕切りが生まれたような印象に。　02.ダイニングテーブルを照らすペンダントライトまで手製というから驚き。工場現場に用いられるガード照明が打ちっ放しの天井や壁にマッチし、ソケットにはレザーのあしらいもプラスしている。　03.こちらが“木の壁”の裏側、D.I.Y.のウォークインクローゼットだ。グリーンのスチールラックは業務用に特化した『E・スチールネット』にオーダー。棚板の位置を変えられることから、ジャケットもロングコートもすっきりと収まる。









01.ホテルライクな居心地のよさとモダンさをイメージしたというベッドスペース。ベッド周りのリネン類は『無印良品』のプロダクトで統一し、クレープ織り風のギャザーが入ったファブリックをアート代わりに。　02.テナント利用が想定されていたとあって、水回りを除いては一切がひとつにまとまった間取り。そこでテーブルもソファも直線的な家具を多用することで視覚的な仕切りを設けるのと同時に、空間ごとにアクセントカラーをチェンジ。　03.天板やアイアンの脚をはじめ、D.I.Y.の材料はホームセンターで調達することが多いそう。デスクの足元にコンテナをスタッキングすることで収納スペースを確保しているが、色はモスグリーンの床と調和する緑をセレクトしている。　04.自作のウッド家具が並ぶなか、本棚は意外にも既製品。かつて小学校で使用されていた本棚のユーズドとのこと。　05.イノウエさんの趣味が一目瞭然のデスク周り。ライトに照らされたサメは『タンタンの冒険』と〈ナノブロック〉のコラボレーショントイだそう。　06.「思いどおりのサイジングが叶うことがD.I.Y.のメリットです」と、キッチンにレイアウトしたカウンターも家主の手作り。引き出し収納やダストボックスにもグリーン系を選び、カラーリングを統一。さらに壁にはハンギング収納のための有孔ボードをセットしている。　07.キッチンやバスルーム、トイレといった水回りはダイニングスペースの奥に。ちなみにふと目を奪われるアートフォトは韓国の若手写真家の作品とのこと。　08. D.I.Y.のワーキングデスクも壁の幅に合わせたサイジング。テーブルともブックシェルフとも背丈を合わせ、この統一感がスマートな印象を醸し出す。　09.テレビボードもD.I.Y.だが、オイルステインを塗り込んだ板にコンクリートブロックを重ねた、至ってシンプルな構造だ。

こちらのシューズラックは打ちっ放しの壁に残されたPコン穴にセパレーターを取り付け、セパレーターの上に自作のラックをのせる形でD.I.Y.したそう。アパレルショップさながらの仕上がりだが、「壁にPコン穴さえ残っていれば、意外と簡単です」とのことだ。

自作のダイニングテーブルにセットしているベンチとチェアは、どちらも『イケア』とピート・ヘイン・イークによるコラボモデル。リビングスペースのソファも『イケア』だが、手前に見えるテーブルはコンクリートの平板にアイアン脚を重ねる形でD.I.Y.している。

22

Living With
My Favorites

会社員
横内直志さん

SPEC

居住地域	：	千葉県佐倉市
居住形態	：	アパート（賃貸）
間取り	：	3DK
居住年数	：	22年
築年数	：	約30年

かつて家具メーカーでデザイナーを務めていただけに、プロ顔負けのレベルで家中のありとあらゆる家具をD.I.Y.。自分の手で作っていないのは椅子類や鏡などのごく一部。なんと正面に見えるレンガ風の壁も自作品で、発泡スチロールに細かい加工を施し製作したもの。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Mitsuto Matsunaga　取材協力：【Instagram】@n.yokouchi

家具のデザインを手がけていた経験を活かし、家のありとあらゆる家具を D.I.Y.。

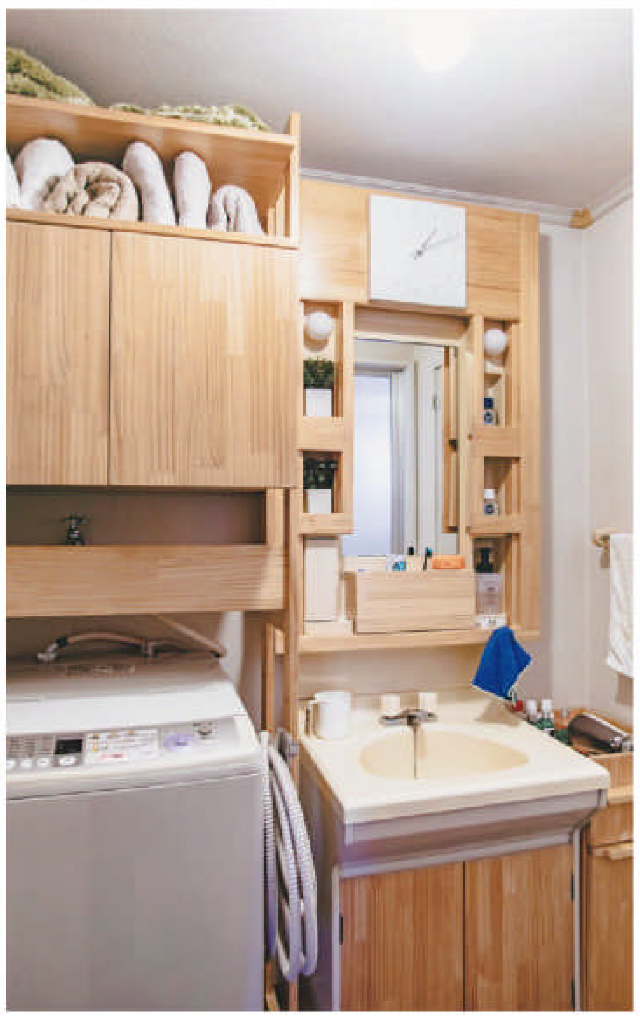
家具メーカーの元デザイナーで、10数年という長いD.I.Y.歴を誇る横内さん。仕事で製造自体は担当していなかったが、家具の素材や構造については言わずもがな、製作するための道具の知識も少なからずあったということで、住まいの家具はほぼすべてD.I.Y.してきた。

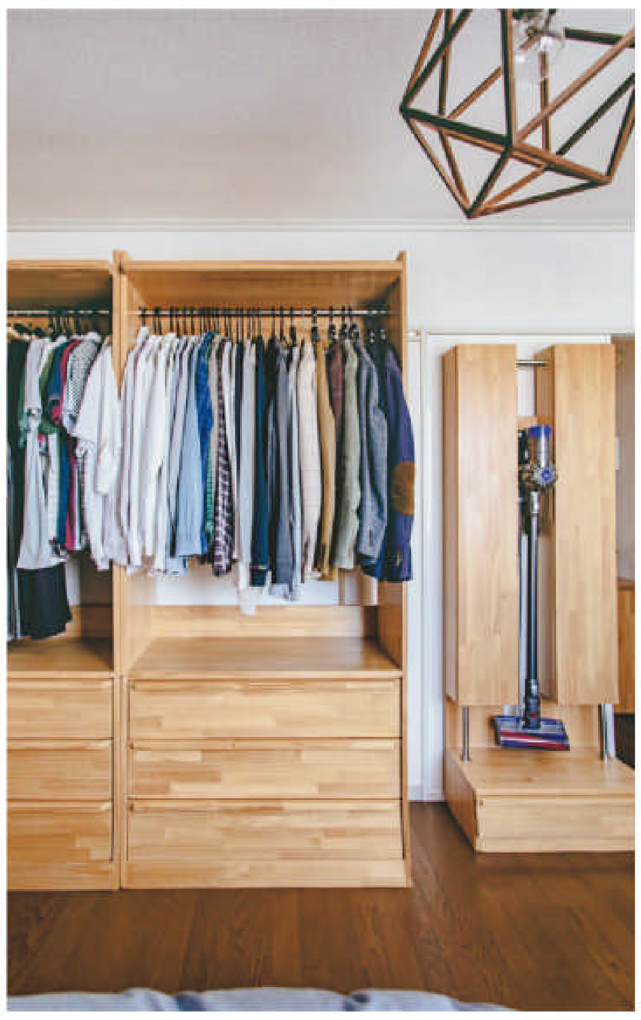
製作する際の工程は、作りたい家具のサイズを割り出すところから。仕事でCADを使っていた経験を生かし、正確な図面を起こしたら、ホームセンターで必要な材料を購入し、部材にカットする。その後は設計図どおりに部材を接合していくのだが、接合には木ネジを使わないのもこだわりのひとつ。部材に穴を開けて、ダボと呼ばれる木栓を接着剤で埋め込み接合していく手法を用い、丁寧に組み立てていく。ちなみに家具を作る際に使っているのは、ホームセンターなどでも手に入りやすいパインの集成材。軽量で加工しやすく無垢材よりも反りが少ないのが特徴で、時間の経過とともに薄いベージュから艶のある飴色に経年変化していく様を楽しめる。

一番最初に作ったのはリビングで使うローボード。以降キッチンボード、本棚、ワークデスク、アウトドアギアの収納ラック、ベッドなど数々の家具を手がけてきたが、ついにはレンガ風の壁まで製作。そのどれもが自作と言われなければ、まったくわからないほどの仕上がりだ。

「既製で売られているものもありますが、間取りに合わなかったり好みに合わない部分もあったりして。自分で作れば部屋のサイズに合わせられるし、使い勝手を考えて工夫もできる。それがD.I.Y.のいいところですね」。

01.ショップディスプレイのように整然と並ぶアウトドアギアを収納するのは、もともと和室だった部屋の押入れ。ふすまを外して側面に有孔ボードを貼り棚を組み立てている。ガス管のように見えるパイプはホームセンターで入手。アウトドアギアは、カーキ系のカラーを中心にレトロなテイストのものをセレクト。　02.まるで造り付けのような本棚も自身で手がけたもの。見た目には大きなサイズだが上下左右4つのパートからなる構造となっている。「側板、天面、底板、横揺れを防ぐための桟という基本の作りさえ分かっていれば、あとはサイズを変えるだけ。大きいからといってそんなに難しくはないんですよ」。　03.こちらが一番最初に製作した、テレビを置くコーナーボード。





01.写真中央の壁に飾られているのはコーヒー豆用の麻袋。適度なサイズにカットし板に貼りつけるだけという技ありアイデア。　02.キッチンボードは作った当初右下に当たるパートだけだったそう。「はじめは3つあるゴミ箱専用の棚を作って。せっかくそれを置いたので上にカップボードを作って2連になり、もうちょっと収納がほしくなり横にも付けてこの大きさまで増殖しました（笑）」。　03.標準仕様のシステムキッチンかと見紛うばかりの完成度。トビラに使う丁番や引き出しのレールをサイズを合わせた材料に移植し取り付けている。　04.これまでで唯一の失敗と教えてくれたのが下駄箱。「もとから付いていたトビラを外し前面から枠を付けようとしたんですが、手前にある玄関ドアの外枠のせいで奥まで入らず……。サイズを微調整して作り直しました」。　05.かつて勤めていた家具メーカーで作っていたものと同じ構造でワークデスクを製作。受けとなる「鬼目ナット」を天板に埋め込み、口の字型の脚をボルトで固定している。「今はL字型にデスクを繋げていますが、位置を変えた鬼目ナットをほかにも埋め込んであり、単体でも使えるようにしてあります」。　06.01のダイニングテーブルの横に置く、収納を兼ねたショーケース。天面にはアクリル板を使用。　07.「洗面台も木枠を押し付け、洗濯機の上の収納と連結させています」。08.収容量抜群の洋服ダンスの横にあるユニークな形状の家具は、一番の力作という〈ダイソン〉掃除機用のスタンド。収納した際ちょうどヘッドが収まるよう間を空けた。左右や下の収納には掃除道具一式をしまう。　09.ベッドは〈無印良品〉の脚付きマットレスを置く前提でフレームを設計。

01	02	03	
04	05		
06	07	08	09

見ているだけでも男心がくすぐられる本格仕様の数々の道具は、突っ張らせた板の間に取り付た有孔ボードに吊り下げて整理。「これだけあれば、ほとんどのものは作れると思います」。裏側にはワークデスクがあり、パーテーションとしての機能も果たしている。

発泡スチロールを使い再現したレンガ風の壁は表面の凹凸や質感、色まで本物そっくり。目地の部分はラインを引いて、その上をはんだごてでちょっとずつ溶かしながら溝を付けている。「これはすごく時間と手間がかかったので2度とやらなかいもしれません（笑）」。

23

Living With
My Favorites

グラフィックデザイナー
セキ ユリヲさん

家具デザイナー
清水 徹さん

SPEC

居住地域 ： 北海道上川郡
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 1LDK
居住年数 ： 5年
築年数 ： 約50年

柔らかな日差しが差し込み、徹さんが手がけた家具が並ぶリビングには、薪ストーブの暖かさともに、子どもたちの笑い声が響いている。リビングのフローリングは、東川産の無垢の木材を使用し、徹さんが床貼りを手がけたもの。素足で歩くのが気持ちいい。

Photo ／ Eri Shimizu　Text/Kumiko Nagaso　取材協力：【salvia】http://salvia.jp/　【モノクラフト】http://www.monokraft.jp/monokraft/

木材のよさを生かして、四季の移り変わりを感じられる家へと。

グラフィックデザインやテキスタイルを手がける『サルビア』として活動するセキユリヲさんと、木材を生かした家具づくり『モノクラフト』を手がける清水徹さんご夫妻は、一家で東京から東川町へと移り住んだ。この場所は集落から少し離れたのどかなところで、雄大な景色を望みながら、子どもたちものびのびと遊ぶことができる。

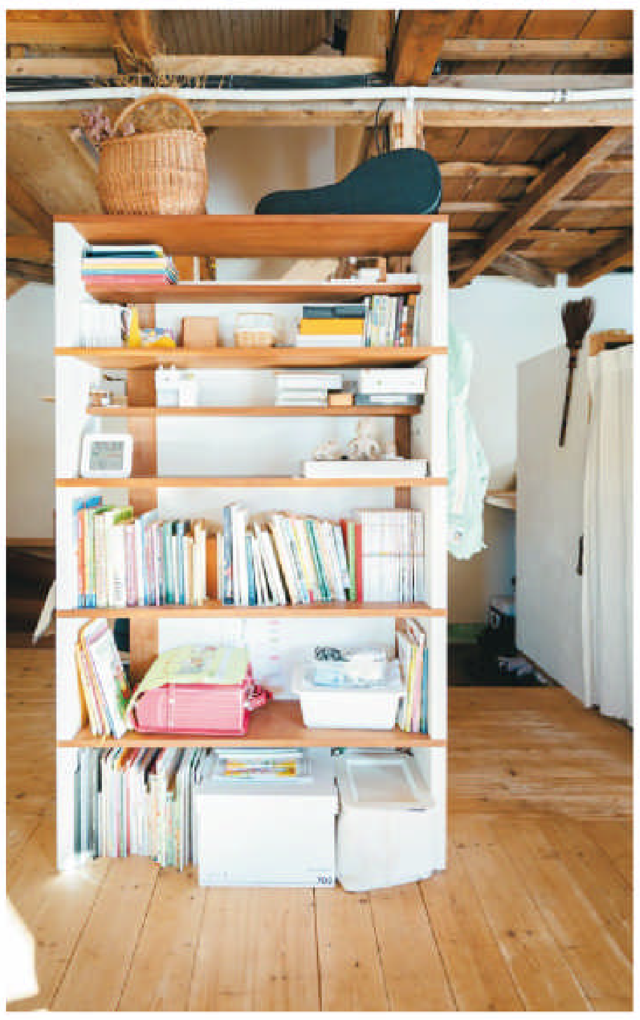
「家具製作のために東川へ通う中で、この物件と出会いリノベーションを始めました。当初は東京をベースに、家具づくりのアトリエのつもりで改築を進めたのですが、こちらの友人も増えて子育てもしやすいので、東京は引き払い引っ越しました」と、徹さん。

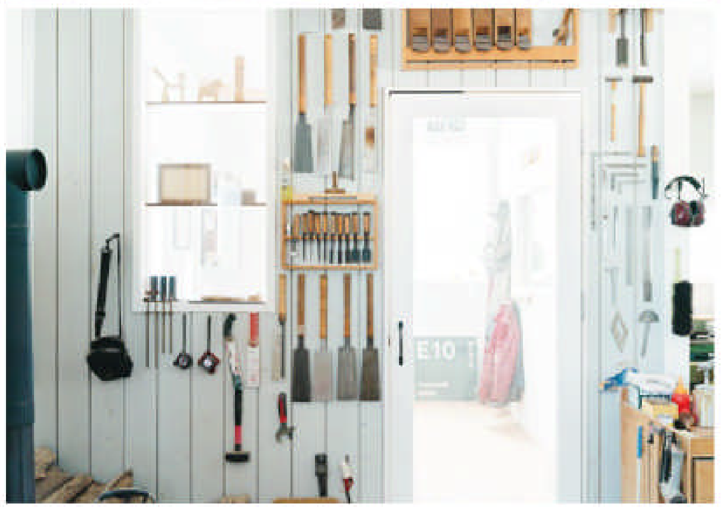
住居のリノベーションにあたり、古い梁を生かして趣を残しながらも、新しい木材も多用しつつ、冬場の寒さに耐えられるようにしっかりと断熱をした。「大工さんの手も借りつつ、自分でも手を加えていきました。最初はトイレも汲み取り式で、洗濯機もなくキャンプみたいな生活で、それを家族で楽しんでいました」と徹さんが語ってくれた。自らの家を補修したことで、自分の知識を確かめることにもなり、勉強にもなったそう。

また、住居のほかに、敷地内には徹さんの仕事場兼ゲストルームのある建物と、家具製作のできる工房と、全部で3つの建物がある。

ここに引っ越したことで、夫婦ともに住居と仕事場が近くなり、通勤時間がかからないこともあって、子育ても仕事もしやすくなったとか。釣り好きの徹さんにとっては、フライフィッシングができる清流も近くにあり、時間を見つけては釣りに通っているそう。自然と仕事と子育てと、バランスのよい田舎暮らしを家族で満喫している。

01.薪ストーブは、デンマークの〈モルソー〉のもので、インターネットで取り寄せた。家具製作の際に出る端材を薪として活用するので、薪には困らない。リビングの窓から庭のウッドデッキへと地続きのように同じ高さで繋がっており、友人とBBQをしたり、子どもがくつろぐスペースとなっている。ウッドデッキもひとつの部屋のように活用。　02.建物の外壁には、風合いのある木材を使用し、古い建物特有のよさを生かしたリノベーションだ。大きな樹にはブランコを取り付け、子どもたちの憩いの場所に。　03.窓辺にあるソファは、徹さんが手がけたもの。ほかにもライトやダイニングテーブルなど室内にある家具の多くが徹さん作だ。





01.ストーブ脇の薪入れは、徹さんがデザインしたもので、木材と鉄という異素材を組み合わせている。スタンド上部に天板がついているため、テーブルや棚として使用することも可能。東川町のふるさと納税の返礼品にもなっている。　02.リビングとダイニングキッチンだけの広々とした造りの1階部分にある大きめの納戸。アウトドア用品や野菜などをわかりやすく収納している。オープンシェルフが多く、見せつつも整理しやすくしている。　03.セキさんの仕事場は、コンパクトなデスク。デスク横の棚は、スッキリとして物を把握しやすく。長時間座るためのイスは、ソファのような座り心地の〈エーロ・サーリネン〉のもの。「仕事中にふっと見上げて窓の外を見ると、山がその時ごとの違う景色を見せてくれるんです」。　04.リビングにある大きな本棚も徹さんがデザインした。合板にペンキを塗っており、棚板を固定しておらず、すべてバラバラに分解できる仕様。　05.玄関部の土間を広めに作って、脱ぎ履きしやすいように。ドア横には、上着やスキーを置くスペースに。　06.寝室がある住居2階部分。徹さんの釣り道具をディスプレイ。壁に掛けられたリースは、庭で採れた素材でセキさんが製作したもの。　07.住居の向かい部分にある工房。ここには家具職人さんの事務所や家具を製作する機材などがあり、作業場となっている。　08.工房横にある徹さんの仕事場兼ゲストルームのある建物。ここにある家具も徹さんがデザインしたものが並び、ショールームとしての役目もある。遠方からやってきたゲストが宿泊できるスペースにもなっている。　09.工房内の一角には、家具職人の遠藤覚さんの事務所もあり、家具製作をするための工具を壁に並べ、使いやすくディスプレイしている。

住居にあるキッチンはオープンスタイルで、ゆとりを持って収納している。コンロ周りのタイルは夫妻が自ら貼ったもの。キッチンに洗濯機があるので、家事がやりやすくなっている。棚上に置かれたトマトソースは、庭で採れたトマトで作ったものだとか。

住宅向かいにある家具製作の工房部分。徹さんが手がけるプロダクトやオーダーの家具などがここで製作されている。東川町は家具づくりが盛んな地域で、近隣で採れた木材が使用されることも。自然豊かな土地の恵みを生かしたものづくりが行われている。

24

Living With
My Favorites

会社員
廣田雅人さん

SPEC

居住地域	：	大阪府大阪市
居住形態	：	マンション（分譲）
間取り	：	2LDK＋WIC＋ロフト
居住年数	：	1年2ヵ月
築年数	：	24年

この通り土間でメンテナンスに精を出すのはもちろん、廣田さん曰く「ギアを眺めているだけでも楽しい」。ちなみにラグもランプシェードもヴィンテージ。掘り出し物を探しに、南堀江の『70B』や東成区の『ウォント アンティーク ライフ ストア』をよく訪れるそう。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya　取材協力 【リノベる。Instagram】@renoveru　【廣田さん Instagram】@masato_camp

キャンプ好きこその土間も家族のリビングダイニングも、野外の趣を満点に。

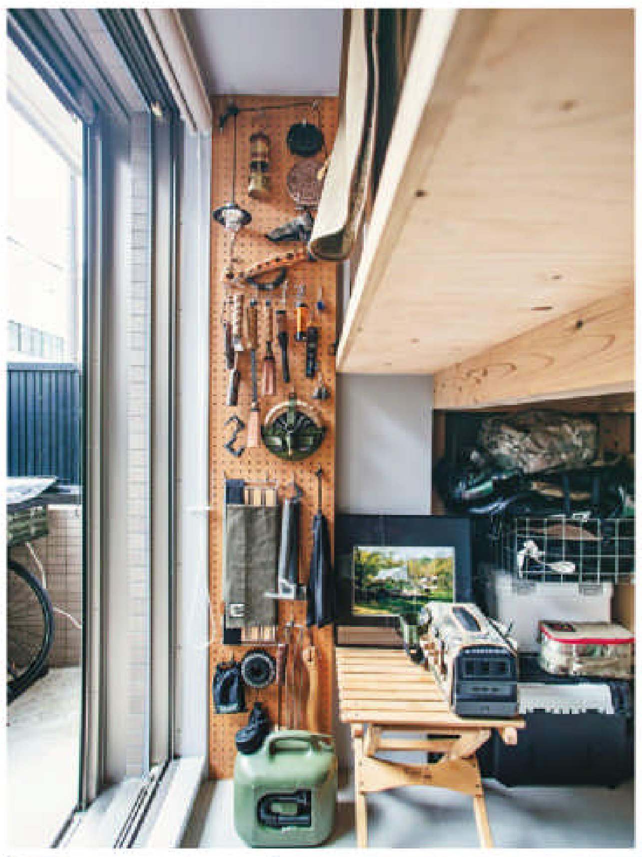
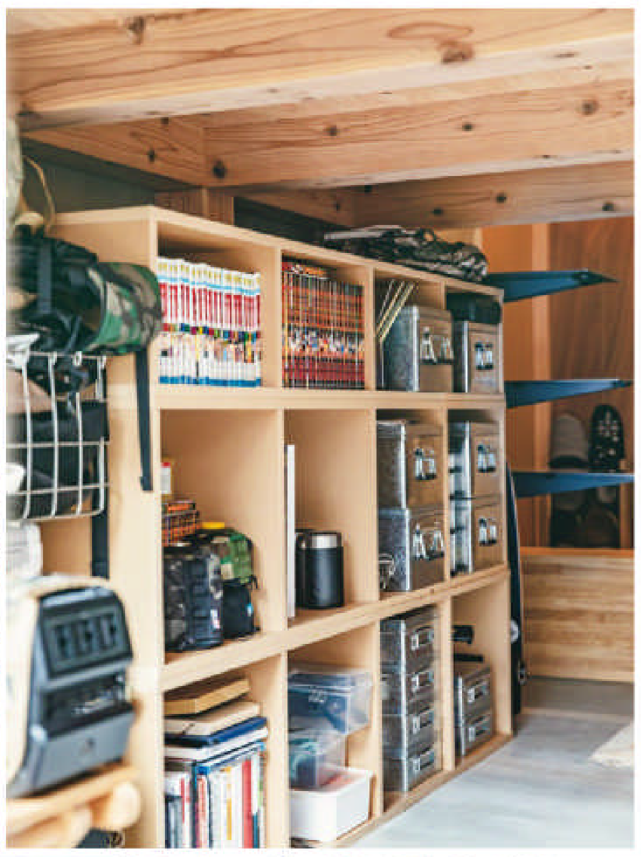
廣田さんがキャンプに魅了されたのは5年ほど前のこと。家族一緒に楽しめるアクティビティとして始めたはずが、今では関西から富士山麓まで遠征するほどのキャンプ好きだ。

多くのキャンパーがそうであるように廣田さんはギアへの愛情も深く、新たな住まいを選ぶにもギアの収納しやすさと持ち出しやすさを重視。「1階の特典ですよね。マンションでありながら庭だけでなく、個別の駐車スペースまで備えているんです」という利便性を決め手に新居を購入し、さらにはリノベーションを選択した。

かくして完成した住まいのこだわりは、玄関口に設けた通り土間。通り土間はギアの収納兼メンテナンススペースとして機能し、土間から駐車スペースまでは一直線。大物のギアも容易に車載できる動線を実現したばかりか、収納スペースの頭上にはロフトも完備。「土間もロフトも、自分の時間に没頭できる場所です」と話してくれたが、家族が憩うリビングダイニングにも外遊び好きの香りが漂う。

部屋に外遊び好きのニュアンスをもたらしているのは「キャンプにハマって以降、どうにも自然が恋しくて」という廣田さんの心情を表すようなグリーンの数々。植物を飾るためにリノベーションの段階からハンギングレールを設置し、まるで宙に浮くようなディスプレイがハイセンスだ。

植物のひとつひとつが躍動感を感じさせるが、部屋の壁はインダストリアルの象徴たるコンクリート打ちっ放し。「グリーンの表情を生かすため、壁は無機質な印象にしたかったんです」という廣田さんの狙いが見事に功を奏し、互いのコントラストがアウトドアの表情を引き立てている。

01 02
03 04 05 06
07 08 09

01. 大物のテントやタープは駐車スペースに面した窓際に収納し、車載を容易に。 **02.** グリーンのみならず、ウッドの家具も打ちっ放しの壁とのコントラストを際立たせている。 **03.** 特にお気に入りのギアは、リノベーション時に設置した有孔ボードに見せる収納。アウトドアショップのディスプレイを参考に、縦長のシルエットがハイセンスだ。 **04.** 通り土間は廣田さんのマイスペース。ギアのほかに愛読する漫画や雑誌も並び、ラックも細々としたアイテムを収納したボックスも、ともに『無印良品』のプロダクト。 **05.** こちらが通り土間の上に位置するロフト。天井高は低いながらも4、5人が集える広さがあり、キャンプ仲間を招いては会話に花を咲かせるとのこと。 **06.** ギアのなかでも、とりわけランタンやバーナーを愛する廣田さん。1987年製の〈テリー〉 X246Bに象徴されるように、特にヴィンテージに目がない。 **07.** キャンプだけでなく、料理も趣味だという廣田さん。キッチンにもこだわり、システムキッチンはオーブン付き。ワークトップも広々と機能性重視のデザインだが、このスマートさも植物とのコントラストに。 **08.** 庭もキャンプのイメージが引き立つウッドデッキ仕様。チェアの足元にはホットカーペットを敷き、裸足でチルできる環境に。ちなみにテーブルにセットしたLEDランタンは、炎さながらの灯りを楽しめる〈アンビエンテック〉のターンプラス。廣田さんのお気に入りだ。 **09.** ビカクシダにトラディスカンチア、ネオレゲリアのファイヤーボールといった多様な品種が顔を出し、ハンギングの方法も長さも多彩。この微妙な違いが部屋にリズムをもたらしている。

25

Living With
My Favorites

インテリアコーディネーター
鈴木琢人さん

SPEC

- 居住地域 ： 東京都目黒区
- 居住形態 ： アパート（賃貸）
- 間取り ： 1DK
- 居住年数 ： 2年6ヵ月
- 築年数 ： 不明

好きなものを好きなように、ぎゅっと詰め込んだインテリア。それでも不思議とまとまりがあるのはプロの感覚ともうひとつ、「どんなアイテムに対しても、根底にある"好き"が一貫しているから」。鈴木さんの一貫した好みは「生産の背景に物語のあるヴィンテージ」。

日の当たる窓際で縦横無尽に枝葉を伸ばすグリーンと〈ルイスポールセン〉のペンダントライトがもたらす"違和感"。確かに植物と照明がなければ、まったく印象が違うはずだ。ちなみにグリーンを飾るときのこだわりは「ラフでありながらも、かっこよく見せること」。

直線的な家具の空間に独特なムードをプラスする、植物と照明の“違和感”。

鈴木さんの住まいは7畳と8畳から成る1DKの間取り。計15畳の空間に家具や雑貨が凝縮されているも不思議と圧迫感はなく、むしろ独特の居心地のよささえ漂う。その理由はどこにあるのか尋ねてみると「好きなものを、好きなように詰め込んだだけ」という答えが返ってきたが、鈴木さんはインテリアコーディネーター。要は空間設計のプロだ。自由気ままに詰め込んだインテリアにも、プロの感覚が息づいている。

「ベッドもチェストもテーブルも、その多くが四角いシルエットをしていますよね。でも、直線的な家具ばかりでは、どこか物足りない感じ。そこに〝違和感〟をプラスすることで、部屋の印象ががらりと変わるんです」。鈴木さんの言う〝違和感〟をもたらすのが、植物と照明だ。予測不能に枝葉を伸ばすグリーンが部屋にみずみずしいアクセントをプラスしてくれるが、照明が与えてくれる〝違和感〟は遊び心とも言い換えられる。

ウッドの家具とグリーンが織りなす部屋の照明に、鈴木さんは〈ルイスポールセン〉のオービターをセレクト。このオービターだが、そもそもは街路灯、つまりは屋外用の照明としてデザインされた経緯を持つ。そしてダイニングにセットしたノーブランドの照明は空間設計のセオリーを無視し、あえてコードを長く採る形でコーディネートしている。

屋外照明のルーツを持つライトにも、通常以上にコードを長く採ったライトにも、いずれにも共通するのが〝違和感〟。この〝違和感〟が遊び心となり、生き生きと枝葉を伸ばす植物と共に、部屋に唯一無二の表情と居心地のよさをもたらしている。

01 02 03 04
05 06 07
08 09

01. 壁を彩っているのは、ポルトガルの伝統的な織物技術と高いデザイン性が融合した〈グール〉のラグ。額縁にドライフラワーを吊るし、絵画のように見せるアイデアもさすがはインテリアコーディネーターだ。　**02.** アウトドア好きでもある鈴木さんは、主にテント泊登山を楽しむことが多いそう。ゆえに所有するギアは軽さ重視のコンパクトなものが多く、ラックとバンカーズボックスにぎゅっと収納。　**03.** ユーズドのウォールハンガーには、植物の水やりグッズやブルートゥースのスピーカーをハンギング。　**04.** パソコンデスクとして使用しているのは、デンマーク製ヴィンテージのビューロー。「潔いまでの四角いフォルムにひと目惚れ。機能性も抜群です」。　**05.** キリムのラグは『スプリングヴァレー』からセレクト。ベッドに面してレイアウトしたサイドテーブルは〈アーコール〉のプロダクトだ。　**06.** 「グリーンは日の当たる場所に置くことが絶対条件」。すくすくと生長できる場所に飾ってこそ、植物の魅力が生きる。　**07.** いかにも年季の入った小箱の上にあるのは、無垢の天然木を用いたレジンバードオブジェ。小箱の隣は水タバコ、マスクを引っ掛けているのは「購入したものの挫折してしまったスケボーデッキ」とのこと。　**08.** 部屋にポップなアクセントを添えているのは〈USMハラー〉のサイドボード。カスタムオーダーを利用し、サイズも形もカラーも自分好みに。　**09.** チェストはハンス・J・ウェグナー、テーブルはアルネ・ヤコブセン、チェアはヤコブセンのドロップチェアとボーエ・モーエンセンのJ39。いずれも名品だが、そこにも照明の“違和感”をプラス。コードを長く採った遊び心が、部屋の表情を豊かにしている。

26

Living With
My Favorites

ファッションブランドPR
西方拓己さん

SPEC

居住地域 ： 埼玉県さいたま市
居住形態 ： マンション（持ち家）
間取り ： 1LDK
居住年数 ： 6年
築年数 ： 35年

フルリノベーションで実現した広いリビングは、白のベースにウッドとアイアンを取り入れ西海岸のテイストに。 写真奥のキッチンの場所には以前バスルームがあったとのこと。家事をしていてもリビングにいる子どもの様子が分かるよう大幅にレイアウトを変えている。

ファッションはほとんどアメリカブランドを着用しているというほどアメリカ好きの西方さん。棚にOSB合板を使用し、倉庫感を漂わせる大容量のストレージには〈ニューバランス〉、〈コンバース〉、〈ナイキ〉といったスニーカーが天井高くまで収納されていた。

フルリノベーションで実現した、アメリカンテイストの広いリビングと充実のストレージ。

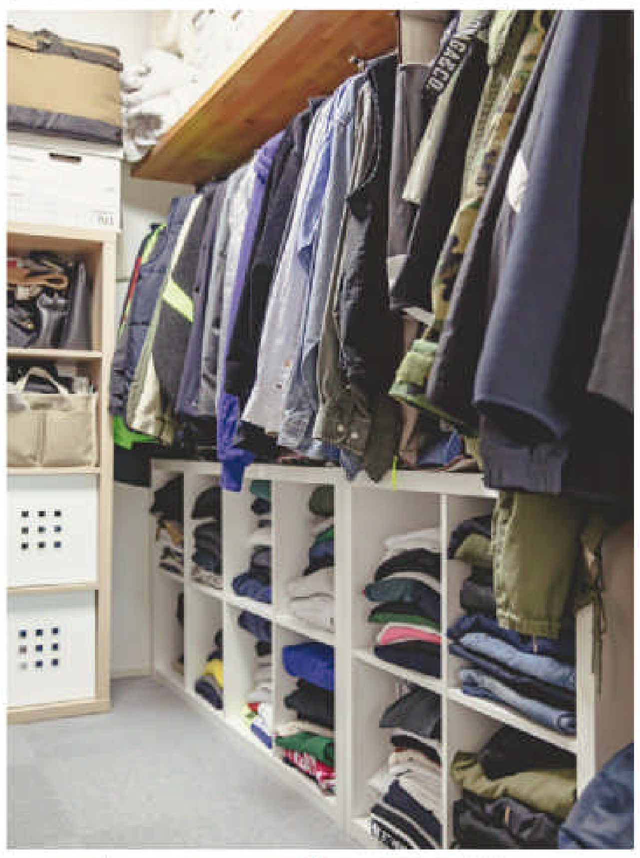
好きなテイストの住まいをつくり、趣味のアイテムを収納するスペースも十分にある。ファッションブランドでPRを務める西方さんは、そんな理想の空間をフルリノベーションで手に入れた。

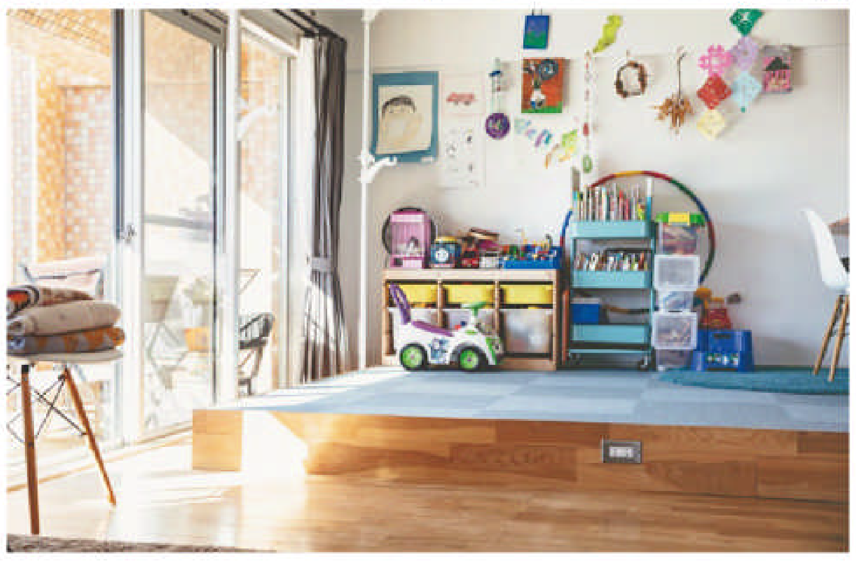
6年ほど前に購入したこちらのマンションは、もともと3LDKだった間取りを入居の際に1LDKに変更。職業柄もあり、多くの洋服やスニーカーを所有していたが、フルリノベによって収納問題も同時に解決した。

「居住スペースを広くしたかったので、以前あった和室をなくしリビングを大きくしました。あと必ず欲しかったのがウォークインクローゼット。隣にストレージも作り、洋服類やスニーカー、キャンプギアなどをすべてそこに収納しています」

昔からアメリカのファッションに親しんできたため、内装のテイストはもちろんアメリカ風。開放的なリビングは西海岸テイスト、一方ストレージなどはブルックリンをイメージし倉庫のような雰囲気に仕上げている。約25畳の広さを持ち採光性抜群のリビングの一角にはこあがりも設置し、子どもが遊べるスペースを創出。ウォークインクローゼットとストレージは、玄関脇にあったひと部屋を2分割して作っているのでどちらも大容量だ。収納の機能を拡散せずひとつのエリアにまとめたことで、居住スペースはスッキリとした広い空間となっている。

さらに時勢的にリモートワークが増え、以前より家で過ごす時間が多くなったことから、去年セカンドリノベーションを実施。ワークデスクの拡張や、キッチンのシェルフの増設などを行い、一層居心地のよい住まいになったようだ。





01.ワークスペースは、子どもたちの遊び場にしている小上がりの一角に配置。セカンドリノベーションによって、もともと備え付けていた天板の上により奥行きのある天板を増設した。 02.フルリノベ前は写真正面のスペースに和室があったそう。 細かい区切りを取り去り大きなリビングに変えたことで、日中はライトをつける必要がないほど採光性が高い。 03.サニタリーに置くロッカーはアメリカの学校や公共施設でも使用される〈リヨン〉製。「ひと目でアメリカを感じられるデザインで、家をリノベすると決めたときから買おうと思っていました」。 04.キッチン壁面の壁掛け収納は、ディアウォールで固定した1×4材に有孔ボードを組み合わせ自身でD.I.Y.。 05.フルリノベした際の目的のひとつがウォークインクローゼット。壁一面のハンガーにプラスして〈イケア〉のカラーボックスを置き収容量を大幅にアップ。「以前はもっと洋服が多くてギュウギュウでしたが、だいぶ減らしています（笑）」。 06.クローゼットとの壁を挟んで隣に位置するストレージには、〈P.F.S.〉にオーダーしたシェルフを設置しキャンプギアを収納。 07.セカンドリノベで増設したキッチンのシェルフにはキャンプ用のタンブラーの姿も。なかでも〈ハイドロフラスク〉のクーラーカップがお気に入り。「夏にキャンプで使った時に保冷力に感動して、家でもこれを使うようになりました」。 08.リビングの一部の小上がりは、壁を作らずともリビングの空間を緩やかに分ける効果も。 09.〈バリスティクス〉のSBSキットを脚として装着する〈アシモクラフツ〉のテーブルは、家ではサボテンや観葉植物のディスプレイに活躍中。

27
Living With
My Favorites

インテリアスタイリスト
さかのまどかさん

インテリアショップオーナー／インテリアスタイリスト
武田真也さん

SPEC

居住地域 ： 東京都世田谷区
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： 3DK
居住年数 ： 2年8ヵ月
築年数 ： 約40年

この部屋を選んだ理由のひとつが「晴天の日には窓から富士山が見えるから」。とりわけ真也さんはアウトドア好きだが、外遊びが難しいステイホームの時期に白壁と白床を自作。壁の一面はペンキ、もう一面は漆喰というニュアンスの違いも部屋の表情を豊かにしている。

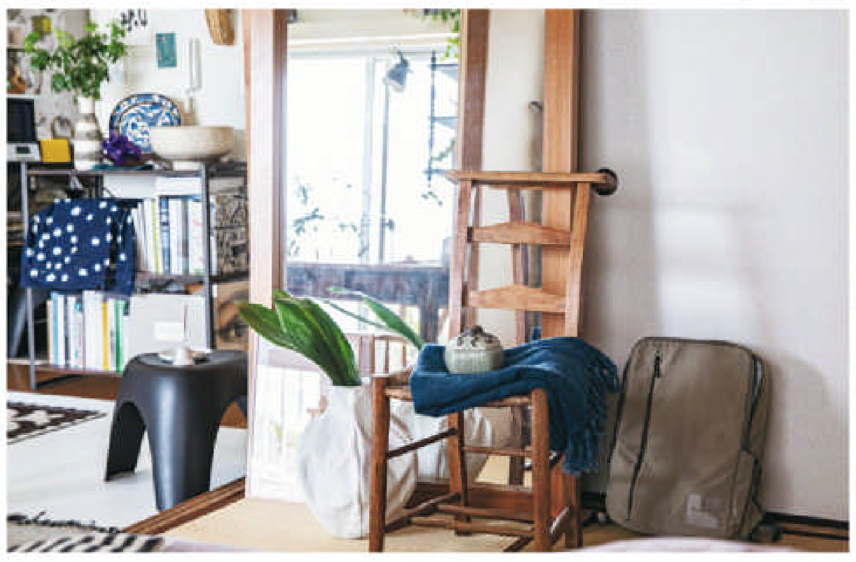
ファブリックもウォールラックに無造作に吊すだけで、白壁に映えるインテリアに。その手前にレイアウトされたソファとサイドテーブルは〈イームズ〉のプロダクト。植物が飾られた円卓はモロッコ製だが、天板と脚が分解でき、天板はプレートとしても活用できる仕様。

種々雑多な“好き”をひとつの絵として昇華させる、余白とグリーン。

まどかさんも真也さんも、夫妻は揃ってインテリアスタイリスト。ふたりが暮らす部屋のムードを大きく左右しているのが、D・I・Y.による白い壁と白い床だ。ビギナーにも使いやすいパーツを揃える〈ラブリコ〉の柱を噛ませる形で本来の壁に板を張り、その板を白く塗装。フローリングの床にも白くペンキ塗装した板を張っているが、この白という色が生み出すのが余白であり、スタイリングに欠かせないポイントだ。

「日本製だったりモロッコ製だったり、フランスやイギリスのヴィンテージだったり。うちにある家具や雑貨は、生産国もテイストもバラバラなんです」。家主の言葉どおり、アイテムのひとつひとつはどれもが個性に富んでいる。LDKのランプシェードはユニークなシルエットを描き出し、壁に飾られているのは色も風合いも異なる4枚のファブリック。さすがはインテリアを愛する夫妻とあってチェアも数種類をレイアウトし、エイジングの利いた各国のユーズドから作家の名品まで、まさに種々雑多の顔ぶれだが、これを調和させているのが余白。無垢にも通じる白の色味が一種の緩衝材となり、それぞれに表情の異なる家具や雑貨をひとつの絵としてまとめ上げている。

そしてもうひとつ、緩衝材の役目を果たしているのがグリーン。「植物は自然物。人工物ではないからこその不規則な、自由な枝葉の動きがプラスされることで、部屋全体を自然な表情に見せてくれるんです」。そう話すまどかさんの言葉どおり、夫妻の部屋はハイセンスながらも気取りは皆無。窓から差し込む日の光も相まって、なんとも居心地がいい。



01 02
03 04 05 06
07 08 09

01.賃貸の場合、壁にピンやクギを打つのは躊躇してしまうが、D.I.Y.の壁を設えれば心配無用。壁に設置したディスプレイラックは意外にも昔ながらの和家具。黒マットに塗装したところ、ヨーロッパ調の趣に。　02.ラタンのソファはフランス製だが、素材の統一感から畳の和室にもマッチ。　03.こちらのランプシェードは水草で作られたモロッコ製。水草と畳の素材感が調和し、やはり和室のベッドルームにも違和感なく映える。　04.ウッドフレームのシェードはオランダ製。照明をオンにするとフレームの影が白壁に投影され、影の模様もひとつのインテリアになる。　05.モロッコ製のシカのオブジェを筆頭に、器もプレートもフラワーベースもテイストは多種多様。　06.種々雑多なフラワーベースは、その多くがヴィンテージや作家による一点物。植物の購入先は生花市場のほか、青山の『フーガ』を利用することが多いそう。　07.ディスプレイとして使用しているのは〈ペジテ〉のオリジナルウッドプレート。古材を用い、木の欠けもそのままの風合いが美しく、まどかさんは黒塗りのタイプをセレクト。　08.まどかさん曰く「大きな鏡は部屋を広く見せてくれます」。ベッドルームに配した鏡も約90cm×180cmとかなりの大判。ちなみに、その手前に置かれたチェアはイギリスのアンティーク。大のイス好きである真也さんのコレクションとのこと。　09.真也さんのアウトドア好きを物語るのがストームケトル。小枝や木の実といった自然燃料で湯を沸かせる優れ物だが、この原型が生まれたのは100年以上も前のこと。クラシックなギアだけに、ヴィンテージを好む夫妻の部屋にマッチするのも納得だ。

28

Living With
My Favorites

イラストレーター
西田真魚さん

デザイン事務所を経て、イラストレーターとして独立。趣味は旅と山登り。少年期をインド、鎌倉などで過ごし、インドをはじめ、国内外に限らず旅をするそう。目下、行きたい国はアイスランド。「真魚という名前は、弘法大使 空海の幼名で、父が名付けてくれました」。

SPEC

居住地域	：	東京都中央区
居住形態	：	マンション
間取り	：	1R
居住年数	：	6年
築年数	：	41年

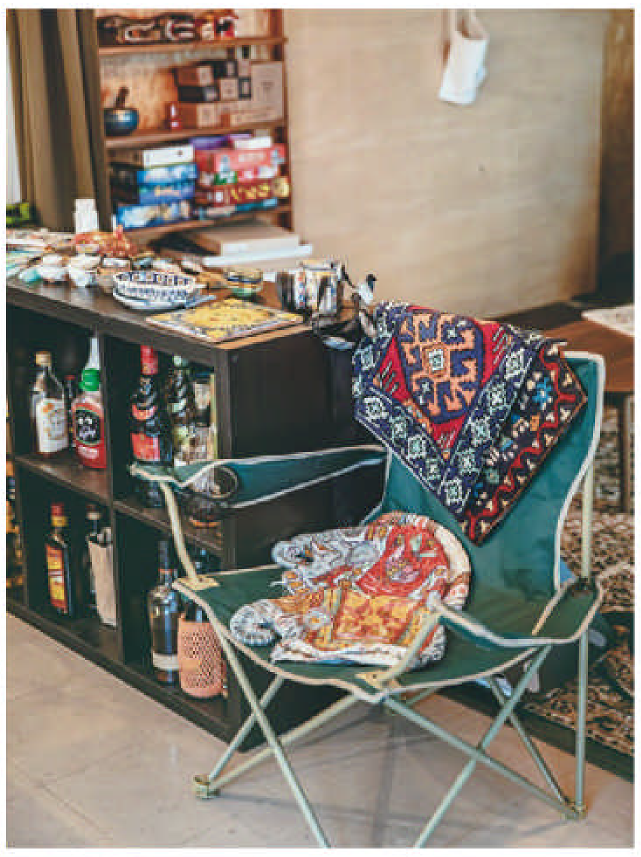
Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Tamaki Itakura　取材協力：【mao nishida illustration studio】https://www.maonishida.com

日常の中に山を感じたいと、山小屋をイメージ。

東京・銀座からほど近く、築地・新富町エリアにアトリエオフィスとして拠点を構えたのは2015年のこと。日本画家の父を持つ西田真魚さんは、現在、イラストレーターとして本や雑誌を初め、多方面で活躍する。ヴィンテージオフィスビルの一室の扉を開けると、これまで手掛けてきた色とりどりのイラストが360度見渡す限り、ずらりと飾られている。「このビル自体、親戚の会社が所有するものですが、その昔、日本画家の父もアトリエとして借りていた場所らしく、もし自分がアトリエを持つのなら、ここしかないなと思って。偶然にも空室だったことも乗じて、7年ほど前に借りました」。

父親の影響を受け、イラストレーターとして類まれな才能を発揮する西田さん。そんな彼は、自他共に認める旅好きであり、山好き。自身の職場でもあるアトリエは、好きな空間のひとつ、山小屋をイメージしたのだという。そのためフロアの奥にはマイテントが常時、張られており、実際に寝泊りも可能な装備もすべて揃っている。「内装はほぼD.I.Y.で仕上げたのですが、そのときはテントで仮眠しながら過ごすことが多かったです。古いオフィスビルということもあり、構造的に天井がやや低く設計されています。そのため、腰を下ろすサイズのテントを置くことや、照明を暗くして、天井の高さが気にならないように演出しています」。

この空間はクライアントや仲間を呼んで、好きな酒を酌み交しながら交流する場となる。デスク後ろに並べられたお気に入りの酒たちは、西田さんが想う理想の山小屋のイメージなのだろう。



01 02 03 04
05 06
07 08 09

01.ほどよく空間を灯すトルコモザイクランプは、谷中の『ザクロ らんぷ家』にて自ら作ったもの。「ガラスパーツの色や柄も自分好みに手軽に作ることができるのでオススメです」。　02.デスク後方に設置された棚には、この空間でクライアントや仲間と楽しむ酒が並ぶ。おもむろにアウトドアチェアに置かれたカラフルなテキスタイルは、インドで購入した象の刺繍のティーコージー。03.本来、旅が好きな西田さん。テントが張られた部屋の壁面の棚には、各国でお土産として手に入れた雑貨類が並ぶ。なかでもお気に入りは癒しの音を奏でるシンキングボウル。　04.トランクケースをスタッキングさせて作ったテーブル上には、自身が手がけたイラストや、掲載された雑誌や本が配置される。もちろんトランクケースは収納としても使用中。　05.フロア奥に張られたテントは、長年愛用してきた山岳テントで〈ニーモ・イクイップメント〉のタニLS 2P。　06.部屋の仕切りをほぼ無くし、奥行きのある空間に仕上げた。「イベントなどで似顔絵を描く際、対面しなければいけないため、使っていない額をリメイクして、透明のパーテンションを自作しました」。　07.自身の名前にちなみ、旅路にてつい購入してしまう魚モチーフの雑貨たち。カトラリーやプレートなど、オブジェとして楽しんでいることがほとんど。　08.部屋の仕切りがほとんどないスケルトンの状態から、OSB合板で壁を作り作品を額装して配置。主なテーマは旅、酒、おじさん、動物。　09.太陽がコミカルに描かれたタイルはポルトガルで購入。また旅に欠かすことができないカメラは、旅先で盗まれないようマスキングテープの上から塗装してエイジング。

29

Living With
My Favorites

会社員
小林剛蔵さん

美容師
綾子さん

SPEC

居住地域	：	東京都世田谷区
居住形態	：	マンション（分譲）
間取り	：	1LDK+WIC
居住年数	：	3年
築年数	：	49年

こちらのテレビボードは『ジャーナル スタンダード ファニチャー』のプロダクト。テレビボードに並んだ雑貨たちもヴィヴィッドだが、ただ闇雲にカラフルにはせず、イエローやオレンジ、レッドといった一定のカラーを用いるバランス感覚により、雑多な印象を回避している。

「色見本と何度もにらめっこしました」というドアや窓枠の塗装のみならず、〈イームズ〉のアームシェルチェアや〈アートワークスタジオ〉のランプシェードもヴィヴィッドなカラーリング。色の躍動感を白壁が受け止め、ポップでありながらもリラックスムードが漂っている。

Photo／Chie Kushibiki　Text／Kyoko Oya　取材協力：【Instagram】@iezo_kobayashi

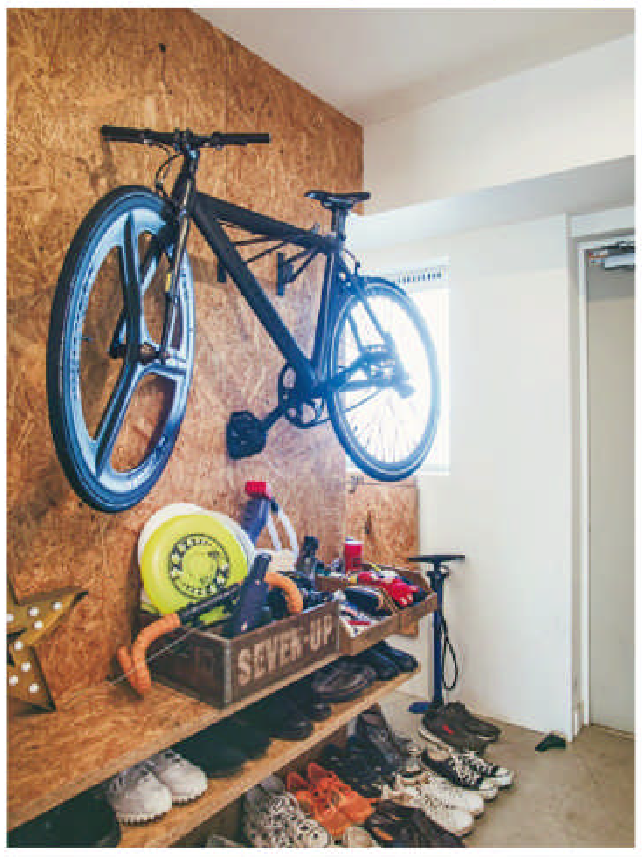
ポップにして無骨なバイクも溶け込む、リノベーションという最適解。

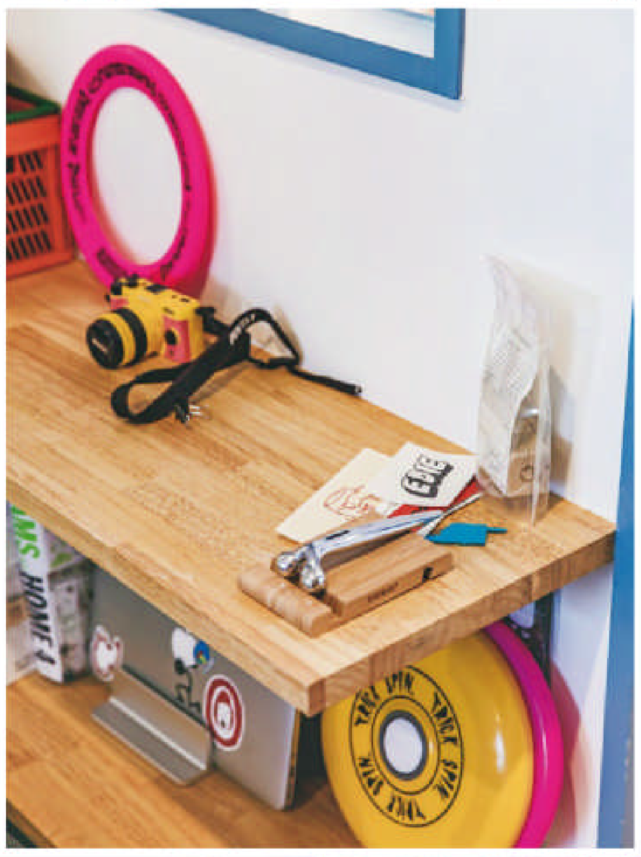
グリーンやイエローのドアに、ダスティブルーの窓枠。ホワイトの壁に映えるヴィヴィッドな配色が、小林さんの趣味を物語る。この見るからにポップなテイストを叶えたのは、ほかでもないリノベーション。賃貸を対象に住まい探しを始めるも、こだわり始めると止まらない。結果的に築50年に迫るヴィンテージマンションの一室を購入し、『リノべる。』と共に理想の住まいを完成させた。

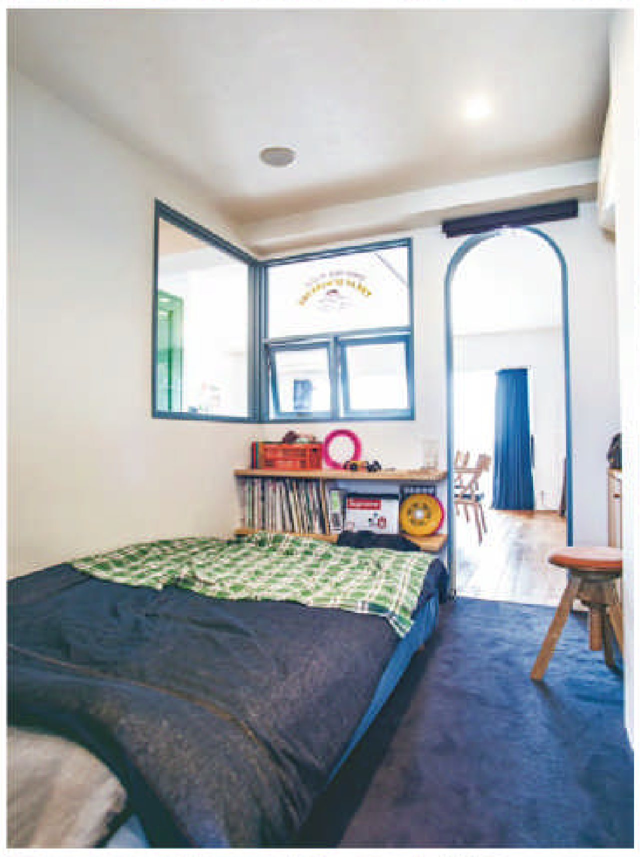
リノベーションに当たり、小林さんが掲げたテーマは〝色のある生活〟。ヴィヴィッドな配色はもちろん、キッチンに施したタイルやLDKからベッドルームに通じるアーチ型の入り口にも独自のセンスが光る。まさにテーマどおりの空間が広がるが、デザイナーとの打ち合わせを重ねるごとに自身の好みが明確となり、「自分がいかにポップなテイストが好きなのか、思い知ったような感覚ですね。これでも生活感を意識し、シックに抑えたつもりです」と笑う。

つまり小林さんにとってリノベーションという作業は、自らの映し鏡。生活の拠点となる場所ゆえに家主のすべてが反映され、小林さんはポップなデザイン性のみならず、暮らしやすさも抜かりなく重視。ベッドルームに扉を設けず、LDKともウォークインクローゼットともシームレスにつながる造りにしたのも、開放感と動線を考慮してのことだ。

そして玄関には家主のアクティブな趣味が見て取れる、壁掛けのサイクルディスプレイ。リノベーションによって自身の理想を妥協せずにとことん詰め込んだからこそ、どこか男っぽさの漂うピストバイクも、ポップな空間と違和感なく調和する。







01	02		
03	04	05	06
07	08	09	

01.キッチンの調味料類はワイヤーバスケットに収納し、生活感をカバー。さらには冷蔵庫とウォーターサーバーの背丈を揃え、スマートに見せている。　02.テレビボードに並んだ雑貨もポップ。ちなみにフリスビーにはGO OUT CAMPをきっかけにハマったとのこと。　03.モルタルの土間とOSBボードでコーディネートされた玄関。OSBボードの赤みがかった色調が〈リーダーバイク〉のピストにも、リビングのポップなテイストにもマッチする。　04.ベッドの足元には収納ラックを、枕元には小さなウォールシェルフを設置。自身の好みを詰め込めるのはもちろん、細部の利便性にまでこだわれるのもリノベーションの大きな魅力だ。　05.室内窓とアーチ型の入り口が印象的な寝室。室内窓を設けた理由はデザイン性ともうひとつ、マンションの12階から広がる景色を楽しむため。室内窓からリビングの窓を通じ、抜けのある眺望が目に入る。　06.動線を考慮し、クローゼットには寝室からも玄関からもアクセス可能な仕様に。ここで身支度を調えたまま、スムーズに外出できる。　07.キッチンの壁はサブウェイタイル。「造作のラックと高さが揃うよう、とにかく、寸法重視で選びました」というカップボードは〈ニコアンド ファニチャーアンドサプライ〉からセレクトしたそう。　08.玄関にはオープンスタイルのシューズラックを造作。細々としたアイテムの収納に便利なウッドボックスは『ダルトン』で購入。　09.「家具も妥協したくなかった」という小林さん、とりわけお気に入りなのが〈ヒラシマ〉のカウンターソファだ。プロダクトとしての美しさはもちろん、絶妙なネイビーのカラーが部屋に落ち着きをもたらしている。

30

Living With
My Favorites

研究員
林 煜欽さん

上.手前の革張りのソファも、奥に見えるアイアンキャビネットも『ジャーナル スタンダード ファニチャー』からセレクト。現在の住まいに暮らし始めてから約3年、どちらもすでに経年変化を見せ始め、いかにも育て甲斐がありそうだ。

下.リノベーションに当たり、林さんが選んだのが『リノベる。』と『ジャーナル スタンダード ファニチャー』のコラボレーションサービス。物件探しや改装はもちろん、家具や雑貨のセレクト、さらにはレイアウトのアドバイスも受けられる。

SPEC

居住地域	：	神奈川県横浜市
居住形態	：	マンション（分譲）
間取り	：	2LDK＋WIC
居住年数	：	3年2ヵ月
築年数	：	33年

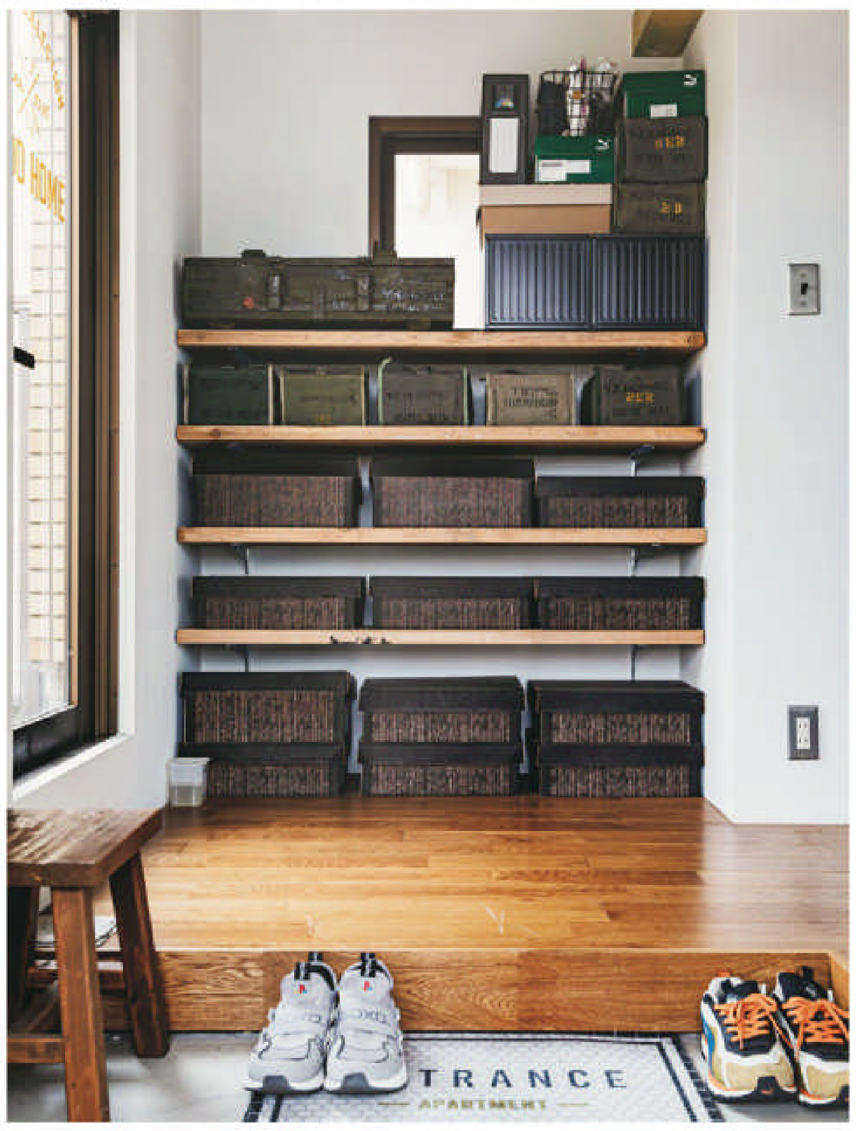
家具や雑貨もバルコニーの植物たちも、“育てる”を謳歌する暮らし。

林さんはイギリス育ち。築30年を超えるマンションの一室を購入し、リノベーションという選択をしたのも、「リノベーションならロンドンでよく見掛けた、倉庫を改修したような内装も可能と知ったから」だという。

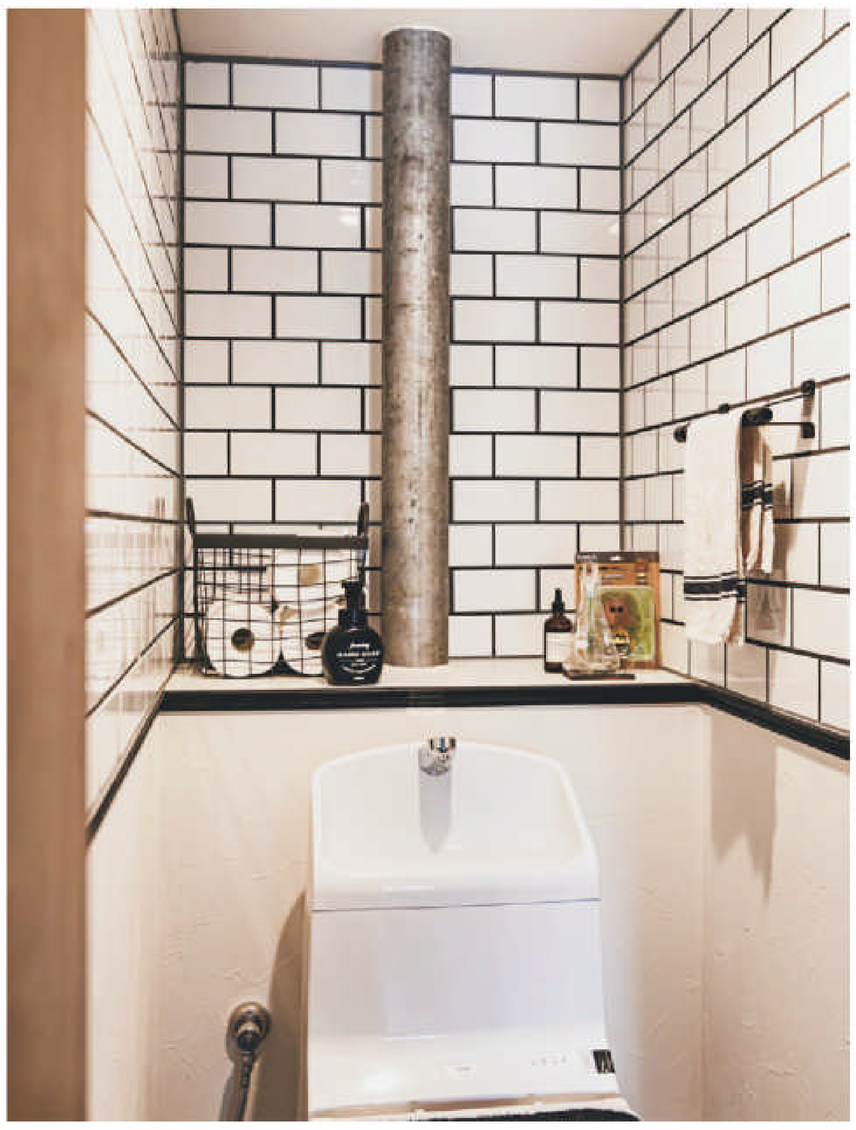
〝ロンドンの倉庫〟というフレーズから分かるとおり、林さんが理想とするインテリアは年季の入ったインダストリアル。打ちっ放しの天井や赤茶けたレンガの壁が家主の好みを物語り、そこにコーディネートされた家具や雑貨は「新品なのに新品じゃない感じ。どこかヴィンテージっぽく、使い込むほどに味わいが増すようなアイテムが好きなんです」。

そう話す林さんがリノベーションを依頼したのが『リノベる。』と『ジャーナル スタンダード ファニチャー』によるコラボレーションサービス。読者にもおなじみだろう、後者は〝ヴィンテージを現代風に解釈したスタンダードなアイテム〟をコンセプトに掲げるインテリアショップだ。まさに家主の好みにぴったりの家具や雑貨が揃い、その〝新品なのに新品じゃない感じ〟は無論、ヴィンテージマンションによく似合う。

さらにリノベーションともうひとつ、現在の住まいを購入する決め手となったのがバルコニーの存在だ。部屋の4面にバルコニーが設えられ、「ここに住み始めてからグリーンが趣味になりました」というのも納得。林さんが愛情いっぱいに育てる植物は日当たり抜群のバルコニーですくすくと生長し、同時にお気に入りの家具や雑貨も変化の真っ最中。ヴィンテージの趣あふれるアイテムたちは家主によって使い込まれ、さらに味わい深くエイジングされていく。



01.キッチンの腰壁はコンクリート素材。「最初はステンレスを考えていたものの、コスト面で断念したんです。でも今は、すごく気に入っています」。その理由は経年によって入る小さな傷。ちなみにいかにもインダストリアルなダイニングの照明は『アクメ ファニチャー』のプロダクトだ。　02.ヴィンテージのみならず、ミリタリーテイストにも目がないという林さん。こちらの軍用コンテナは『ダルトン』からセレクトしたそうだが、ミリタリーの趣を漂わせるのと同時に、壁際の配線を隠す役目も担っているというから真似したいアイデア。　03.シンプルにまとめられたベッドルームにも無骨なキャビネットやアイアンフレームのベッドをレイアウトし、ほかにインダストリアルの香りがする空間に仕上げている。　04.玄関のラックはリノベーション時の造り付け。〈プエブコ〉の布製ボックスや木目調のバンカーズボックスが並び、中味はすべてが靴だそう。ボックスに"隠す"ことにより、統一感ある印象を叶えている。　05.ベッドルームに生じたデッドスペースにハンガーパイプを設置し、ちょっとしたクローゼットとして活用。床に積み重なった軍用コンテナも『ダルトン』で購入したそうだが、ミリタリーこその無骨な重厚さが打ちっ放しの天井にマッチする。



06.トイレにもこだわり、ホワイトのタイルを基調とした空間にも、インダストリアルのエッセンスをプラス。あえて背面の壁を抜くことで鉄製のパイプを剥き出しにしているが、リノベーションならではのインテリアだ。クリーンさと無骨さがいい塩梅に同居している。　07."ロンドンの倉庫"のイメージを象徴するのが、こちらのレンガの壁だろう。赤茶けたレンガの色味がエイジングを感じさせ、やはり『ジャーナル スタンダード ファニチャー』からセレクトしたヴィンテージ風のキャビネットもよく似合う。　08.こちらが住まい選びの決め手となった、日当たり抜群のバルコニー。林さんが手塩にかけて育てるグリーンがみずみずしく、オリーブやローズマリーといった品種は料理に使うこともあるそうだ。

Editor in chief
Takuro Seki

Editor
Masashi Echigo（RIDE MEDIA&DESIGN inc.）
Shiyori Kawamura（RIDE MEDIA&DESIGN inc.）

Advertising staff
Tomoaki Suzuki
Gakuji Onozato
Mamoru Takahashi
Yasuyuki Abe
Hiroaki Takahashi
Yui Okutani
Kotoe Nakahata
Moe Noguchi
Tomohiro Ohta
Masafumi Takahashi

Designer
EISU（RIDE MEDIA&DESIGN inc.）

Producer
Mitsuru Takeshita

Creative Director
Osaka Umeda（60MW）

web.goout.jp

GO OUT の公式ウェブサイト、毎日更新中!!
公式 SNS も絶賛稼働中です。

公式Facebook
GO OUT Magazine
GO OUT Online
GO OUT CAMP

公式twitter
@ GOOUTmagazine
@ goout_onlie
@ goout_camp

公式Instagram
@ gooutjpn
@ gooutonline

ニューズムック
GO OUT Livin' Vol.16
2022 年 3月 11日発行

発行人：伊藤 秀伸
編集人：関 拓朗
印刷所：図書印刷株式会社
発行所：株式会社三栄
〒 160-8461 東京都新宿区新宿 6-27-30 新宿イーストサイドスクエア 7F
広告　tel：03-6897-4622
編集　tel：03-6303-1609（ロクマルマガジンワークス）
受注センター　tel：048-988-6011　fax：048-988-7651
販売　tel：03-6897-4611

定価：1100円（本体 1000 円 + 税 10%）

■本誌掲載記事・写真などの無断掲載、複写を禁じます。

ROOT CO.

WE ARE A MOBILE GEAR BRAND

info@root-co.net http://root-co.net/ root_co_official

ニューズムック　GO OUT Livin' Vol.16　2022年3月11日発行
発行人：伊藤 秀伸　編集人：関 拓朗　発行所：株式会社三栄　〒160-8461 東京都新宿区新宿6-27-30 新宿イーストサイドスクエア7F　広告 TEL03-6897-4622　受注センター TEL048-988-6011 FAX048-988-7651　販売 TEL03-6897-4611

9784779645518

定価：1100円（本体:1000円＋税10%）

1929476010001

雑誌 66730-64
SAN-EI CORPORATION
PRINTED IN JAPAN 図書印刷

ISBN 978-4-7796-4551-8
C9476 ¥1000E